

GAP JAPAN NEWSLETTER



UFOと宇宙哲学の専門誌

コンタクティー

UFO contactee

ハケ岳に出現した円盤

富士山麓にUFO頻出

金星文字解読研究

ノアの箱舟とアブラハム

アステロイド帯と月のクレーター

AUGUST
1985

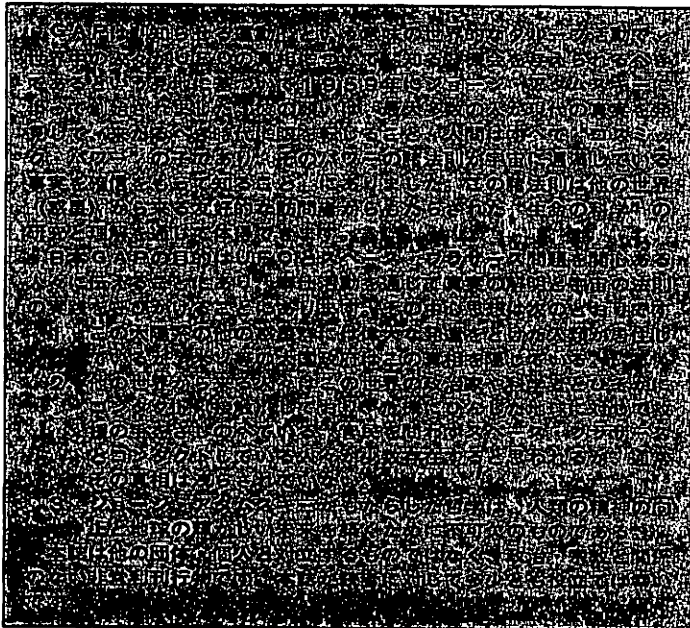
89



〈巻頭頁〉 意識の拡大	1
八ヶ岳に出現した円盤	秋山京子 2
富士山麓にUFO頻出	高梨和明 6
車山高原で円盤を撮影	野口敏治 8
金星文字解読研究	遠藤昭則 10
不思議な人間の運命	上原則子 18
アダムスキー問題を少年少女たちへ伝えよう	益子裕司 19
アダムスキー講座で活躍するダニエル・ロス氏	20
ノアの箱舟とアブラハム	久保田八郎 22
『ムーンゲート』第12章 消命死と他	ウィリアム・L・ブライアン 26
〈投稿欄〉 ユーコン広場	32
東京UFO写真展盛況／〈報告〉 松山支部大会	36
〈予告〉 60年度地方支部大会(2)	37
〈広告〉 エジプト・エルサレム宇宙考古学の旅	38
〈広告〉 アダムスキー全集	39
全国支部月例研究会案内	40



GAPとは



■表紙写真は、筒井徹撮影の富士山の写真にUFOの軌跡を描き入れたもの。本号掲載記事「富士山麓にUFO頻出」を参照。

★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。
全記事・写真共他の印刷物への無断転載を禁じます。

本誌前号(88号)に掲載した「驚異の高松市円盤降下事件」は大センセーションを起し、驚愕と感動の嵐が渦巻いた。編者の通報により日本テレビの旧知のディレクター矢追純一氏は数名のスタッフと共に一月十二日、現地を訪れて奈生ちゃんにインタビューし、事件当時の模様を再現してビデオに収録した。この取材結果はすぐ放映されるはずだったが、局内の事情により四月以降に延期された。日取りは未定だがイレブンPMで放映の予定と矢追氏から聞いている。

これが放映されれば全国で大反響が起こるだろう。アダムスキー撮影の円盤と

〈巻頭言〉 意識の拡大



全く同型のUFOが三十三年後に事もあろうに日本の四国に出現したという事実、反アダムスキー的な人々には驚天動地の大事件であろう。顔色を失って狼狽するこの人々には気の毒だが、事実なのだから仕方がない。これを機会に認識を改めるようおすすぬしたい。

厳然たる真実を前にして否定し続けることのむなしさは、太平洋戦争中の日本帝国大本営の虚偽に満ちた発表でいやというほど思い知らされている。戦後になつて真相が次々と暴露されたとき、報道関係の旧軍人たちは一斉に頬かぶりをし、こそこそと隠れてしまった。なかには戦

犯として処罰されたものもいる。

話をもどるが、矢追氏のチームが高松で取材中、不思議なことが発生した。これについては本号31頁の囲み記事を参照されたい。UFOの観測中、こうした奇妙な出来事が起こることがよくある。おそらく上空からはスペース・ビープルが何もかも見通して、事態がうまく進展するように何らかの配慮と操作をしているのだろう。

こうしたことをすべて偶然の一致としかたづけるのは洞察力がなすぎるといふよりもむしろ誤った教育に毒されて頭が固まりすぎているからだろう。現代人の思考傾向が学校教育で左右されることは論をまたない。教壇に立つ先生が、太陽系には惑星が九個しかない、人間が住んでいるのは地球だけだ、と言えば、生徒は「一も二もなくその言葉を信じ込む」。学校の先生がそう言ったから」と、まるで神の言葉を聞いたかのように絶対視するのである。学校教育の実態については教師経験のある編者によくわかつているつもりだが、現段階の世界ではやむを得ない面もあるだろう。

ただし同じ学校教師でも本号の「ユークン広場」にあるように新潟県の岩崎節子先生のごとく素晴らしい指導者もいる。こんな先生に宇宙的な教えを受ける子供たちは幸せである。思考する世界の次元が普通の子供よりもまるで変わってくるからだ。それは良きカルマをつくるものになるだろう。

それはさておき、UFO問題——特にアダムスキー問題は今後緩慢ながらも確

実に大衆の中へ浸透してゆくだろう。アダムスキー型といわれる円盤が相変わらず出現するからだ。否定しようのないこの出現事件の続出は、いつか大國政府の認めることとなり、何らかの対策が講じられることになるだろう。

否、すでに米政府の一部高官連はアダムスキーの体験記の内容が真実であることを知っているが黙視しているといわれている。発表すれば世界的パニックが発生するからだ。これはむしろ賢明な態度であるといえよう。このことは今までに何度も述べてきたが、容易に理解してもらえないようだ。

UFOよりもっと切実な問題が山積しているのではないか、その解決が先決問題だという声もある。たしかにそのとおりで、たとえばアフリカの飢饉難民の救済や、環境汚染、核兵器廃絶その他いろいろある。しかし地球上の諸悪の根源は地球人自身の思考内容にあるのであつて、これを改善せぬ限り、どこをついても悪循環をくり返すだけである。もつと意識を拡大する必要がある。

つまり人間が住むのは地球だけだと考へる井蛙の見に墮した現状から脱却し、想像を絶した高度な文明をもつ別な惑星を引つ張り出さないことには救いようはないと思えないのだ。この世界の貧弱な貨幣経済、思想、哲学などは、すべて地球という一惑星の狭い枠の中で形成されたもので、広大な宇宙に通じるものではない。地動説が天動説にとつてかわつて久しいが、地球人にとつての宇宙は依然として地球という天体とそれを取り

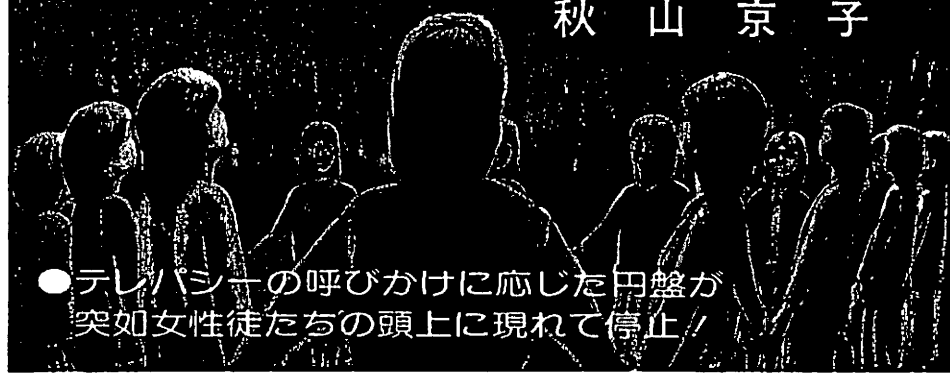
巻く大気圏だけである。天文学は発達したけれども学者は大國の宇宙開発機関の秘密ファイルから隔離されて、学者向け情報に慣らされている。だからいまもつて金星の地表は七氏四八〇度の焦熱地獄だと天文学書に書いたりする。金星探査機はパラシュートで軟着陸したというが、そんな焦熱地獄ならすさまじい上昇気流の渦巻きに煽られて着陸などできるはずがないことは素人でもわかるはずだ。

いま地球の学界は重大な事実に着目しそこねているような気がする。この太陽系には十二個の惑星があり、そのいずれにも高度な文明が存在し、心身共に神に近いほどの発達をとげた人類が平和裡に住んで天国のような生活をしているという事実をジョージ・アダムスキーが伝えなければ、彼の言明や詳細な体験記の裏に何かが秘められているのではないかと勘を働かせて社会の裏面を探索するような学者はいない。なぜか? 職場から追放されるからである。

したがってアダムスキーの著書にひそかに関心をもちながらも黙視している学者、評論家、文化人、芸能人はかなりいると思われるが、この人たちはけつしてコメントしない。これもある意味では賢明な態度と言えりかもしれない。アダムスキーを否定してやたらと騒ぎ立てるのは学者よりも素人研究者であるように思う。しかし、学者ではないにしても、アダムスキー問題を多年研究しUFO問題に精通している読者はこの面では堂々たる専門家であるから、隠することなく啓蒙運動に挺身されたい。

八ヶ岳に出現した円盤

秋山京子



●テレパシーの呼びかけに応じた円盤が突如女性徒たちの頭上に現れて停止！

私がUFOを目撃したのは一九七四年（昭和四十九年）のことです。今から思うと、ちょうどオカルトブームで世の中が沸いていた頃でした。当時はユリ・ゲラーに始まったスプーン曲げ論争や多発した各地のUFO目撃で、未知なるもの、神秘的なものに魅かれる強い傾向が人々の心の中にあつたようです。

それは石油ショックとアメリカのベトナム戦争敗北ムードの中にある厭世傾向に伴って広がりがだしたオカルティズムが日本に輸入されてきたのが発端のようです。物質や武器力だけでは分裂しか招かないことに人間は気づき始めたのでしようか。このオカルトブームはあつという間に

世の中に広まり、浸透していきました。この年の四月には北海道北見市の青年がUFOに乗った宇宙人とコンタクトし、他の惑星に行ったと証言し、テレビでも放映され、話題になりました。私もこれには驚いたものです。また超能力やUFOに関する本も数多く出版され、書店に特別のコーナーが設けられるほどまでになりました。

変わったものを好んだ私

そもそも私がUFOに興味を持ったのは、それより二、三年前、少年雑誌に載る特集記事やテレビの特別番組を見てからです。当時から私には一風変わったものが好きになる傾向がありましたので、とても変わっているUFOに心がひかれたのです。しかもその正体が誰にも解明できないことも興味をひかれたもう一つの理由でしょう。

でもその頃実際に超能力を体験したとか、UFOを目撃したということは全くありませんでした。でもあいかわらずUFOの本や超能力関係の本は読み続け、いくら読んであきませんでした。

八ヶ岳での夏季合宿

それでは次に一九七四年の夏に私が目撃したUFOについて述べてみたいと思います。

私たちの高校は長野県の八ヶ岳に夏季施設があり、各クラブの合宿は毎年ここで行われていました。その時ちょうど同

じ時期に合宿をしていたのは、演劇部、鼓笛部、そして私の属していた漫画同好会の三つのクラブでした。

私は当時、漫画同好会の部長をしており、演劇部の部長の中里寿子さんと高校二年のとき同じクラスになり、趣味が同じであることもあって親しくなりました。彼女はUFOや超能力や恐竜がとて也喜欢だったのでした。

その彼女からUFOはテレパシーで呼ぶことによつて見ることができるということを初めて教えてもらいました。私は初耳だったのでびっくりしましたが、彼女はのやり方で以前にも二度ほどUFOを目撃したことがあると言いました。そのときの様子をまずお話ししたいと思います。

中里さん、テレパシーで送信してUFOを見る

八ヶ岳へ行く一年前の一九七三年八月二十三日の午前一時五分頃のことです。場所は東京文京区にある私たちの高校の屋上でした。彼女は友人たちと一緒に、UFOに「現れてください」とテレパシーで呼びかけていました。

すると二、三分後に流線型の輝く物体が上空に現れ、五分ぐらいにわたって飛行し続けたとのこと。途中、単行本くらいの大きさにまで接近した時もあったそうです。物体の光は星の何十倍もの輝きであったということです。

もう一つは一九七四年の三月三日のことです。友人からある本にUFOの飛行予告が載っていたのを読み、当日自宅の

物干しに上がって彼女は待っていたそうです。

午後二時五十分になって帽子型のUFOが現れました。UFOは教科書大の大きさで、黒ずんだ灰色をしていたということです。この日は快晴であったため、UFOをかかりはつきり見ることができたとのことです。UFOは約十秒間南東から南西に向かって飛行しました。飛行予告は本当は午後三時だったのですが、少し早くから観測を始め、目撃できたということです。

私はこの話を聞いたとき、本当は半信半疑でした。ですから今度ぜひ一緒にUFOを呼び出してみようと彼女に誘われたとき、まさか本当にUFOが現れるとは思っていませんでした。そしてそれがアダムスキー型UFOに近いものであったとは、当時、UFOの写真は何度も見ていましたが、アダムスキー型は特に印象に残っていませんでした。

間もなく偶然にもお互いのクラブの合宿日と同じであることが解りました。私たちはそのときぜひテレバシーで呼び出す実験をしようと約束しました。

期待どおりに八ヶ岳でUFO出現！

私たちが八ヶ岳の中腹にある夏季施設に向かったのは八月二十八日のことです。当日の午後十一時三十分頃、自由時間になったので、いよいよUFOを呼んでみようということになり、宿舎に隣接する運動場に集まりました。私たちの漫画同好会から七名、演劇部から七名の部員が

参加しました。最初に皆で手をつないで輪になりました。そして一斉にテレバシーでUFOに現れてほしいと呼びかけたのです。

五分くらいたった頃のことです。ピカッと光が輝き、あたり一帯が一瞬明るくなりました。本来真つ暗闇であるはずのまわりの木々もぼんやりと明るく見えました。この不思議な発光が二、三度繰り返されたあとのことです。

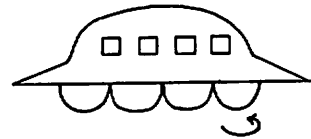
前方(東の方向)の空に星ではなくて何か光るものがあるのが解りました。それは光を放ちながら序々に私たちの方に接近してきました。光体はまっすぐに近づいて来るのではなく、夜の空をジグザグに右から左に、左から右に移動し、まるで折れ線グラフの線のような感じで飛行しながら、こちらにゆつくりと近づいて来るのです。

四角な窓と四つの球型ギヤー

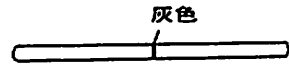
やがて前方五十メートルから七十メートルほどの空中にそれは止まり、私たちはその物体が通常の飛行物体ではないことを悟りました。

その物体の上部は深皿をさかさにしたような形で、底部には着陸ギヤー(装置)がついていたのです。それは球型で、四つほどがさかさまになって物体の底部にくっついていました。このギヤーから青白い光が発射しており、UFOが空中に停止しているとき、このギヤーはそれぞれが右方向に回り続けていました。

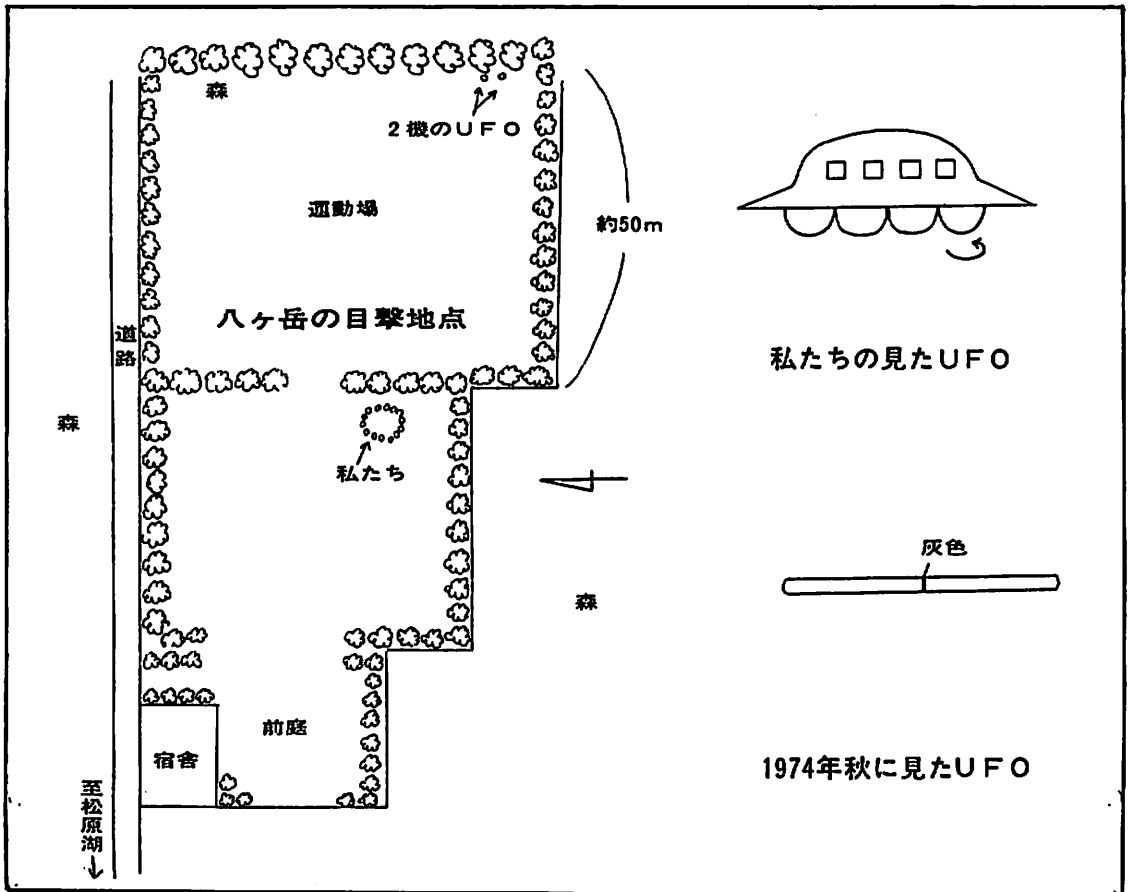
最初ジグザグ飛行をしながら私たちの



私たちの見たUFO



1974年秋に見たUFO



立っている場所に近づいて来たときは、ギヤーは回っていないかったのです。そしてこのギヤーが回っていたとき、「シユワ、シユワ、シユワ」という比較的静かな音が聞こえていました。これはおそらくギヤーから発せられた音だと思えます。

物体全体の色は白とオレンジ色をミックスしたような色でした。よく見るとそれは窓もついていた。形は正方形で、四、五個はあったと思います。窓一個分の大きさはギヤー一個分よりふたまわり小さいほどでした。普通の窓ガラスのような透明感があり、色は青色がかっており、ぼんやりと見えました。

二個の小型UFOも同時に出現

この物体の右下十メートルくらいのところに、きれいなオレンジ色をした二個の小さいUFOが並んで浮いていました。間隔は五センチくらいだったと思います。ちょうど電球くらいの大きさに見えました。このUFOは、アダムスキー型に似た大きな円盤が私たちに最も接近したとき、突然に現れたのです。

星とまったく違う点は、木の中程に浮かんでいたことです。このUFOが現れたとき、部員の小山裕子さんが「あのUFOは下に降りるのではないかしら」と言いました。これはなぜか私も思っていたことですので、どうかなく思っていたら、一分程後にその二機の小型UFOは真下にゆっくりと降りて行きました。二機とも同時でした。

降りた所は地面すれすれの所でした。

あくる朝、この小型UFOの痕跡が残っていないかどうかを確かめるために見に行ったとき、その付近には何も発見できませんでした。

観測を開始して二十分くらいした頃、まだUFOは空中に滞留していましたが、そろそろ戻らないと先生方が心配するかもしれないという意見が出ましたので、皆で急いで宿舎に帰りました。ですからこのうちUFOがどういう行動をしたのかは解りません。

この日は興奮してなかなか寝つけませんでした。あくる日、漫画同好会の部員の一人が、明け方近くに昨夜のUFOが窓の近くに来ていたと話してくれました。私はまったく気がつきませんでした。この話を聞いて怖くなってしまいました。

付近にUFO基地がある？

この八ヶ岳でUFOを見た人は私たちのほかにもいました。それは母校の教諭の太田先生でした。先生は、天頂近くにフラフラしながら星と星との間を飛んでいるUFOを生徒たちと発見したそうです。それは私たちと日時が違いますが、やはり夏休みの合宿中でのことでした。

もしかすると八ヶ岳付近にはUFOの基地があるのかもしれない。なにしろ私たちがUFOを呼んだとき、十分もせずに現れたのですから。この出来事は今思い出してみても、まるで魔法にかげられたような不思議なひとときでした。

私たちがテレバシーで呼び出しを開始したとき、つまり皆と手をつなぎ、UFO

Oに呼びかけていたとき、私の全身はガタガタと震えていました。本当に怖くて震えがしばらく止まらなかったのです。UFOが現れてからもこの震えは続き、十分程してやっとおさまりました。

もしあのまま私たちが宿舎に帰らず、あの場所にいたら、おそらくUFOはもつと接近して来て、着陸し、中から宇宙人が出てきて私たちに挨拶したかもしれないと皆であとで話しました。それほどUFOは近くにいるように感じられたのです。

UFOは私たちの願いに応じたのか

UFOがどういう目的で現れたのか私にはわかりませんでした。私たちはただ好奇心にかられてUFOを見たいと思っただけです。UFOは本当に存在するのか、テレバシーで呼ぶと本当に来るのか、彼らの目的は何なのか、こういう事を知りたくて私たちは実施したのです。

でも実際にUFOが現れて本当に驚いてしまいました。こういう体験は今までに一度もなかったし、まさか自分にごのような事が起こると思ってもみなかったからです。

ではなぜUFOは現れたのでしょうか。特に私たちが強いテレバシー能力を持っていたとも思えません(ESPカードでテレバシー実験をしても当たらないことが多かったからです)。そして、あらかじめUFOを呼ぶことを知っていたのは十人二人、三名しかいなかったのです。しかしUFOはすぐにやって来ました。

これは、その頃日本中にひんぱんにUFOが現れたこと、つまりUFOは当時日本にも注目し、日本の各地上空に滞留していたのかもしれない。特に世界的に見てもUFOが多発した時期でしたので、このような可能性もあるでしょう。

あるいはこれまでに二度もUFOを目撃した中里さんに注目している宇宙人が一緒に八ヶ岳まで来たのかもしれない(しかし彼女がそれ以前に見た二機のUFOとは形が違っていました)。

おそらくUFOに乗っている搭乗者は、私たちの微弱なテレバシー、UFOを見たいという私たちの願いに答えてくれたのでしょう。

少年の頃に超能力を持っていた子供が大人になるにつれてその能力を失ってしまふということをよく聞きます。私たちがUFOを目撃したのは高校の時でしたので、ちょうどエネルギーのボルテージが上がっていたときなのかもしれません。特に十数名の者が集まると、そのエネルギーは相当なものであったのかもしれない。

UFO飛来目的は何か

UFOは単に自分たちに興味を抱いている人々のところに飛んで来る傾向があるのかもしれない。このようにして現れるUFOは、まるでいつも私たちと一緒に存在している生命体のように見えます。彼らは私たちと同じように生き、私たちを観察しているのかもしれない。しかしUFOはなかなか姿を現さない

し、彼らの実体は本当のところよくわかりません。おそらくUFOの中には人間型宇宙人が乗っているのでしょうか、彼らはあまり姿を見せることが好きではないし、直接大勢の人たちとコンタクトはしないようです。

それは地球人の未熟な精神構造のためでしょうか。むかしアメリカのラジオドラマで、火星人が攻めて来ると放送しただけで、人々はパニックを起し、手にライフルを持ち、興奮のあまり周囲の人を射殺してしまったほどですから。

彼らはおそらく精神が安定している人だけに、こつそりとコンタクトしているのでしょうか。

しかしUFO飛来の本当の目的は一体何なのでしょう。今のところ私たちに危害を加えるような意図はないように思われます。むしろ私たち地球人を静かに観察し、次第に私たちの世界にその存在を浸透させてきている感じがします。

アダムスキーが語ったように、彼らはまるで親しい兄弟姉妹のように私たちを見守り、できれば援助したいと思っっているのかも知れません。

刻々と破壊に近づきつつあるこの地球を何とかしてアダムとイブの頃の楽園に戻してあげたいと思っっているのかもしれない。環境破壊、環境汚染の中にあつて苦しんでいる私たちを、どうにかして人間本来の生き方に返してあげたいと思っっているのではないのでしょうか。飢餓、貧困、戦争などはまさに私たちの心の中心をそのままあらわしているといつてもよいでしょう。

いつかは彼らの援助を受ける日が：

この危険な状況を援助したいと思っただけで、強制的にそれを行おうとは思いません。それにはまず自分たちの存在を認識してもらおうと思つたのでしよう。しかし地球の多くの人は見知らぬものに対して恐怖感を持っていきますから、ゆつくりと時間をかけて私たちが地球人の間で出現をくり返しているのかもしれない。

現在はいくくの人々がUFOの存在を既成の事実として受け入れてきているように思われます。それは特に若い人たちに多いようです。私たちはおそらく昔ほどにはUFOに対して恐怖を持たなくなつたのかもしれない。それは良い徴候でしょうし、おそらく宇宙人たちが喜んでいふことなのでしょう。未来は若者のためにあるのですから、より多くの若者に受け入れられることは素晴らしいことです。私たちがいつか彼らの援助を全面的に受け入れる時がくるのかもしれない。いつか彼らと意志を通じ合わせ、彼らと共にこの地球を再建するようになるかも知れません。

またもテレバシー送信に応えた？

ところで、この年の秋、私は一人で自宅の屋上で再びUFOに現れてほしいと呼びかけました。かなり長い間、そう二十分くらいたった頃でしょうか。流線型の銀色の物体が突然視野に飛び込んできました。私はちょうどそのとき座つてい

て、長い間念を集中していましたので、少し疲れてしまい、顔を伏せていました。ふと顔を上げると、流線型をした細長いUFOが東の空の雲間に現れました。そのUFOは飛びまわることなく、そのまますすぐ北の方向に飛行し、やがて再び雲の中に入って消えていきました。UFOの中央、ちょうど真中のところに灰色の線が縦に入っていました。このときには窓は見えませんでした。

この地域の上空には航空機も飛びますが、それらの大きさは二つのUFOに比べるとかなり小さく、またライトが点滅をしていますがそれとわかつます。このUFOは点滅せず、また昼間でしたので、形もはっきりと解りました。空は快晴でしたが東の空にだけ厚い雲が垂れこめていました。

このように私のUFO目撃はたいへんエキサイティングなものでした。この体験があつてから私はより一層UFOや超常現象に興味を持つようになりました。UFO関係の会合に出席したり、色々な人に会いに行つたりもしました。

アダムスキーの著書で啓発される

そんな私の愛読誌の一つに「UFOと宇宙」誌がありました(久保田八郎編集・ユニバース出版社発行。その後廃刊)。この雑誌の読者の投書欄によくアダムスキーの哲学について多くの人々が語っていました。私はとても興味をひかれ、当時高文社から発行されていたアダムスキーの著書を購入しました。彼の本を読ん

いくにつれ、次第にUFOについて、人間について、そして自分の生き方について、今まで疑問に思っていたことの解答が得られました。

アダムスキーがその著書で語つたことは私の意識を大幅に拡大させました。地球上には多くの生命が存在しています。そしてそれぞれの生命は何十億もの細胞から成っています。細胞の一つ一つはエネルギーに満ち溢れています。この細胞は私たちの思考に左右され、私たちが物事を否定的に考えれば否定的に反応し、病氣をつくり出したりします。しかし私たちがすべての物事を肯定的に考えれば天国のように幸福感に満ち溢れ、充実した、真の人間の生き方ができるのです。なぜ私たちは否定的に考える傾向があるのでしょうか。それは自分と他人とを区別し差別することから始まったのかもしれない。

人間は最初アダムだけが造られました。次にイブも造られ、子孫をふやしていきました。その子孫が私たち四十五億の地球人なのです。つまり私たちは皆アダムの分身なのです。だから他人を非難することは自分を非難することになり、他人を侮辱することはいつか自分も誰かに同じ扱いを受けることになりま

す。分裂こそ私たちが避けねばならないものでしょう。そうすれば現在の貧困や戦争などは消滅してしまいます。いつも肯定的思考を持ち、すべての人を自分と同じように愛しましょう。それこそあなた自身が望んでいるものなのです。それは自分自身を愛することなのですから。

●テレビシー送信と驚異の出現回数

富士山麓にUFO頻出

UFO観測をテレビシー送信によって実践する静岡支部会員は、一昨年八月、第五回日本GAP海外研修旅行でエルサレムに滞在中、ホテルの屋上から観測して驚くべき成果をあげたが、同じメンバーが今度は富士山麓の朝霧高原で実施し、またも驚異的なUFO頻出を目撃した。

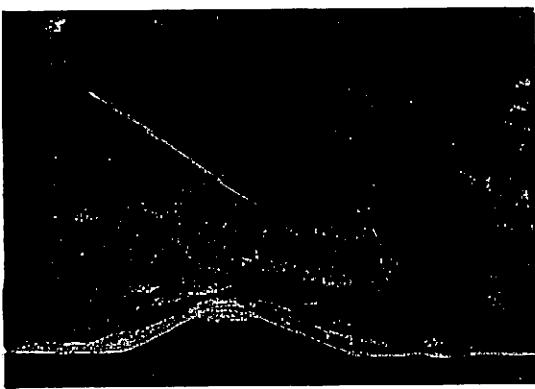
高梨和明

久保田先生のスペース・ビーブルにたいする「呼びかけ」の首葉の発表は私達静岡支部会員にも強烈なインパクトを与えて下さっていた。

一九八三年夏、静岡支部代表野口敏治氏、橋口真市氏、赤池澄夫氏、鈴木芳英氏、そして私の五人が体験した驚異的な「エルサレム・ローマ目撃事件」はその後も五人の心に強く焼きついていた。あの至福の宇宙的感覺をもう一度味わいたいと誰もが思っていた。

朝霧高原でテレビシー送信

一九八三年十二月十日「エルサレム・ローマ目撃事件」のメンバーに筒井徹氏が加わった六人は「朝霧高原青少年野外活動センター」に集合した。宇宙的な感動を求めて勇往邁進する私達は、富士山



麓の高原で天空を凝視し、送念した。「偉大なる友星の方々よ、私達六名が、祝福いただくためにお迎えにあがりまして。スペース・プログラムの遂行のために何とぞ私達をお使い下さい。ご指導下さい」
数多の星が美しくきらめく大空間に強烈なテレビシーを送る。

「あつ／＼」
思わず一同声をあげる。一条の巨大な光線が夜空を走った。早くも現れて下さったのだ。一同は感謝の気持ちを宇宙円盤のスペース・ビーブルに送った。
その後も想念に応じて何回も出現して

下さる。それを流星であると疑う者は誰もいなかった。私達が目撃した光体の何%かは流星であっただろう。しかし大部分は完全なる宇宙機であった。私達は実はこの時までにも頻りに観測を行っており、「エルサレム・ローマ目撃事件」でははっきりと証明された如く、スペース・ビーブルの宇宙円盤は想念に伝えて下さることを知っていた。

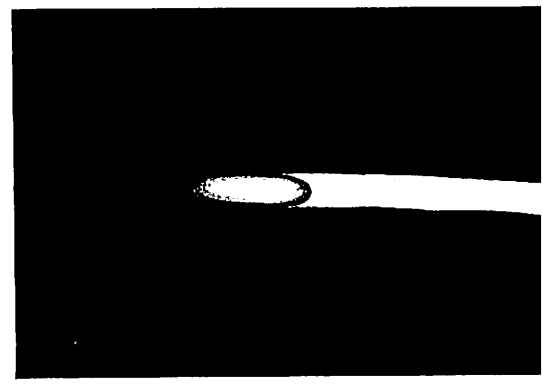
宇宙円盤は国内国外を問わず、旅の先々で現れて下さるが、日本の象徴ともいえる富士山上空の無限の大星空を背景に火の粉を吹きながら飛翔する宇宙円盤は何か特別の意味があるような気がしてならない。

その夜、宇宙円盤は次から次へと出現して下さった。真冬の富士山麓は予想以上に冷えてガタガタと震えていたが、次から次に宇宙円盤が現れて下さったので寒さもしのげた。

午後六時四十五分から午後十一時四十分まで、観測した結果、なんと四十機以上も出現して下さったのだ。(厳正な観測を行ったので、確認されない光体を含めるともっと多数になる)予想外のスペース・ビーブルのご配慮に涙がでるほど感謝の気持ちでいっぱいだった。

午後十一時四十五分直前、宇宙円盤の飛行は突然終了した。私達は感謝の想念を力いっぱい送り、引き揚げることにした。するとにわかには雲が現れてきた。一同が宿舎に向かう途中には雨も落ちてきた。

この観測は四十機以上連続出現という歴史的な記録で、その大部分が流星タイ



プであったが、別のタイプの宇宙円盤も出現されたのである。開始後しばらくして低空を東方から西方へゆつくりと飛行する明るいオレンジ色の光体が見られた。双眼鏡で観察すると単体のように見え、点滅はしていなかった。この光体に橋口氏は特に関心を持っていたようであるが、流星タイプの宇宙円盤が次から次へと出現して下さるために、ほとんどのメンバーの注意はそちらに向けられていた。

富士山中腹に着陸？

ところが、ある時、突然、橋口氏が大声をあげた。

「あれは何だか!」

はつとして一同が見た物は、富士山の南方向に際輝いている発光体であった。先程と同様の物体だ。そして大きい。「宇宙円盤目撃の達人」といわれる橋口氏は、いち早くこれに気づいたので。なんとそ

の光体は異様に明るさを増し、大きく輝いた。そして独特なカーブを描き、富士山の中腹にまるで着陸したかのように消えた。この目撃は予期せぬことであつたので、一同の驚きは雑舌に尽くせぬほどであつた。

後日、着陸したように思えた現場付近でその大きさを推定してみると、これまた予想外の大きさであることが判明した。その大きさは最も控めに推定して直径三十メートルと見た。以上の目撃の感想をあとで三氏に述べていただくことにする。

一九八三年の静岡支部の活動のテーマは「宇宙円盤、宇宙特使との超接近プラステレバシーの開発」であつたが、かくのごとく、十二月十日に、UFO史上に残る目撃を体験し、一九八三年のテーマを達成したのである。記念すべきこの日は、スケールの大きなリーダー野口敏治氏の誕生日でもあつた。

私達「実践の静岡」の支部会員は屈指

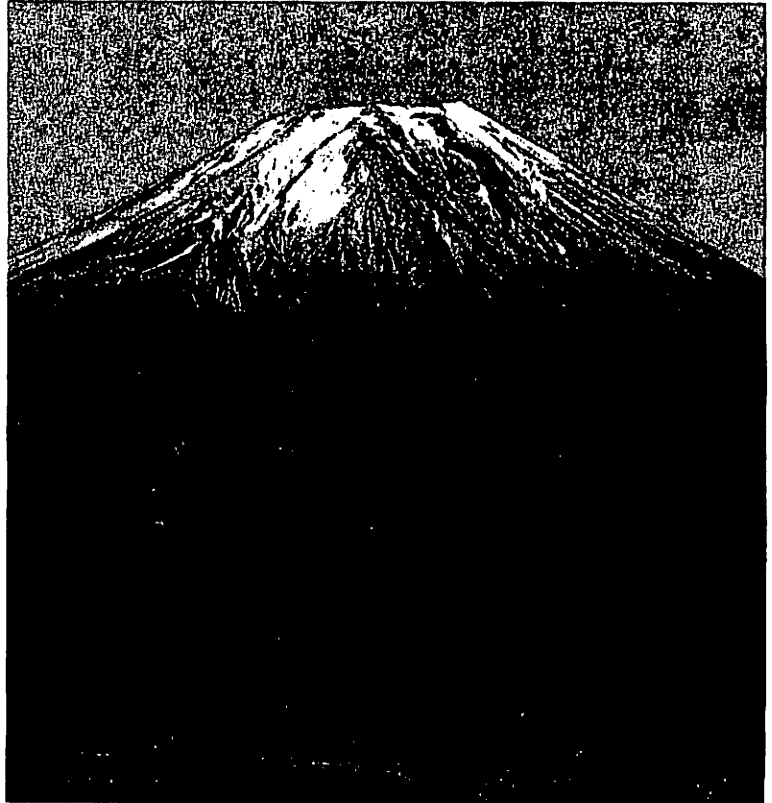
の指導者久保田八郎先生のご指導を仰ぎ、第一線に立つ栄光の日本GAP会員として、常に自分に宇宙的な課題を与え、それを達成し、「真のコズミックマン」を目指していきたいと思う。

赤池澄夫

十二月十日の真冬の夜の朝霧高原は格別だつた。確かにあの寒さでは犬一匹近づけなくとも無理はなかつただろう。それにしても、そこで私たち静岡支部の六名は、皆座り込んで動かなかつたのだ。そして大宇宙の彼方にスペース・ビーブルへの呼びかけを實行し、なんと四十機あまりの発光体の出現を目撃した。そのうち一回はあまりにも驚異的現象で、その場で立ちすくむほどの状態だつた。

以上の体験は、エルサレムでの静岡支部会員である私たちの体験を思い出させるかのように、ふたたび偉大なる惑星の世界のフィーリングを起こすという超地球次元的体験であつた。

二度の体験によつて特に感じたことは、私たちの呼びかけに対して彼らの応答は事実だつたという確信を、自分の生き方を通じた信念で起こすということである。私たちの意志と思想をますます高めて、スペース・プログラムに協力する生き方をしようと思つたことである。



筒井 徹

十二月十日のスペース・ビーブルの方々への呼びかけは長時間に渡り、最初は大変な感じがしたが、最後まで全力を尽くして送迎することが出来、そして非常に多数の出現があつた。これからのスペース・プログラムに対する信念を試されているような感じと、素晴らしい未来を感じた。

鈴木芳美

富士山麓における多数のスペース・トップを実際に自身の目で目撃して、何のためにGAP活動をしているかということを考えさせられた。そして目撃すればするほど個人としての自分とGAPとの関係を認識させられる。

(イラスト3点は高梨和明画。右の写真は筒井徹撮影)

車山高原で 円盤を撮影

野口敏治

(日本GAP静岡支部代表)

一九八四年八月十四日、UFOの目撃を体験した。そして翌日の十五日の朝、付近の風景を写真にとったところ円盤が写っていたという出来事が発生した。

この出来事は、夏休みの家族サーピスとして長野県の車山高原に遊びにいった時のことである。

この車山高原行きは「一九八三年の春頃からきまっていた。というのは一九八三年の夏実施された日本GAP企画の第一次エルサレム宇宙考古学の旅にどうして

も参加したいと思っていたので、家族に今年の夏休みは、なんとかエルサレムの旅行に行かせてもらいたい、そのかわり来年の夏休みは家族サーピスをするからと条件を出し、強引にもなんとか承諾にこぎつけたのであった。お蔭でエルサレムの旅行では生漣れることの出来ない数多くの素晴らしい体験をさせていた。

素晴らしい高原の夜空

一九八四年の夏休み近くになった頃、支部会員の高梨氏から「野口さん、今年の夏休みはどう予定していますか」と聞かれたので、「実は家族で長野県の車山高原に遊びに行くことになっている」と話したところ、「それはいい、私達も一緒に行っていいですか」ということで高梨夫妻と共に行くことになったのである。

一九八四年八月十三日、東名富士インターで待ち合わせをして二台の車で車山高原へと向かった。お盆休みで行楽地へ行く車でも大渋滞であろうと予想し、車山に着くのは夕方か夜になるだろうと思っていた。というのも知人が前年のやはりお盆休みに長野県に行った時、四時間かかるところが八時間以上もかかったから渋滞は覚悟で行くようにとアドバイスしてくれたからである。ということもあって最初予定していた道順より、すこし遠回りだが高速度道路を使っていた方が良さそうだと印象があったので出発の前日にコースを変更した。これが適中したかどうかはわからないが、実にスム

ースに予定どおり目的地に着いた。数年前もここ車山高原に遊びに来たが、その時は前日まで雨が降っていたが、私達が着いた時は快晴でその夜の星空は静岡で見るとは大違いで星もグッと近く、手が届きそうなくらいで満天が星、星、星であったのが忘れられず、また今回もあの時の星を見たさにやってきたのである。

到着した十三日の夜はくもりで星は見ることが出来なかった。翌十四日は晴時々くもりで星がすこし顔を出した。この日の夕方は子供達と花火で遊び、しばらく休息してから高梨氏と二人でスペース・ビーブルの方々に想念してみようということになった。適当な場所が決まって、すこし斜面になったところに寝ころがり、スペース・ビーブルの方々に感謝の想念を送り始めた。時刻は九時半である。

尾を引くオレンジ色の光体

しばらくして左手方向の東より北に向かって白銀色の光体が水平に走った。またしばらくたってから南西から北東に向かって白い光体が飛行機より遅い速度でゆっくりと移動していった。点滅もなく音もない。高梨氏は、このタイプは初めての目撃であったと言っていた。

十時頃、右手後方から南の方向にあざやかなオレンジ色の光体が尾を引くように全天をよぎった。二人とも寝ていた体を起こし、「オー」と大きな声を出してしまった。しばらくそのままの姿勢で二人とも我を忘れてしまっていた。こんなす

ごい光体を見たのは初めてである。またしばらくすると、先程の方向にまたオレンジの光体が出現したが飛行した距離は先程の半分ほどであった。この光体は私のみが目撃した。

時間が過ぎて十一時ごろ右手の方向に赤味があったオレンジの光体が北から東へ向かって走った。このころから夜露がひどくなってきた。夏の高原の夜は特にきついので、今夜はこれで終わりとした。合計五回の出現があった。

翌十五日、朝七時ごろペランダから付近の風景を数枚撮影した。そして後日写真が出来上がってきたら、そのうちの一枚に円盤らしき物体が写っていたのであった。この十五日は日本GAPの第二次エルサレム宇宙考古学の旅の出発の日であった。旅行の大成を祝福してくれたのであろうか。

これら一連の出来事はどうな意義があるのだろうか。スペース・ビーブルの方々が二人の想念に答えてくれたということには確実である。私達が学んでいるアダムスキー哲学、そしてそれらにもとづいて活動している日本GAPの知らせる運動は、スペース・ビーブルの方々も注目していてくれ、随ながら援助してくれていることも確実である。このような目撃体験を重ねると、スペース・プログラムへの協力の姿勢がますます強固なものとなってくる。これからも大きな自信をもって、宇宙の法則を実践しながら、多くの方々に宇宙の事実を知らせていかなければならない。これが私達GAP会員のやるべき事なのであろう。

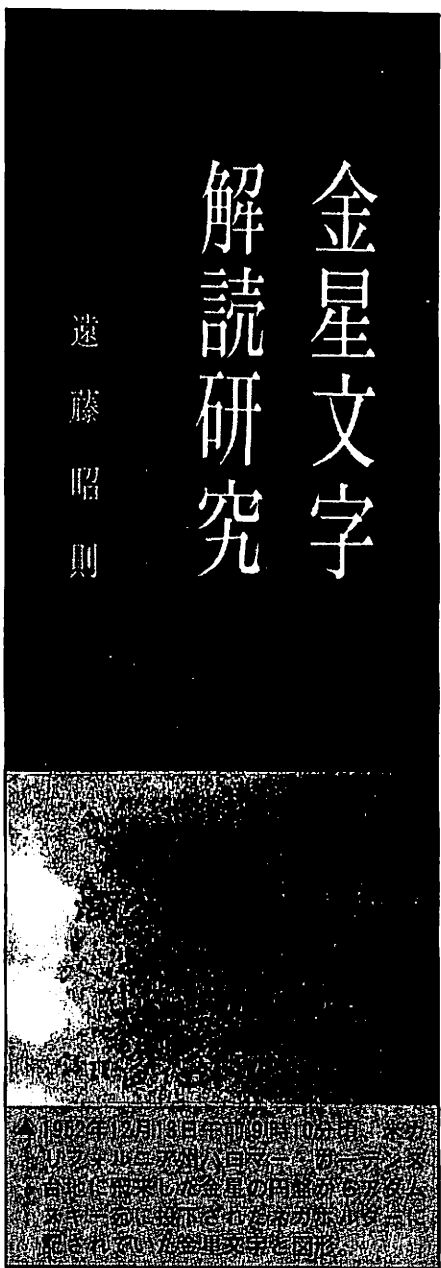


●1984年8月15日、長野県車山高原で野口敏治氏が撮影した円盤（矢印）。

金星文字

解読研究

遠藤 昭則



金星文字解読は 自分自身の探究

ジョージ・アダムスキー氏が金星人・オーソン氏から受け取った金星文字。それは世界中の人々が一時は熱狂的に解読に取り組みました。しかし描かれてある文字や紋様は解き難く、中途で諦めていく人がほとんどでした。なぜなら、それを解くには自分の内部のフィーリングをスペース・ブラザーズと一体化させるようにしなければならぬということに気づく人が少なかったからです。しかし自分の習慣的な想念を、あたかもブラザーズから受け取ったものと感通いして使ってしまうこともありすので、この解読作業には忍耐力をも必要とするものです。知識は私達の身体を形成している細胞の中にありますから、そこから聞こうという意欲を起こさなければなりません。

それでこの解読作業は、スペース・ブラザーズとの距離を縮め、また自分の内部にある宇宙の意識の持つ知識を知る、つまり自分の中にあるものを発見することにつながります。

ネガにある各文字は自然の動きを表していますが、決して宗教的意味合いを持つものではなく、ましてや心を落ち着ければそれらの文字が動いて見えるというようなものでもなく、全くの現実的な科学的なものです。忍耐強く続けるなら、この作業を通してそれについての様々なアイデアがわき起こってきます。しかし私の場合ですと、それらのアイデアは一日に一つあるかないかぐらいでした。それで、アイデアが一つわき起こるとそれを使ってその日は解読に取り組み、分かんなくなるとそこでその日は諦めてまた次の日に行うということをしてきました。無理に解こうとすると自分の持つている習慣的な想念によって穴の埋め合わせを

してしまおうとするからです。何かを知るには宇宙の意識にじつと聞き耳をたてて、アイデアがわき起こるまで待つていなくてはなりません。しかし腕を組んで持つていられるというのでもありません。すると少しして、またはだいぶ時間が経過してからアイデアはやってきます。ともあれ、このようにして解読の作業を続けられました。

金星文字との出会い

私が金星文字と初めて出会ったのは中学生の頃のことだったろうと思います。その頃に『空飛ぶ円盤同乗記』（今のアダムスキー全集第一巻「宇宙からの訪問者」）と『空飛ぶ円盤の真相』の二冊の書物を、現在「Uコン」を置かせていただいているある書店で見つけました。私はその場で飛び上がりばかりに喜び、早速買って帰る、むさぼるようになって読み

ました。たぶんその時に宇宙文字の写真も見ていたと思います。また小学校三年のある日、学校からの帰り道に、銀色をした金属製の物体で、上に透明な低いドームのある物体が、高速で南西から北東の方向へと飛んで行くのを友達と見ました。以来、UFO——その頃は空飛ぶ円盤と呼ばれていました——を見たくなり、また推進原理についてもとても興味を持つようにもなっていました。

高校生になつてからは、地球の上空を流れている電流や磁気について調べてみました。それらを調べれば何らかの糸口が発見できるかもしれないと思つたからです。でもそれらが推進原理とどのような結びついていくのかはわかりませんでした。一週間ばかりそのことに熱中しすぎてしまつて、夜うなされるということもありました。そしてそこで気が付きました。これは焦つて考えてはいけないことであつて、また大地にしっかりと足をつけて、じっくりとしかし幾分のみびりと考えていかなくはないけないことなのだ。

なかなか分からない……

アダムスキー氏が金星人から受け取つたネガと、砂漠でのコンタクトの時の足跡の紋様に示されていることは、他の惑星の人々が何千年もかかつて築き上げてきたものですから、一朝一夕には分からないことでしょう。そしてそれらの文字や紋様の中には、宇宙船の推進原理等と

ともに宇宙空間や極微の原子の世界における磁気力について、私達がまだ気付いていない偉大な法則が隠されていると思います。それを応用できるなら、医学面等においても大きな進歩になるのではないかと思います。なぜなら人間は一つの小宇宙であるからです。

宇宙文字は一九五二年十二月十三日の朝九時十分頃に、パロマー・ガーデンズへ飛来した金星の円盤によってアダムスキー氏に渡されたものですが、そのときの様子は「宇宙からの訪問者」に出ていますのでご存知のことと思います。それから前にも書きましたが、その文字の解説に色々な人が挑みましたが、しかし解説は思うように進みませんでした。

ところがその後南アフリカの一科学者によつてそれがうまく解説されるに至り



図 2



ました。「UFO問題の真相」の第六章には、その南アフリカの科学者がネガに現れている各文字をはめ絵パズルの一コマとして応用することによつて、円盤の図形を作成したことが出ています。

そこで私も一つやってみよう、金星文字を透明セロハンに写し取つてそれから各文字を一つ一つ切り離し、はめ絵パズルのように組み合わせることをしてみました。それは金星のスカウト・シツプの図を描いておいて、何の法則性もなしにそこに各文字を入れただけのものでした。それで何が何だかよく分からないものになつてしまいました。まるで小さい子供がはめ絵パズルをしているうちによく分からなくなり、ゴジャゴジャと上から重ねていっただけのようなものです。各文字が色々他の文字と重なつている所もありました。でもパズルの一コマとして使うのですから、それぞれが重なつてしまつてはいけないうわけです。また足跡の模様も右と左を重ねてみましたが、よく分からないものでした。それですから、これらの文字は私にはよく分からないものなのだとしばらくは諦めていました。

その後少しの間、他の推進原理があることを知つてその研究をしてみました。でもその機械から発するフィードバックにしようもないものがありました。またその原理を示す理論式には、現在の数学の弱い点の一つであると思われるものが多い点の多用されており、人間の肉奥のフィードバックに頼つて分からないことに取り組もうとするのではなくて、数学的

論理性に頼つて取り組んでいるような感じを受け、だんだんとそこから離れて行きました。力はこの現実の世界に存在する物質を通して初めて現れるものであつて、力だけでは活動することはできません。ましてやこの現実の世界とは言えないような物質の存在を使つて考えようという事は、数学的には正しくても、それは数学的神秘性以外の何ものでもないと思います。宇宙の活動はもつと分かりやすく、あらゆる人間の生活、そして生命に密着したものであり、大地にしつかりと足のついたものであると思います。

ヒントは「はめ絵パズル」

一九七七年のGAP総会のとときに16ミリ映画が上映されました。その中に、あの南アフリカの科学者、パシル・バン・デン・バーグ氏のものらしいノートの数ページが映し出されていきました。私はこれは絶対に覚えておかなくてはならないと、目を皿のようにして見ていました。よくは分かりませんでした。ところがその後、その時にY氏がカメラで撮つていたことを氏からお聞きして、早速そのネガを借りて、引き伸ばしてみました。しかしそれらは皆、その中に書かれてある説明がぼけていました。16ミリ撮影機で撮影する時にアダムスキー氏がわざと少しぼかしたようでもあり、何が書かれてあるのかよく分かりませんでした(図1、2)。でも書かれてあることにとても興味がありましたので、他の方がカメラで撮られてそれを紙に描き直したものの

コピーも二、三枚頂いてありましたので、それも参考にさせて頂いたでいて考えていくことにしました。

金星文字をはめ絵パズルの一コマとして応用することによつて、スカウト・シツプの設計図ができあがつたとバン・デン・バーグ氏は述べていますので、とにかく考えてみました。今から二年前の、一九八三年十二月、久しぶりに宇宙文字を詳しく調べてみようと思ひ立ち、各コマをあれこれ動かしたりしていました。そしてそのうちに一つのこと気付きました。

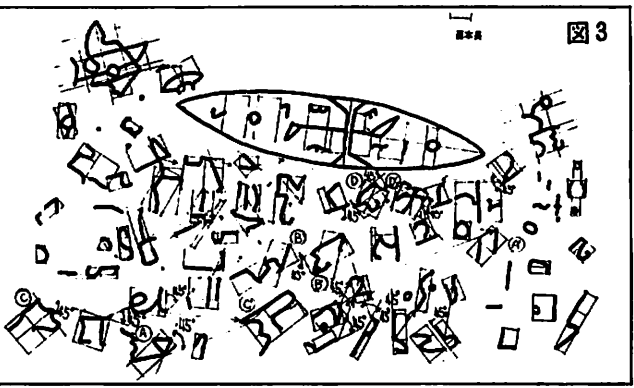
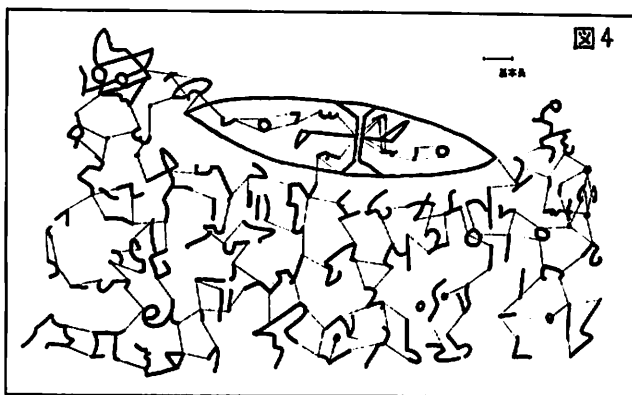


図 3



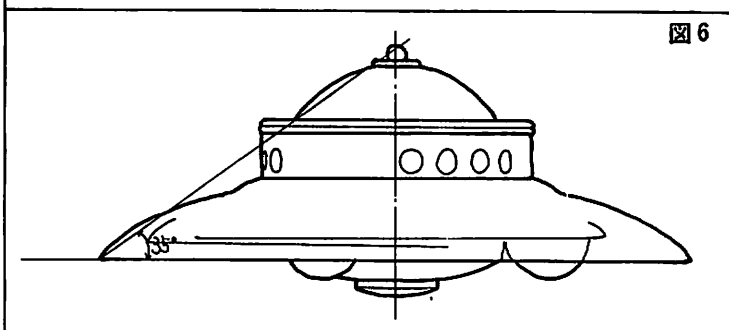
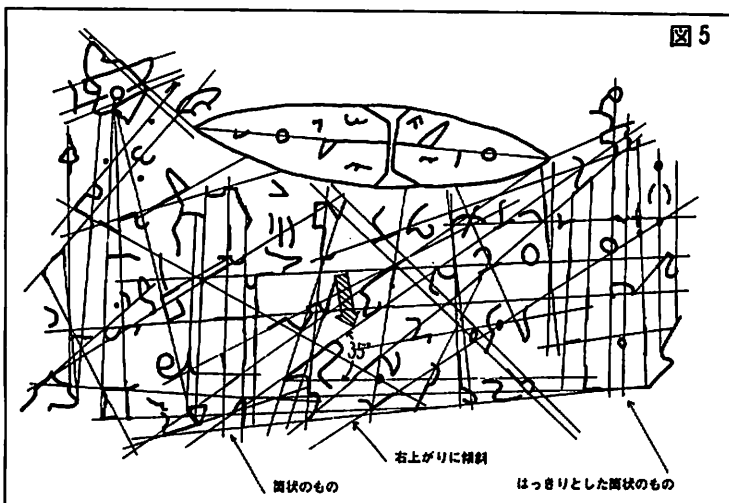
金星文字を見るとそれは全く無造作に、バラバラに置かれているように見えます。しかし各文字を調べてみると、各文字にはある単位長というものが有り、その長さはそれぞれの文字についてだけでなく、文字と文字との間の距離にも存在していることがわかりました(図3、4)。つまりそこにはある法則が潜んでいたわけです。さらに各文字の傾きを調べてみると、図5のようになりました。パン・デン・バーグ氏は、ある正確な経路を見つけてそれを利用するとはめ絵はできあがると述べていますので、組み合わせの可能性ができました。しかし色々やってみたのですが、確かにこうだというよ

うにはうまく組み合わせられません。また図1を見ればどれとどれを組み合わせればよいか少し分かります。でもそれが本当にパン・デン・バーグ氏のノートからのものなのかどうかということは分かりません。もしも本当に氏のものならばそれは確かな経路を持つているはずですから、図1を調べてみました。するとやはりある経路がありました。

スカウト・シップができた!

パズルは、元の絵に合わせて組み立てていきます。この文字も同じように考えてみると、そのものになる何かがなくなっていくけません。そこで色々探しました。結局「宇宙からの訪問者」の中にあるスカウト・シップの写真と断面図とが最高であると思い、それをもとになる絵とすることにしました。

しかし詳しくは分かりませんが、断面図も幾分省略されている所がありますので、あとは自分の内部にわき起こるフィーリングに頼るしかありません。そこでスペース・ブラザーズからのフィーリングも積極的に感受することにしました。図5は各文字の傾きに直線を引いてみたものです。これを見ると右側にスカウト・シップのおぼろげな形が表れています。レナード・クランプ氏が正射影法によって描いた図6にもそのような直線を入れて比較してみると、図5に矢印で示してある所の傾きが近いことが分かります。また長さの関係もそうなっています。ということはその中にスカウト・シップ



の図ができ上がる可能性があるわけですから、しかしどのように各文字を動かせばよいのでしょうか。図4の各文字は単位長で作られた長方形によって囲むことができます。A、B、C、D、の各ペアーは同じ傾きをもった長方形によって囲まれていることが分かります。つまりそういうペアーを見つけて組み合わせればよいのです。そうして組み合わせるために各文字を動かすのですが、その時図5のスカウト・シップのような傾きの内にある各文字は原則としてそれ程動かさな

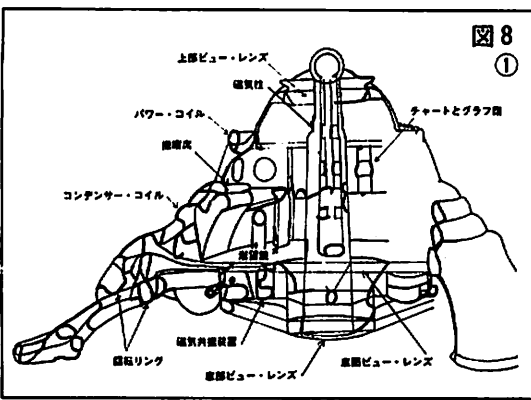
いようにします。内側の文字を「心」、動いて行く文字を「意識」とするわけでは、図4のように各文字の一方所に直線を引き、そこから四十五度の方向に直線を引いて行くと、目的の位置が分かります。初めの頃はこの角度の関係しか分からず、単位長によって囲まれた四角形のことを考えていなかったため、図7のようになつてしまいました。そこで単位長の考えも入れてさらに、M氏から頂いたパン・デン・バーグ氏が描いたスカウト・シッ



内部の断面図をもとにして、各文字がどこに当てはまるかと考えて行きました。そうしてでき上がったのが図8です。

「宇宙からの訪問者」にある金星の円盤の断面図を比較してみると、円盤の推進装置等の重要な部分が見えてきます。

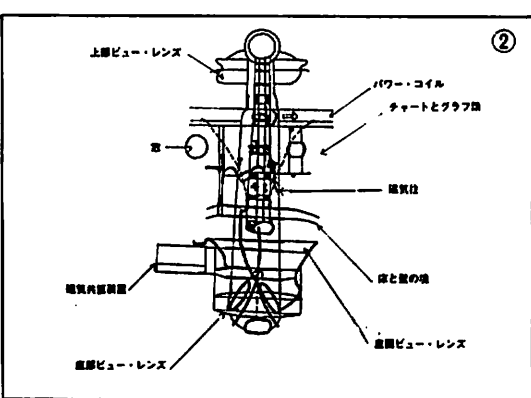
また「UFOと宇宙」(ユニバース出版社)一九七六年三月号の記事に、スカウト・シップのフランジの外側の層はキャピンの真下の部分に対して可動するというこ



とができています。「宇宙からの訪問者」第一部「空飛ぶ円盤は普陸した」の中でもアダムスキー氏は次のように述べています。

「円盤が動き始めたとき、フランジの下に三つのリングと、中心部の円盤状外形の周囲に三番目のリングがあるのに気付いた。この内部の一個のリングと外部のリングは時計方向に回転しているようだが、この二個の間にあるリングは反時計方向に動いていた」

確かに三つの層に分けることができま



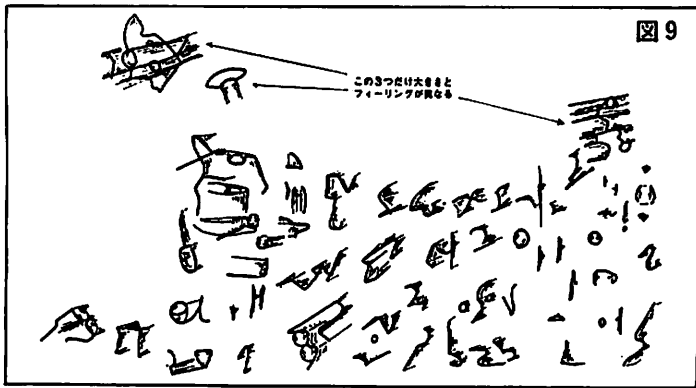
す。ここで静電気が生み出されているようですが、詳細は不明です。「UFO問題の真相」(アダムスキー全集第2巻)には、「地球の宇宙船関係技術者が考えねばならない一つの重要な要素は、推進装置の大部分を収容する室としてばかりでは

なく安全目的のためにも必要な多重壁の構造である。最小限二枚の電荷を帯びた壁面がなければならぬ。外側の負の電荷を帯びた壁は船体の周囲に作り出された保護用フォース・フィールドと直接に接触する。一中略一これに対応する正の電荷のフィールドが内側の壁に帯びさせてあって、船内の中央の部分を中心に化させている」

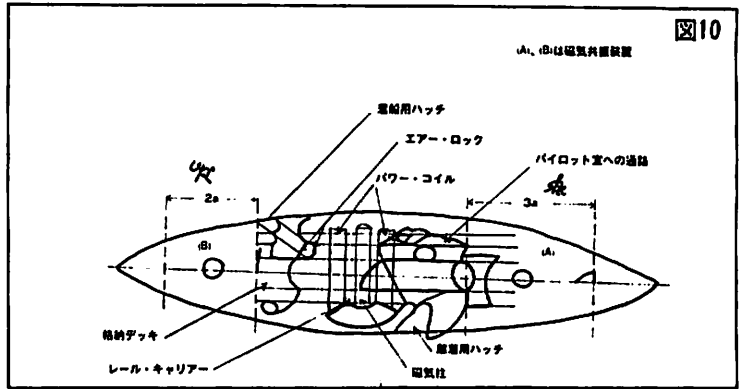
とありますので、この図からそのことについて考えることもできます。

三つの異なる文字の位置は？

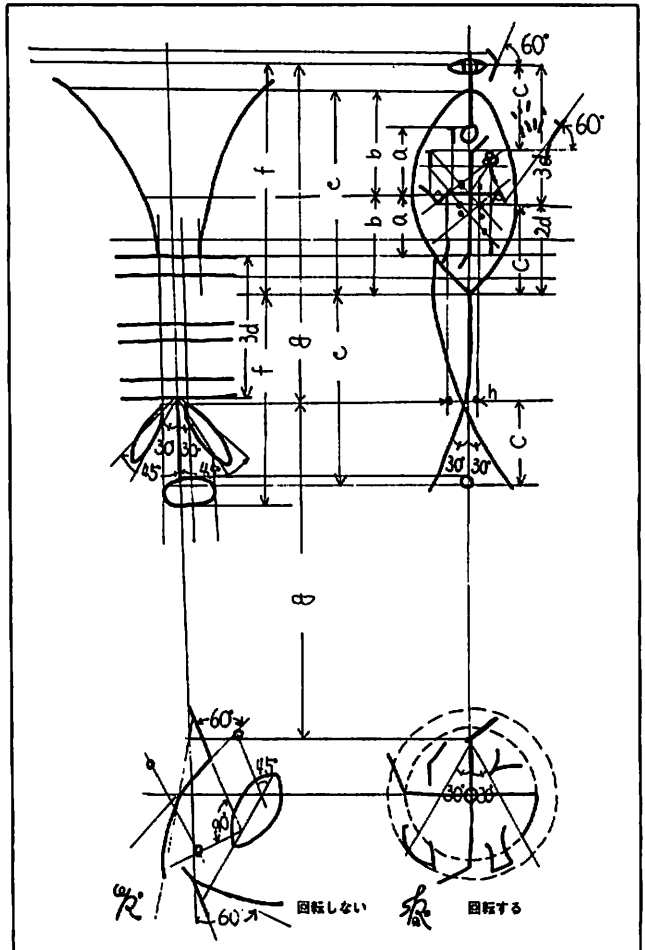
まとめてみると各文字は図9のように各部分の絵を表していることになりました。ところが上の三つは明らかに他と異なる大きさと傾きを持ち、独特のフィールド



グを放っています。アダムスキー氏が受け取ったネガはスカウト・シップの丸窓から渡されました。私はこのネガがスカウト・シップに使われているものであると思いました。つまりスカウト・シップの詳細な設計図と、それが帰って行く母船の大まかな設計図とが示されていると思われました。なぜならスカウト・シップに使われているものならば、当然スカウト・シップの詳細な設計図が必要となるからです。しかし母船の図は大まかでも良いと思います。母船の詳細な図は母船で生活をしている彼らブラザーズのあ



足跡にあると考えてみました。パン・デ
ン・バーグ氏は金星文字を両足跡の紋様
の中に加えて大母船の図面を作り出した
と「UFO問題の真相」の中でアダムス
キー氏は述べています。金星文字のスワ
ステイカのある図を見ていて感じたこと
は、それが金星の母船の本体になるのだ
はないかということでした。そこで「宇
宙からの訪問者」に出ている金星の母船
の断面図や図2と比較しながら、ネガに
あるちよつと異なる三つの文字を当ては
めてみました。すると大まかな母船の内
部構造図が現れてきました(図10)。しか
し両端の部分が分かりません。そしてこ



こには磁気共振装置や静電推進装置等が
示されてありません。そこで今度は足跡
の紋様(図11)について調べてみました
が、一年間ぐらいは分かりませんでした。
しかし今年の二月、左の足跡の紋様につ
いて、あることに気が付きました。

足跡に秘められた意味

まず右足跡を見ると、その踵の所には
スワステイカがあります。スワステイカ
は回転を表すと言われていますので、そ
れを二十度ずつ回転させます。つまり十
二の場所を通って一回転させるわけです。
そうしてできたのが図12です。これは母

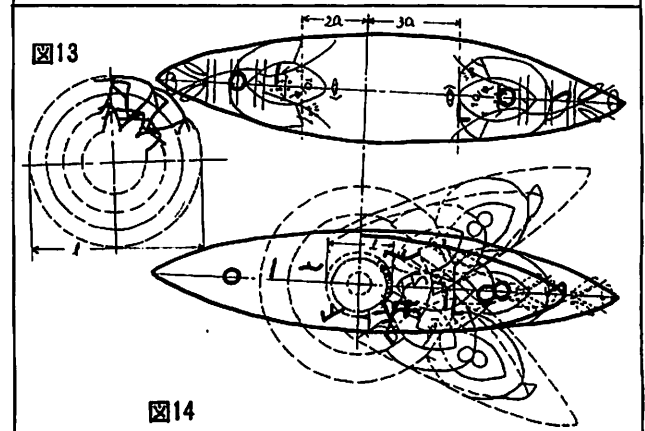
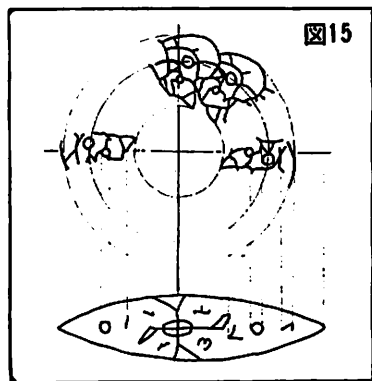


図13

図14

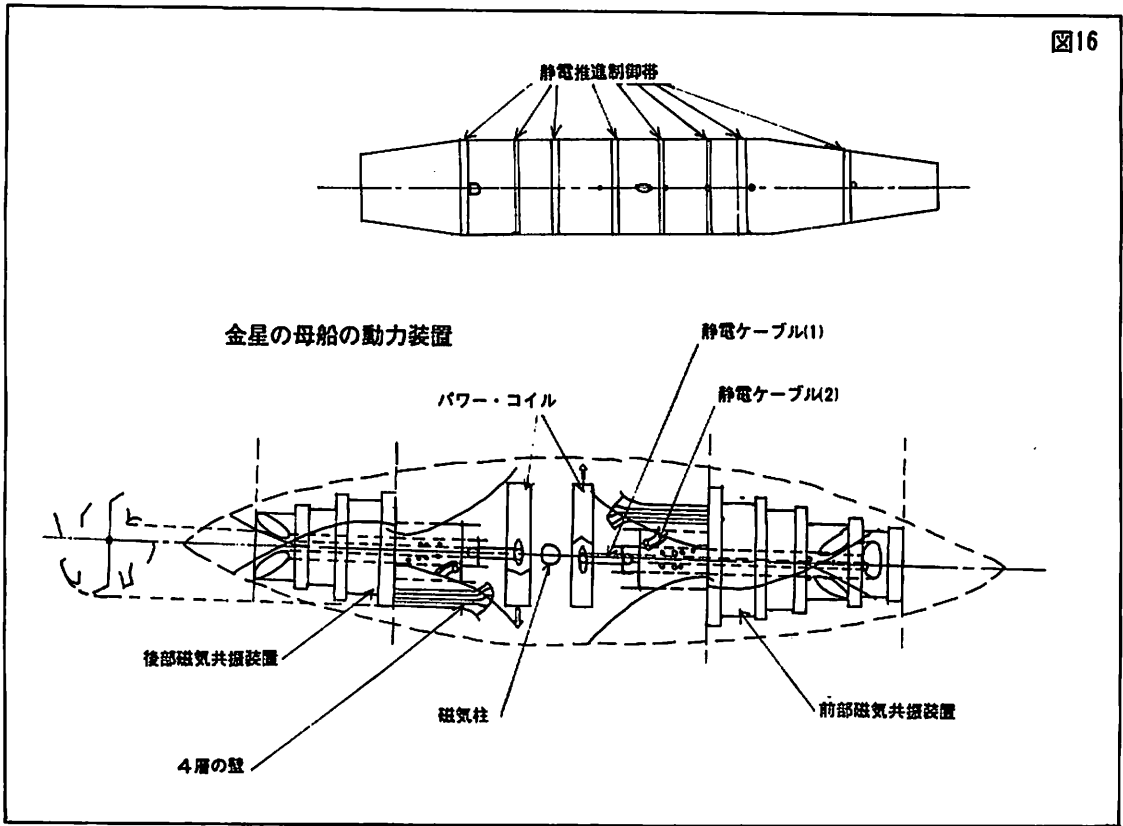
船の磁気共振装置の一部を示しているよ
うです。
そして問題の左の足跡の踵の所ですが、
ここにはスワステイカはありません。そ
れですからこちらは回転させる必要がな
いわけです。そうしてネガの方のスワス
テイカの図に組み入れてみたこともあり
ました。また金星文字にある先程の三つ
の文字のうちの大きい二つを組み合わせ
ていってでき上がったのが図15です。そ
れは図のスワステイカのものの大きさに
丁度合うようになります。

また図16のように足跡の紋様とネガの
スワステイカの図とを組み合わせて母船
の内部構造図を作ってみました。これを



見ると磁気共振装置や四層の壁等が現れ
てきます。しかしこれは百パーセントと
は言えません。

図16



磁気力の作用

磁石の磁力線を砂鉄を使って調べてみると様々なことを解明する糸口が見えてきます。それらの磁力線が何を示しているのかは分かりませんが、大きな謎が隠されているようでもあります。そこで磁石というものはそもそも何なのか、という基本的なことに戻ってみました。棒磁石をいくつかに分割して、太陽と各惑星との関係、人体の七つの中樞などと比較してみました。しかしよく分かりませんでした。そこには現実の何かがあるようでした。

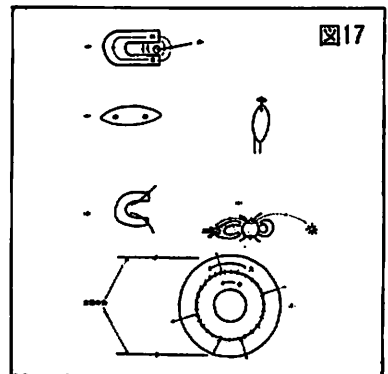
電池は十から一へと電流が流れていると考えて、実は一から十へと電子が流れています。磁石にもそのような何かがあるのではないかと感じてきました。一つの磁石について色々と考えてみました。しかし何も良い案は思いつきません。ところがある日洗面所に行った時、ふと次のような印象が浮かんで来ました。

「電池はそれだけではパワーは出てこない。磁石も同じことである」

つまり電池に何か負荷をつなぐと、パワーをそれに供給し出すように、磁石も他の何か、例えばもう一つの磁石を持つてくることによってパワーを出し始めるということです。

ある状態で磁石が一つの時には、図17 aのように一つの閉じた糸としての流れを持つているとするならば次のようなことが考えられます。まずそれを渦としてみるとその中心はbで示されている円に

図17



なります。そうするとネガには円が二つあるので磁石が二つ必要になり、足跡では円が一つなので一つ必要になることになりそうです(c)。そして二つのときにはお互いのパワーの交流があることが考えられます。

左の足跡の模様にある一対の曲線を何かの経路と考えてみます(d)。地球にはeのように太陽からのパワーがやってきています。この考え方でいくならば、磁石をある状態にするとともに同じような経路で何らかのパワーの出入りがあるということが考えられます。

それではこのパワーと地球の重力とがどのように結びつくかということですが、J・チャーチワードの「ムーの宇宙力」という本によりますと、地球の重力は地球内部の二重層の自転速度のずれによる摩擦によって生ずるとあります(f)。さらにその本にあることをもとにして考えてみます。まず地球の自転について要約すると次のように述べています。

「地球の朝の部分は太陽の磁気力によって磁気力が地球の中央磁石から引き出され始める(注)地球の磁気力が太陽の磁気力によって高振動化され始める。しかし地球の重力はそれをとめておこうとするので、地球は回転を始めることになる。そしてその磁気力は太陽と正面になる位置に来たときに大気中に引き出されてくる(注)磁気力が重力よりも高振動化されて重力から自由になった。そして太陽はもうそれ以上磁気力を引き出すことはせず、地球のその区域は夜の部分へと回転して行く。大気中に引き出された磁気力はその後大気中にとどまり、自然界の働きに利用される。その力が疲れてくると(注)低振動化してくると)それは中央磁石へと戻って行って、夜の間に再充電される。また大気中に過剰に力が集中するとそれは雷となって大気中に分散したり、一部は大地へと戻っていく」

大気中に引き出された磁気力は重力よりも高振動化している、その力が使い果たされて低振動化するまで重力の影響を受けずに大気中にとどまっていることができると考えられます。

ここにAという装置があるとします。それが地球の高振動化した磁気力と同じ磁気力をその周囲に作り出すことができるなら、大気中にある高振動化している地球の磁気力はAによる磁気力と混じり合い集中化して、Aの周囲には高振動化した磁気力の強力な場が生み出されることとなります。するとAという物体は重力の影響を受けない状態となります。万物は大気中に引き出された磁気力に

よって動かされているのですから、同じ磁気力を利用して人間も万物に働きかけることができるはずで、物質を形成している原子の電子と原子核とは、太陽と惑星との関係と同じように磁気力を生み出していると考えられます。しかしそれは重力の振動数と同じであるために、重力によって引きつけられていると思えます。

光は重力の作用を受けます。ということは、重力と同じ振動数の磁気力をもっているとも考えられます。先程のAという装置によって光の磁気力の振動数を高めるなら、光は重力の影響を受けなくなるかもしれません。つまり現在言われている光速よりも速く光を屈かせることができる可能性がでてきます。ということはAの磁気力の場を高振動化させると、現在言われている光速よりも速く質量の変化なしにAを移動させられることが考えられます。

そして光の持つ磁気力よりも高い振動数の場をAが持つならば、大気中にある光はその場に影響を及ぼさなくなつて屈折してしまふことになる、つまりAは透明化してしまふということも考えられます。しかしAの内部ではそれ独自の場が作り出されているので、一つの系として内部にいる人はAの内壁が透明化されて見えてはいません。

円盤の動力装置

さてアダムスキー氏は「UFO問題の真相」の中で次のように述べています。

「空飛ぶ円盤すなわち重力に従った宇宙船は、それ自体の重力場を発生させて作動する。この重力場は大体に球体をなして船体を取り巻いている。この重力場は惑星の磁場と調和して共振するように、すなわち混ざるように調節されている。するとこの共振重力場が船体を無重量にしてしまふのである」

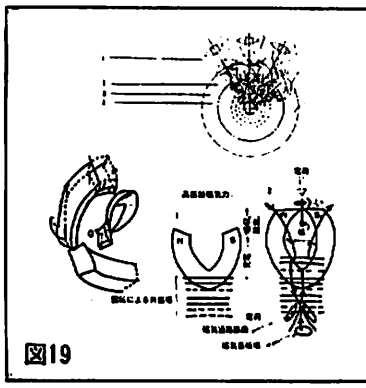
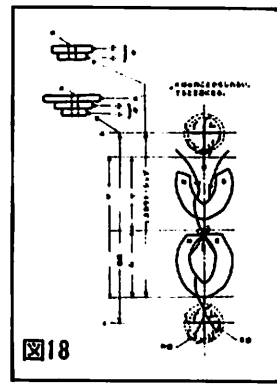
月や他の惑星では、その磁気共振装置の周波数を変えればよいわけです。しかしスカウト・シップでは図8から考えると一惑星の磁場に対しての共振装置しか持っていないので、これによってその他の惑星から来る磁場にも同時に共振することはできず、ただ次に述べる静電場との関係によってのみ、上昇、下降が可能となると思われます。「宇宙からの訪問者」の中には、

「長距離旅行という言葉をパイロットが発したとき、この円盤は母船の助けをかりないで惑星間を飛行できるのかと思つたが、彼はこれを否定して、円盤類は遠い宇宙空間を(自力で)飛行するように作られているのではないと述べた」とあります。またレナード・克蘭プ氏の「宇宙・引力・空飛ぶ円盤(続)」をも参考に考えてみるのなら、パワー・コイルも一種の磁気共振装置として働いていると考えることが出来ます。このパワー・コイルで上方からやって来る磁場と共振するのかもしれない。しかしそのパワーは小さいものであろうと思われまふ。

それで、惑星から惑星へと旅行をするためには、両惑星の磁気共振装置を持つた母船によってのみ可能であると考えら

れます。もしこのことが正しいとすると、遠い恒星から一機か二機の円盤でやって来たという話が時々ありますが、それは考えものです。小さな円盤は遠い恒星へ行く装置を持っていない、というよりも装置できないのですから。

母船で二つの惑星の間を航行するとき、船体の前後に磁気共振装置をつけて目的の惑星と後にしてきた惑星それぞれに磁気共振するように調節すればよいわけです。つまり後の磁気共振装置は後にしてきた惑星の引力から自由になる働



きをして、前部の装置は目的の惑星と同じかそれよりも高い振動数を作り出して、目的の惑星の磁気力を引き出すようにするわけです。しかし母船の方がはるかに小さいですから、目的の惑星の磁気力に逆に引っぱられることとなります。

足跡の紋線から考えますと、円盤や母船の磁気共振装置は層状になることが考えられます(図18、19)。すると母船においてはそれらは船体の両側でかなりの位置を占めることとなりますから、操縦室がそれらの中に少し入るかまたは近付くこととなります。そのため長時間操縦する必要のある乗員は磁気を避けるパイロット服を着て、これらの装置から受ける人体の磁気的な働きへの影響を調節する必要があります。

静電場が推進力

次に静電場についてですが、アダムスキー氏は、

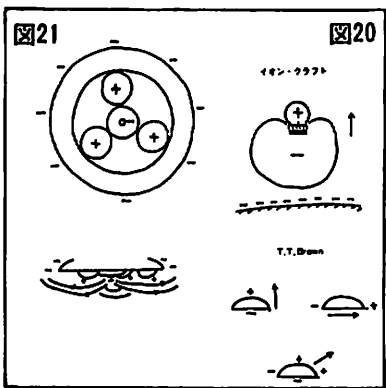
「宇宙船内の発生器によって生み出される推進力は地球の物理研究所などで用いられるファン・ド・グラーフ静電発生機で発生する力にたとえることができる——(中略)——静電気の推力は——と述べています。また、

「無重量つまりバランスのとれた状態にあると、船体はどこにいてもわずかな推力で動かすことができるのだ」とも述べています。

磁気共振装置によって作り出された無重量場の中で、スカウト・シップの多重層の壁の内部にある静電気推進装置によ

って作られた静電場は、船体を自由に動かす推進力になると考えられます。これはアメリカのT・T・ブラウン、日本の内田秀夫両氏の発見したのものにも見られます。つまり負電荷をもつ物体は地球に反発され、正電荷をもつ物体は地球に引きつけられるというものです(図20)。しかし地球の引力の中で負電荷だけをかけて円盤を上昇させるためにはかなりのパワーと危険を伴います。そこで磁気共振装置による無重量場が必要になってくるのです。そしてこの二つのものによって惑星の大気中または近くの宇宙空間での活動が可能になると考えられます。

方向変換はスカウト・シップでは下方にある三点推進制御装置によって行われます。ここには磁気共振装置があるのでなく、電荷の調節の一種の蓄電器があるようです。船体表面は負の電荷になっています。そこで三点制御装置の方は負よりも正の電荷の方が効率が良いと考



えられます(図21)。

磁気柱は単なる磁石の棒ではないようです。それは磁気共振装置によって惑星の磁気力を取り入れて高振動化させる一種の周波数変換器、または変圧器のようなものであろうと思われま。そこでは用途ごとに各種の周波数の磁気力に変換することができて、それらを必要を所に磁気力や電気として送り、また静電気に変換させて三点制御装置へと送っていると思えます。それにはまた、パワー・コイルの磁気共振装置から得られた上方からの、例えば太陽から等の磁気力も同様に使われていると思えます。

平和のために宇宙船を

金星文字と足跡の紋線には、解かれるべきことがまだまだたくさん含まれています。そしてその謎が一つ一つ解けて行くのなら、それはアダムスキー氏の体験を一つ一つ証明していくことにつながることになると思えます。また、私達が平和利用の目的で宇宙船を建造できる時代へと一歩一歩近づいて行くことにもなると思えます。

円盤の乗員とのコンタクト事件がよくあります。そしてそういう人々の中にはアダムスキー氏を攻撃目標として批判してくる人々がいます。しかしその乗員の乗ってきた円盤の写真やその円盤の記事等をよく調べてみると、スカウト・シップの推進原理ととてもよく似ていることが多くあります。同じような原理で飛行して来る円盤の乗員が、アダムスキー氏

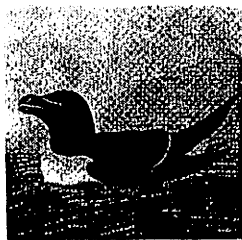
を批判するというのは不思議なことです。一体、それらの乗員というのは本当に宇宙人なのでしょうか。

私達は争うためではなく、平和の目的のために宇宙船を建造するべきだと思います。平和が人間同士の間にあるためには、まず各人の心が平和にならなくてはなりません。平和は他人に強制すべきものではなく、ましてや人のためにするものでもありません。平和はこの大宇宙の調和ある活動に混和するためのものでもあります。

そして宇宙船を建造するためには、様々なコンタクト・ストーリーを研究することがはるかに多くの知識や理解を得ることが出来ます。なぜならそれは意識と結びついているものであるからです。意識は計り知れない程の知識を持ち、それは自然や大宇宙を動かしており、そして私達の内部にもあります。しかし様々なコンタクト・ストーリーのほとんどは人間の心に関連したもので生じています。実際のコンタクトならばそれは、私達が忘れていたことを思い出すキーを私達に与えてくれます。

そして金星文字や足跡を与えてくれたスペース・ブラザーの方々、私達に早く友好的になるようにと、また意識と一体である生活をするようにと望んで温かく見守っていて下さっていると思えます。

スペース・ブラザーの方々へ感謝いたします。



不思議な人間の運命

上原則子

不思議な人間の運命

私の友人の西口和子さんとUFOを呼ぶ、元のXXXの会員でUFOを呼んだことのある方の娘さんです。彼女は、ようやく歩き始める幼児時代にどぶに落ち、流れてもう少しで下

水道に落ち込む寸前に偶然にも人目につれ、助けられたそうです。彼女のご主人は幼い頃父親に死に別れ、九州で母親と共に少年時代、氷水の行商などして、とても苦勞な生活を送られた方らしいです。現在はお寺参りと登山、宇宙・UFO関係の読書を趣味としておいでのご様子です。彼女から聞いたことですが、彼には不思議な話がいっぱいあります。

①一面顔もなかった彼女を察の附い人に紹介され結婚したことも夢で見た通りになった。夢で見た後に初めて彼女のおばさん(怖い人)から話をもちかけられた。

②行ったことのない場所でも前もつて引越した先の夢を見る。引越してみると、あの時見た夢とそっくりな所なので驚く。

③自転車に乗っている時、車に衝突した。自転車はグチャグチャになったが、彼はかすり傷ひとつ負わなかった。

④どこかの工場で働いているとき、ガラスの破片が飛んできた。「当たるよ」と思った瞬間、顔のところで止まって下に落ち、全然傷にならなかった。

彼女はUFOを見なくて仕方がなかったが一度も見たことがなく、私がたびたび見ているのがうらやましかったらしいので早くUFOを見ることができると思っています。ご主人もUFOを見るために小型天体望遠鏡を買ったりして見たがっていただけです。彼女の念が通じたのか遂に目撃したそうです。彼女は現在千葉県八千代市高津岡地の五階に住んでいるのですが、一年ほど前のことです。夜、彼女が

台所で炊事していると、台所の窓が真昼のようにパッと明るくなった。彼女は一度もUFOを見たことがなかったでUFOが来てくれたと直感した。そこで彼女はご主人を呼んで、部屋の窓から一緒に見ると、明るい星のようなUFOがゆらゆらと飛んでいたそうです。

戦場から生還した人

私は今年、現在住んでいる都営住宅の当番に当たって役員の時などは色々話を聞かれます。この住宅の副会長で相沢さんという方は二十歳で戦場から生還したそうです。好運にも現在でもご健在です。UFOコンタクト181号に「私は異星人に守られている」という岩崎敏夫さんのお話が載っていました。相沢さんの方は異星人に守られなくても偶然に生き残ったのか、それとも何らかの理由で知らないうちに守られたのか、そこが知りたいところです。中支、南支、海南島、その他南の島々へ行かれたそうです。行商に出ていて助かったこともあるし、二、三分前に外へ出たところ、兵舎に爆弾が落ちて同胞の肉片が飛び散ったとか、弾がお腹に当たったが、ちょうどその場所に出たの薬の入った金属製の容器を身につけていたので弾が外れて助かったなど、助かった時の話をすればきりがなさそうです。

彼の経験は非常に桑天の人情味豊かです。体格が良く、豪放という感じですが皆からとても信頼されておられる方です。

劇的な半生

私の従兄は三歳で実母に死に別れ、方々に預けられて育った。茨城の祖母のもと(東海村)にいたとき、霧が浦が近かったので戦闘機に特攻隊の飛行機が体当たりするのを見かけたといひます。奇空にキラキラと小さく光るもの(特攻機)が戦闘機に近づき、当たるとだんだん高度が下がって来て、遂に戦闘機は火を噴いて落ちていくのを見て、何とあわねなこと思つたそうです。

従兄も運良く助かったことが何度となくあつたそうですが、その一番劇的なのは次のことです。彼は小学校三、四年の頃、浅草の父と義母のもとに引き取られたが、あまりの環境の変化のため、精神状態が不安定になり、家を出し、少年院を出たり入ったりしていた(抜け出したり戻されたり)。深川の少年院で十三歳の頃、お前はもう良いからと言われて就職を世話されて釈放された。

就職先は保土ヶ谷化学で、軍需用の火薬や毒ガスなどを製造していたといひこと。そして就職してすぐに東京大空襲(昭和二十年三月十日)にあい、深川の少年院のあたりは全焼したそうです。浅草の実家では、義母は防空壕の中に入ると言っているのに父が「こんな所に入っていたら死んでしまうぞ」と義母をひっぱたいて連れて逃げたため二人共助かりました。保土ヶ谷化学は横浜で、高射砲の陣地が近かつたそうです。東京大空襲

襲の晩、高射砲の音がドンドンして目が覚め、屋上へ上がってみると、B29が大きな翼を開いて飛んでいて、東京方面の空は昼間をのみ明るさだつたそうです。

その後すぐに浅草の実家の跡へ行ってみた。天井ぐらいに積み上げた死体の山をあらこちに見ながら父母の消息を求めた。偶然、跡片づけをしている人が父母のことを知っていた、彼らは無事だと聞いた。そこで休日を利用して父母に会いに茨城の義母の母の所へ行ってみると、二人共無事だった。

母に上野駅の待合室で昔の悪仲間の一に偶然に出会った。彼はどこで手に入れたのか、食券をざろりと出して見せびらかし、また仲間に入れて誘惑した。食べ盛りの従兄は誘惑に負けまた悪の仲間入りをして、横浜には帰らなかつた。その後間もなく横浜大空襲があつた。保土ヶ谷化学は軍需工場であり、高射砲の陣地もあつたので、そこに帰っていたら恐らく助からなかつたのではないかと従兄は話しておりました。上野で浮浪児生活を、少年院を二カ所経た後、十代の後半ごろ、真人間になることを誓って出所し、真人間のまま現在に至つております。彼は自分に厳しく、他人には寛容という態度です。他人の悪事で自分が被害者になつても見て見ないふりをし、簡単に許してしまうような人です。悪事をしたことは事実ですが、人を傷つけたことがないのは極めてもの救いでしょう。彼の縁は、彼が家庭的に恵まれぬ運命だったので、「この家庭を幸せにしなければ」と言つておりました。

アダムスキー問題を 少年少女たちへ伝えよう



益子祐司

このたびは、スペース・プログラムに私達の方から協力する上で大変効果的ではないかと思われる一考案をお話させて頂きたく、拙筆を執らせて頂きました。
私は先般の高松円盤事件には単に一般の人々への借用性を考慮されて発生したもの、あるいは日本GAP

への激励のしるしとして与えられたものと考える前に、その全体像の中にきわめて深いブラザーズ側の思慮を感じさせられて仕方がありません。すなわち一九五二年の砂漠におけるアダムスキー氏の会見をそのまま子供向けに再現されたようなものと覚えて仕方がありません。今度は一哲学者としてのアダムスキー氏ではなく、熱心なGAP会員の母親を持つ一人の少女に。今度は理性への働きかけではなく、夢のような淡いロマンと温かいほほ笑みとふれあいを残して……。おそらく少年少女たちには、言葉も金星文字も目撃者の宣誓書も石ころで型どった足跡も、そして円盤の証写真もあまり必要なものではないでしょう。奥深い「意識」のふれあいによって彼らは私たち大人よりもはるかに多くを知るのではないのでしょうか。ブラザーズはこの絶滅の危機に陥る惑星の人類を救済する最後の手段として、純真で無垢な感受性を持つ若き生命に最後の望みをかけていらつしやるのではないのでしょうか。

私は先日、つい先ごろまでUFO展が開催されていた神田の書泉グラデの天文・宇宙コーナーにおいて大変な失望を味わいました。ふと私の目にとまったのは、立派な上製本の少年少女たちへの天文入門シリーズでした。「うちゅうじん」の巻がありましたので手にとってパラパラとめくって読んでおりますと、次のようなことが書かれてありました。「みなさんは宇宙人に入ったとか円盤に乗ったなどという話を信じてはいけません。みなさんはジョージ・アダムスキーを信じてはいけま

せん。彼は火星人や金星人と会ったなどと言っていますが、これだけでもうそであると分り切っています。けれどもアダムスキーにはCIAという組織が深く関わっています。それについては後で詳しく述べます」

そこで後方を読むと、アダムスキーが政府秘密組織のトリックにだまされている凡庸な人物であると説明されていきました。私はそこで驚きました。少なくとも私がアダムスキー氏を知った時には賛否両論に分かれていたものの、アダムスキー氏の書物の中に私は落け込んで大いなる魂の安らぎと創造主の祝福の波動を身近に感じながら、しばしメルヘンの世界に心の翼を広げて自由に生きることができましたが、現在の少年少女には、それすら許されていないのです。彼らは着書を手にする前にアダムスキー氏を拒むでしよう。

このような例はこれだけに留まるものではありません。日本の自称UFO研究者たちは機会あるごとにアダムスキー氏を否定するどころか、話題にする価値すらないもののように、あらゆる少年少女向けの書・雑誌の中で心ない言葉を述べてきました。彼ら以前はこのようなことはしていませんでした。否定するものの、当時はもつとかなり神経をどりどりさせて語調を強めていました。当時は一流の科学者や技師による数々の証言が人々の前に示されて否定論者はむしろ閉口屋のような状態でしたか自らの位置を定められませんでした。それほどアダムスキー氏の高貴な精神の波動は人々を揺らわしていました。しかし現在はどうでしょう。

否定どころかUFOそのものへの関心自体が失われつつあります。私はあえて、これは私たちの責任であると言います。私たちは低俗な興味本位の場を避けるあまりに、一人山にこもって自らを高め、片手間に奉仕をするといった小盟のときになつていた観はありませんでしたか。大盤は街に出て俗人と交わるといいます。そしてそれが其の高貴さといえるものではなかったでしょう。

創造主のつくられたこの広大な宇宙を一枚のコインに例えれば、それは「法則」と「愛」という表裏にして一体なる両面から成り立っているものです。私たちは「愛」という捕らえどころのない、一般に扱いにくいとされるものよりも、明快で即座に宇宙的な雰囲気となる「法則面」の方を重視してきた観はありませんでしたか。しかし私は最終的には愛が法則を成就するのであると思っています。そしてこれらの事を別な解釈をすれば、GAP会員がこれまで培ってきたものを試される時期が来ているのだとも言えます。

私は昨年从今年にかけて二度ほど「ムー」、「トワイライトゾーン」誌上におきまして、「ムーリントーン」をメインにアダムスキー全集と「Uコン」の紹介も兼ねて「アダムスキーの体験の見直し」と題した拙論をもつて呼びかけてまいりました。その結果、現在の中・高生のほとんどが、純粋な「アダムスキー体験」をしておらず、またUFOに関心を持ち、アダムスキーに感動した人でも、情報と知識の音無に等しい状態において、子供だましの否定的見解

に惑わされざるを得ない状態にあるという事実を知りました。

先の驚異的な高松の出来事考える時、私は単にこのことは一つの大きなニュースとして報道するよりも、少年少女たちに今再びアダムスキー氏の残された遺書を一点の曇りなき元の状態のままに戻して、その全記録及び科学的検証のすべてを目前に提示してあげるための柱軸として、低次元な批判を一切寄せつけない私たちの完全なる英知と科学知識と意識の波動のガードのなかで、立派な私たちで堂々と提示することがブラザーズの愛深い折りに真にこたえるものであると思えます。大人達が充分な理解の中にあつて、出来る限りのことをしてあげさえすれば、彼らはそれほど言葉を必要とせずに理解できるでしょう。

そこで私は久保田先生に是非ともお願い致したいことがございます。それは他誌の総力特集記事において、今世紀、いへ史上最大のコンタクトイー・ジョージ・アダムスキーの足跡の全てを、高松事件を中心にして「アダムスキーの復活」と題する一大論文を掲載されるように働きかけて頂きたいということです。

私たちの寛容性と波動の強さが本物である限り、私たちはあえて大衆の中へ入ってゆく必要があるように思われます。またそれは高松事件が単独に興味本位の波動の中に埋もれてしまわないように(単に「二ニュースとしてスクープされないように」)することでもあります。もし先生がこの案に合意されますならば、なるべく早急なご配慮をお願い申し上げます。

アダムスキー講座で 活躍する ダニエル・ロス氏



印象と「宇宙の真理」のフリーリングを伝えています。

私も目撃した

ところで私自身の目撃について少しお知らせしましょう。まず一九七四年の頃のことですが、当時私は宇宙船(UFO)について全く聞いたことがなく、宇宙についてもさほど考えてはいませんでした。私は海軍の潜水艦勤務をちょうど終えたところでした。

ある夜ニューヨーク州の私の家族を訪ねていたとき、住民はラジオでUFOが飛んでいることを知らされ、その小さな町の上空を低く飛ぶUFO(複数)を人々は見ました。数百名の人々です。私も家族と共に外へ出て見ました。

その美しい船団を初めて見たとき、突然私の生命の幻影が少しばかり心の中から浮き上がったように感じました。これは錯覚ではありません。そして私たちが目撃していた物体も錯覚ではありませんでした。

そのとき私は非常に強い生き生きとした無言の印象を受けたのです。「彼らが(スペース・ピープルが)どこから来ようとも、私たちもその惑星へ行くのだ」

それから一カ月以内に私はジョージ・アダムスキーのことを知りました。二年以内には数度の機会にカリフォルニアでUFOを見ましたが、そのうち二度はUFOが非常に接近しました。一度は母船だったのです。あまりにも貴重な個人的

体験なので、このことをまだ記事に書いていません。

超小型探査円盤が出現

一九七六年に私は探査円盤を見ました。私と妻は少数の女友達と一緒にある町の郊外を夜遅く歩いていました。そこは静かな住宅地の中で、にぎやかな商業地区や車などからはうんと離れた所です。目的地に達するにはまだ三キロあまりあります。私は唯一の男ですから、もともと早くタクシーを雇わなかったことで少々バカだったと思っていました。公衆電話は見あたりません。しかも婦人たちは寒い夜に遠い道を歩くような服装でないことが私にわかっていました。

この状況について考えながら五分間しないうちに一台のタクシーがやって来たのです。一同は何と運がよかったことかと思いました。こんな所へタクシーが乗客を探しに来るはずはないからです。

婦人たちが乗り込んでから私が前の席へ入ろうとしたとき、非常に小さな光る物体がタクシーの数フィート上空にいるのを見たのです。するとその物体は輝く青緑色となって急に速度を出し、上昇して行きました。

ゆがめられた新聞記事

今月私は三つの公開講座を受け持っています。これは成人学級です。人々はこの情報、すなわちジョージ・アダムスキーとスペース・ピープルについて教え

られると驚いてしまい、しかも非常に受容的な態度を示します。私の講座は、「UFO—宇宙に関する真相」となっています。ある人々は過去に目撃しており、喜んで体験を伝えたいという彼らのまじめな申し出を受けています。

こうした講座は新聞社からインタビュウを受けたために始まりました。その新聞を同封します。

まず言っておきたいのは、私はこの記事を郵便で友達に送るつもりはなかったということです。というのは私の話したことが記者によって少々ゆがめられており、多くの重要な事が書かれていないからです。たとえば私は全く「懷疑論者」ではなかったし、「第一種遭遇」というようなセンセーショナルな言葉を用いなかったのです。またアレン・ハイネックのようなニューフォジストのことも言いませんでした。彼はアダムスキーを支持していないからです。これらは記者自身の言葉で、勝手につけ加えたものです。私はフリーランサーであって、部分的な真相しか扱わない個人やグループの援助を得たいとは思いません。というのは私は宇宙から来る訪問者たちについて語るだけで、アダムスキー氏がもたらした完全な真実を語るだけです。彼ら(スペース・ピープル)はだれなのか、どこから来るのか、外見はどんなふうに見えるのか、なぜ地球へ来るのか、などです。

しかし記者は編集者のことを考えて自分なりに書きました。さもないとこの大新聞には何も掲載されなかったでしょう。この国にはUFO問題を疑ってかかる

米カリフォルニア州コンコードでアダムスキー支持活動を続ける闘士ダニエル・ロス氏は、かねてから編者(久保田)と熱意ある交流を続けていたが、二月下旬に送った、彼の記事が掲載されている本誌88号と当方の書簡に対して、三月十三日付で次のような丁寧な返書を送ってきた。

クボタへ

あなたが多忙な仕事から時間をさいて私に書簡を送られたことを大変名誉に思っています。あなたの機関誌は美しい刊行物であり、ご書簡とともに、印刷された文字以上にはるかに温かいものを運んでくれます。私は日本語が読めませんが、日本GAPの機関誌は「祝福」と感じられる



●ジョージ・アダムスキー

新聞がありますので、私は彼女の（記者の）立場を尊重しなければなりません。私が新聞記事に赤ペンで囲んだ部分は正しく伝えてあります。

しかし全体的に見て、この記事はジョージ・アダムスキーの業績を知ることのできる私の講座に出席するようにと多くの人々に伝えたわけですから、プラスの価値はあります。しかしこの新聞記事の内容は掲載しないようにして下さい。私の公の活動の代表的なものですから、この点を理解して下さいるものと思います。

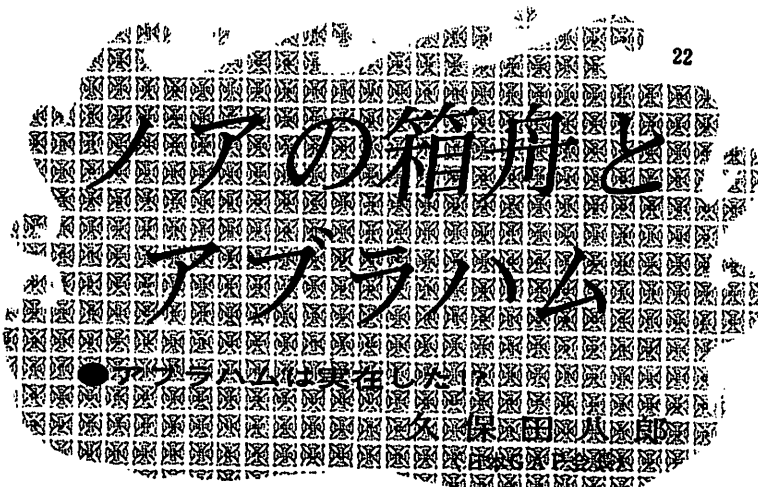
タカマツ事件に関する英語版ニューズレターを心から待ち望んでいます。テレビを通じて日本中の人がそれを知るのはエクサイティングなことです。

昨夜、妻のパメラと私は一九六〇年にジョージ・アダムスキーが語った哲学の講演の録音テープを聞きながら、遅くまで講演録を作成しました。彼が何とどうすさまじいフィーリングを持つ人であったか、そしてそれを世界中に伝えたことは私たちにもよくわかっています。彼の生命にたいする知識と、真実の簡略化は、より良き生き方を望むすべての人の内部に意識的な記憶を呼び起こすでしょう。

あなたがご子息に会うためにサンフランシスコへ来る計画はまだお持ちでしょうね。こちらへ来られれば大歓迎いたします。私はサンフランシスコから四十キロの所に住んでいます。滞在中はご子息が世話をされると思いますが、私たち夫妻も援助しますから、そのときはお知らせ下さい。



Noah
Late 14th-century Bavarian
illustration of Noah's ark

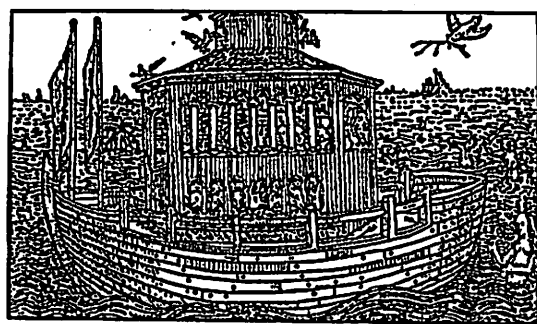


人類にとって永遠の書といわれる旧約聖書は、あまりにも荒唐無稽な記述に満ちており、フィクションナルな描写が多く、事実と虚構との交錯した混沌たる文章が渦巻いている。歴史学者をこれほどに悩ませる書もないが、一方、ユダヤ民族の雄大な叙事詩として、これ以上に深遠な文学作品はなく、読むほどに妖しい魅力がヤコブの井戸の清水のごとく湧き出てくる。

正義と邪悪、愛と憎悪、肉体と靈魂、人間と神、そして男と女——人間のもつあらゆる属性と思想が経済のごとく去来し、真理を求めて雄叫びをあげながらパレスティナの大地に悠久の歴史が展開する。

王巻は創世記である。モーセ五書の筆頭にあがるこの大作は到底卑小な一人人間の頭脳から出たものではなく、何らかの宇宙的背後関係がひそんでいたかと思えない。

ここでは創世記の中で謎の乗物となっているノアの箱(方)舟と、それに関連するアブラハム一族をとり上げてみた。これは昭和初期にわが国で意外な事件があったことが判明したために、俄然、創世記の記述に関心を高めた筆者が、昨年『歴史読本』臨時増刊84-9(新人物往来社刊)に掲載した拙稿に加筆してまとめたものである。謎と神祕に満ちた黄土色の広大なパレスティナの大地を徘徊すること二度、今夏もまた彼の地の古代の遺跡を訪うが、この土地ほどに宇宙的フイーリングを高揚させる所は地上にない。やはり何かがあったのだ。



●ノアの箱舟 (リュウベック版聖書の木版画)

箱舟は驚くべき巨船だった

山なす怒涛にロケットのごとく押し上げられた平舟が、こんどは逆さになって波間の奈落の底に落ち込むと、巨大なしぶきが猛然と襲いかかり、半分沈んだ船体の木材のきしみが悲鳴のように鳴り響く。果てしもなく続く強風と大雨。この世の終わりかと思われる地獄のような暗黒の大海原を、原始的な木造の船はあてもなく漂流する。

こうして船は五カ月もさすらいの旅を続けたあと、ついにアララテ山に漂着して停止した。これが『旧約聖書』中の名高いノアの箱舟である。

『旧約聖書』によるとノアという人はア

ダムから十代目にあたる子孫で、正しい完全な人物であった。この頃、神が創造した地には人間の悪がはびこり、世は乱れて暴虐が横行したので、神は一大決心をして、地上からあらゆる人間を抹殺することにした。そして、ノア一族だけを守ることにきめて、次のように言った。

「あなたは糸杉の木で箱舟を造り、その中に部屋(複数)を設け、ピッチでその内外を塗りなさい。その造り方は次のとおりである。

箱舟の長さは三百キュービット、幅は五十キュービット、高さは三十キュービットとし、箱舟に屋根を造り、上へキュービットにそれを仕上げ、また箱舟の戸口をその横に設けて、一階と二階と三階のある箱舟を造りなさい」

一キュービットは約五十七センチだから、右の数字をメートル法に換算すると長さ約百五十メートル、幅二十五メートル、高さ十五メートルという大昔にしては途方もなく巨大な船になる。しかも三層のデッキがあり、各層は五メートルの高さとなる。近代でこんな大きな船が造られたのは一八八五年に進水した英キユナーライン社のエトルリア号が最初である。

この箱舟は一万五千トン級の船に匹敵し、五百六十九台分の貨車に相当する収容能力をもつ。いまにもバラバラになりそうな小さな筏というようなものではない。

どのようにして建造したのか

神はさらに言った。

「わたしは地の上に洪水を送って、命の息のある肉なるものを天の下から滅ぼし去る。地にあるものはみな死に絶えるだろう。ただしわたしはあなたと契約を結ぼう。あなたは子らと妻と、子らの妻たちと共に箱舟に入りなさい。またすべての生き物、すべての肉なるものの中から、それぞれ二つずつを箱舟に入れて、あなたと共にその命を保たせなさい。またすべての食物となるものを取ってあなたの所に貯え、あなたとこれらのものと食物としなさい。七日の後、わたしは四十日四十夜、地に雨を降らせて、わたしの遣ったすべての生き物を、地のおもてからぬぐい去ります」

忠実なノアは箱舟の建造にかかった。といつても鉄器時代よりはるか以前のことでだから、おそらく石器かせいぜい青銅の道具を用いたのだろう。推定九千枚ないし一万三千枚の杉板をいったい石器で製材できたのだろうか。だいいち彼の家族構成は妻と、セム、ハム、ヤベテという三人の息子とその嫁たちの計八名である。神はノアの家族以外のあらゆる人間を見捨てたのだから、数百名の人が船の建造を手伝うはずはない。わずか八名でこれだけの巨船が造れたのか。

それに積み荷が大変なものだ。多種類の動物を番で集めて乗せよというのだから大仕事となる。陸生動物の約二万五千番を乗船させたと言書学者は見積もっているが、これを養うエサもぼう大な量となる。これをどこからどうして集めたのか。一説によると、ノアはネコを乗船させることを忘れたので、ネズミが繁殖し

て手に負えなくなつた。そこでライオンがくしやみをしたところ、その鼻孔から二匹のネコが飛び出てネズミの始末をしたという。

大洪水後アララテ山に漂着

神の予告どおり七日後に大洪水が発生した。それはノアが六百歳の二月十七日のことで、以来天の窓が開けて四十日四十夜、大雨が降り続いた。こうして地上はすべて水で覆われたけれども、箱舟だけは水上に浮かんで漂流を続けた。

神はやがて水をひかせて、地面が表出してきたので、七月十七日に箱舟はアララテ山にとどまった。だが慎重なノアはすぐに舟から出ることはせず、四十日たつてから舟の窓を開いてカラスを放つた。ハトを飛ばしたりして周囲の状況を観察した。

やがて、ノア六百一歳の一月一日に地上の水は涸れて、二月二十七日に土が完全に乾燥したのを見た。彼は一族と共に舟を出て、動物たちをすべて野原に放してやり、祭壇を作って神に感謝した。

そこで、神はノアとその子らを祝福して有名な言葉を述べた。

「生めよ、ふえよ、地に満ちよ。地のすべての獣、空のすべての鳥、地に這うすべてのもの、海のすべての魚は恐れおののいて、あなたがたの支配に服し、すべて生きて動くものはあなたがたの食物となるであろう」

ノアは洪水の後も五百五十年生きて、九百五十歳のときに死んだが、その子セム、ハム、ヤベテの子孫は大いに広が

り、特にセムの血統のアブラハム一族がエジプトを経てカナンの地に腰をおろし、神がこの土地を永久におまえとおまえの子孫にやると約束したために、ユダヤ人の選民思想が生じたことはよく知られている。

バビロニア神話の流れ?

以上のとおり、「旧約聖書」で見える限り出てくる人物はいずれも数百歳という年齢で、しかもノア一家族が七日間で巨大な船を建造したり、ぼう大な動物を船内で飼いながら一年間も船ですごすという話が展開するので、読む者は戸惑つてしまふ。いったいこんな大洪水があつたのだろうか。

古代の洪水伝説は大別して、人類が墮落したのを怒つた神が罰として大雨を降らせるといふ説と、物理的に自然に発生した洪水が伝説化したといふ説などがある。ノアの時代の大洪水はティグリス・ユーフラテス両河流域のいわゆるメソポタミア(アッシリアともいふ)地方で栄えたバビロニアの神話の流れをくむといふ説がしだいに確立してきた。

この両大河はしばしば氾濫し、住民を苦しめたので、その口碑がいつには一人の義人とその家族の話に集約したらしい。大昔、世界は広大な海をただよう平皿のようなものだと信じられていた。ところが大洪水によつてこの平皿がひっくり返されたのである。これは太古の世界的な大変動を意味するものではあるまいか。

原型はギルガメッシュ叙事詩

一九二九年にイギリスの考古学者レナード・ウーレイが、カルデアのウルに残るシュメール文明の遺跡を発掘中、約二メートルの厚さの粘土層を発見した。この層の上部はシュメール文明を、下部はそれ以前の原始的な文明の跡を残しており、これによつて「旧約聖書」に出てくる大洪水が実際に発生したらしいことが判明したのである。単なる神話ではなかつたようだ。

一方、オーストリアの地質学者エドゥアルド・スエスは今世紀初めに次のような意見を述べている。この大洪水は毎年発生するティグリス・ユーフラテスの洪水と、ペルシア湾の大地震によつて起こつた津波のダブルパンチだつたと。

この大洪水から伝説がシュメール、バビロニア、ヘブライ、ギリシアの各神話へと発展していった。このことは、古代シュメール人の都市遺跡で発掘された楔形文字粘土板が初期の伝説を伝えていることで確認されており、これは紀元前二〇〇〇年頃のギルガメッシュ叙事詩の中で改編されている。この十二枚の大きな粘土板は、ニネベのアッシリア王アッシュールバニパルの王宮図書館の遺跡から発見された。その第十一粘土板には次のように記されている。

若い統治者ギルガメッシュはバビロニアのノアともいふべきウトナピシュティムから大洪水の話聞いた。この男は海の神イアから警告される。

「おまえの家をこわして船を造れ！ 持ち物をすべて捨てて助かれ。あらゆる生き物のタネを積み込め」

ウトナビシユティムは王に語り続ける。「わたしは五日目に船の骨組みを作りました。床のスペースは一エーカーです。壁の高さは百二十キュービット、デッキの各辺も二〇キュービットあります。外形も設計しました。床の下にはさらに六つのデッキを設け、七層に分けました。

銀製の物、金製の物、あらゆる生き物の番などを積み込みました。家族や親類をすべて船に乗せてから、野の鳥や獣、それに職人などのすべてを乗せました。朝の最初の光がさしてまもなく、黒雲がやってくる、夕方までには破壊的な雨が降りました。見るも恐ろしいほどの天候です。アグド（嵐と雨の神）の猛威が天に達して、あらゆる光を暗黒に変えたのです。彼は徹底的に大地を裂きました。終日大嵐が吹きまくり、戦争のように人びとを一掃しました。六日夜風が吹き、雨は滝のように降りそそぎ、大洪水が土地をなめつくしました。

七日目に嵐と大洪水はおさまり、海はなぎになって、洪水もとまりました。わたしが窓をあけますと光が顔を照らしました。海を見ますと全く静かで、人間たちは土に帰っていました。陸地は平たい屋根のようになっていきます。わたしは塵り込んで泣きました。海の境目を求めて四方を見まわしますと、はるか彼方に一片の土地が出現しました。船はニシール山に漂着しており、二日間そこにとどまりました。

七日目にわたしは一羽のハトを放ちました。ハトは飛んで行って、また帰ってきましたが、羽を休めるような場所はないようでした。次にツバメを放ちました。同じことでした。次に大ガラスを放ちましたところ、水がひいたことを発見し、カラスは飛びまわって鳴き、帰ってきませんでした。そこでわたしはすべて生き物を四方八方に放って、いけにえを捧げ、山の頂上にお神酒をそそぎました」

ある事実を伝えてはいる

以上は前五五〇年頃、バビロン捕囚の頃に書かれた「創世記」の記述と、それより一世紀昔にさかのぼる第十一粘土板の物語が酷似していることを示している。つまり「旧約聖書」の大洪水はバビロニアの叙事詩から出たものなのだ。

ウトナビシユティムの四角な箱舟はノアの長方形の箱舟よりも二倍の大きさがあり、実にクイーンメリー号の容積に匹敵するものであった。だが、こんな途方もないサイズや形は別として、いずれの場合も当時の事実を伝えている。両船ともピッチを塗ったと記してある点だ。これは古代の編み技細工の舟を防水壁にするために用いた物質で、実際の船はたしかに防水されていたと思われるのである。

両船の船長は鳥を放ったが、これも昔は長い航海で近くの陸地の位置を知るためによく用いられた方法である。そして両船長は上陸してから神にいけにえを捧

げた。

アララト山をめぐる悲劇

「旧約聖書」でノアの箱舟はアララト山に漂着したとあるが、これはトルコに実在するアララト山を意味する。高さ五千メートルのこの山は昔からノアの箱舟の漂着地点とされてきた。だから聖なる山とみなされて、人間がここに登るのを神は望まないと信じられていた。

原始キリスト教時代に「ユダヤ戦記」を書いた有名な歴史家ヨセフスは、別な大著「ユダヤ古代誌」の中で、アララト山のことを二度述べている。

「アルメニア人はその場所を漂着地と呼んでいる。箱舟が安全に着いたのはそこであるからだ。彼らは今日までその遺物を見せている」

十字軍遠征時代に箱舟の遺物ブームがヨーロッパに広がったとき、抜け目のないアルメニア人は箱舟の木片と称するものを活発に売りつけた。

一三三六年にアララト山に登ったジョン・マンドビル卿は「旅行記」に書いて

いる。「箱舟を見てさわったという人たちがいて、ノアが祝福の言葉述べたときに悪魔が逃げて行った場所に指をふれていた」

その他、この山には箱舟にまつわる伝説や物語が多く残っている。

最初にこの山の登頂をなしとげたのはドイツ人医師のフリードリッヒ・フォン・パロットで、一八二九年に成功して下

山する途中、二つの僧院へ立ち寄ったところ、箱舟のかげらを見せられたが、山では箱舟らしい跡を見なかったという。しかし、これがきっかけとなってまたも箱舟ブームが起り、登山者が激増し、なかには箱舟を見たのだ、元のままの動物の部屋や鳥カゴが残っていたとか好き勝手なことを言う者が続出したし、ペルシア人のイカサマ師までも出現した。

これより前に、箱舟にとりつかれたジェームズ・ブライス卿はアララト山に探険隊を率いて登り、三千九百メートルの地点で一個の凍った木片をひろい、これぞノアの箱舟の一部分と信じたが、実際は巡礼者が建てた十字架の木片だったらしい。

第二次大戦後にはフランス人のフェルナン・ナバラがアララト山を二度探険し、一九五五年に氷づけになっていた箱舟から切り取ったという木片を持ち帰ったあと二冊の本を出して大儲けをやった。しかし、この山に六回も登ったというアメリカ人はナバラを非難し、あの木片はひそかにフランスから持ってきて山上に埋めておいたのだと攻撃した。

この山にはずいぶん多くの探険隊が繰り出されたけれども、まだこれという成果はないようだ。登頂して死んだ人も少なくない。

ノアの箱舟は宇宙大母船？

このノアの箱舟なるものを別な惑星から来た惑星間航行大輸送船とみる考え方もある。

ノアの時代の洪水というのには一万年周期で発生する地軸の傾きによる世界的な大変動であり、これにより人類や動物の大半が絶滅したために、地球以外の別な惑星から巨大な母船に地球開拓のパイオニアと動物を乗せて地球へ飛来し、新たな文明を開いたのだというのである。たしかに北極と南極の位置の大きさを比べたが太古にあったことを学者は確認しているし、また世界の動物の分布もきわめてアンバランスで、首をかしげる動物学者もいる。

たとえば、象はアフリカ象とインド象の二種しかなく、中南米には存在しないし、カンガルはオーストラリア、タスマニア、ニューギニアなどに分布するだけで、これ以外の熱帯地方には生存しない。とすると、動物の分布に何らかの人為的な手が加えられていたのではないだろうか。自然発生にはあまりに不自然なのである。

遠い過去の全地球的規模の大変動と別な惑星から来た大母船の記憶が人類に伝わって、これが各地の洪水伝説となり、それを鮮明に文書化したものが「旧約聖書」の物語であると考えるのは少々批判的になるかもしれないが、全くあり得ないことでもないだろう。

アブラハムは実在した!?

さて前述のノアには三人の子があり、そのうちのセムがいわゆるセム族の祖となった人物とされる。この種族から名高いアブラハムが出た。

「旧約聖書」によると彼はイスラエル民族の父といわれる偉大な族長で、神のすしめによりカルデアのウルを出て、後にパレステイナと呼ばれるようになったカナン之地へ進出したが、飢饉のためにいったんエジプトへ移動し、その後再度カナンに定住した。

アブラハムの妻はもとサライといったが、神の命によってサラと改名した。ところが子供ができなかつたために、彼女に仕えていたエジプト人のメイドのハガルを代理妻としてみずから推せんし、これにアブラハムの子を産ませた。おそろしく寛大な女房がいたものだが、この子をアブラハムはイシマエルと名付けた。

このときアブラハムは八十六歳だった。サラは生まず女のままだ九十歳となり、アブラハムが百歳となつたとき、またも神のみこころにより子供が与えられた。これが夫婦の本当の一人息子イサクである。その後サラは嫉妬心を起こしてハガルとその子を追放してしまつた。

アブラハムは神の命により、モリア山で息子イサクを燔祭として捧げることになり、岩の上にイサクを横にさせて刃物でまさにわが子を殺そうとしたとき、神の許しがあつて殺さずにすみ、その熱烈な信仰心のゆえに神から賞揚された。この伝説の岩は今もエルサレムの岩のドームの中に残っている。

松山の不思議な事件

昭和の初期、四国の松山市郊外に七八歳になる少年が住んでいた。

ある日、少年が野原へ遊びに出ていると、突然一機の円盤がどこからともなく飛来し、驚いている少年の眼前に着陸して、内部から一人のオジサンが出てきた。ニコニコ微笑しながら少年の方へ接近して来る。非常に親しみのある温顔なので少年も安心して近寄って行く。するとオジサンは少年を円盤の中へつれ込んで言った。

「坊やはいいい子だね。あなたは昔のアブラハムの子だつたんだ。だからどこへでも好きな所へつれて行ってあげよう。どこがいいかい?」

アブラハムとは何のことかわからないが、かねてからエジプトに関心のあつた少年はすかさず答えた。

「エジプトへ行きたいんじや」

「エジプト? そうか、よつれて行く」オジサンは円盤の操縦盤の位置について操縦を始めた。

さほど時間が経過することもなく、円盤はエジプトのギザの上空に達したとみえて、眼下に巨大なピラミッド群が見えてくる。感歎の声を発してはしゃいでいるうちに、円盤はアツというまにもとの松山市郊外の野原に着陸した。そして見送る少年をあとに残して円盤は飛び去つた。

我に戻つた少年は急いで家に帰り、この驚異的な体験を両親に話したが、一笑に付されてしまった。夢でも見ていたのではないかと言う。

「でもあのオジサンはアブラハムの息子と言つたんじや」

近所に油屋があるのを思い出した父親

は笑つて言う。
「油屋の息子と言われたんじやないか」

以上は、昨年十月に松山市でUFO写真展を開催した日本GAP松山支部代表の伊藤達夫氏から筆者が直接聞いた話である。

伊藤氏は写真展の期間中ずっと会場の丸三書店に通つて受付に座っていた。するとある日、見学に来た初老の紳士が、実は不思議な事案があると前置きして、右の話を語つたという。少年は現在六十歳台の社会的地位の高い立派な人物となつており、特に野鳥を観察する会の重鎮として大自然に親しんでいるが、前記の体験を絶対の事実として少数の友人や知人に洩らしているけれども、公表はしないという。写真展会場で伊藤氏に伝えた人はその少数の知人の一人であつた。

アブラハムの息子としては前記のように正妻が生んだのがイサク、メイドに生ませた子がイシマエルであるが、聖書中で重要な人物となつているのはイサクである。松山の少年は約四千年近い昔にパレステイナで活躍したイサクの転生した姿なのだろうか。そうだとすればイスラエル民族の信仰の父と賛美される伝説の人物アブラハムは実在したことになる。

この驚異的物語の詳細はいずれ伊藤氏が本人に密着取材して発表する予定というので期待したい。
それにしても本誌前号に発表した「驚異の高松市円盤降下事件」といい、四国というのはとつてもない事件の発生する所だ。

MOONGATE

By William L. Brian

「ムーンゲート」

●ウィリアム・L・ブライアン
久保田八郎 訳

〈連載第7回・翻訳連載権独占〉

第12章

アステロイド帯と月のクレーター

月のクレーターは爆撃の跡か
月のクレーターの多くは火山活動または隕石の落下で起こったのではなく、また現在地球上で存在している核兵器で出来たものでもないらしいことは、月の地理に関する章でその証拠をあげた。奇妙に思われるのは、月の海は比較的大規模なクレーター群に欠けているし、特に月の地球側の大部分をクレーター群が覆っているのに、月のむこう側には基本的に海がなく、ほとんど完全にクレーターで覆われているという事実である。

この不均衡な状態は、隕石が月面をめつたやたらに直撃したという説を裏付けていない。本書(原書)の表紙に出ているアポロ17号が撮影した月の写真は、隕石の乱雑な落下がなかったことを例証している。この写真の月の左半分は地球から見える側の部分であり、一方右半分は大規模なクレーター現象を示す月のむこ

う側である。海は左半分に黒い地域として現れている。

前章で述べたように、海は月面の他の部分よりも高度がうんと低い。しかも谷を通ってこれらの海の中へ流れ込んだ乾いた川床らしきものの痕跡があるが、この痕跡のすべては、月面が破壊される前に現在海と呼ばれている部分が本当の海洋であったかもしれないことを示唆している。

もしそうだとすれば、これらの海はかつて大部分無人地帯であり、戦争の場合に攻撃する理由はないということになる。そうなるほど大小さまざまな月のクレーター群の多くは、特殊な有人地帯を信じられぬほど強力な武器で爆撃した結果だったということを示唆している。

大昔の惑星間戦争の可能性

クレーターというものは火星、水星、木星の衛星などにも発見されてきた。もし惑星というものが比較的薄い地殻でできたもの構造だとすれば、径百六十キロのクレーターを生ぜしめるほどの核爆発または隕石ならば、おそらく地球ぐらゐの大きさの惑星の地殻に穴をあけるだろう。したがって月の大きなクレーター群がこうした原因のどちらかによるものとすれば、月全体は粗石ほどの小さなものになつていたかもしれない。

多くの科学者は、アステロイド帯は爆発した惑星の破片だと信じている。この破片は各惑星と同じ軌道面にあつて運行しており、もとの惑星が存在してもよい

ような、太陽からの的確な距離を保っているように見える。しかし何が惑星を爆発させたかの説明は、オーソドックスの科学にとつてはまだ謎のままになっている。惑星というものは、その地殻内を深く貫くほどの力をもつ粒子ビームを集中させれば、たぶん粗石のように小さくなるだろう。これは内部爆発を起こして惑星を粉砕するだろう。

かわりに粒子ビームにはほとんど貫通力のない広域拡散方式のものもできるだろうから、これを用いれば数千平方マイルにわたる地表を完全に平らにして、大きな比較的浅いクレーターを造りだすかもしれない。

もし木星や火星などを含む惑星間戦争が発生したとすれば、地球も爆撃されたかもしれない。意味深長なのは、アメリカの東部沿岸地方、北カナダ、その他世界のあちこちに、月面のそれに似た大きなクレーターの跡が空中写真で見られる点である。

ペリコフスキーの結論

アステロイド帯の位置にあつた惑星一今後これをモールドックと呼ぶことにする一は、ある種の慧星や隕石を生ぜしめて、それは今なお存在するかもしれない。現在のアステロイド帯は、爆発から生じた破片だけから成っていると結論づけるのはスジが通っている。モールドックの破片はあらゆる方向に飛び散ったことだろう。

なかには太陽の引力をのがれたのもあ

らうし、あるいは太陽のまわりを多くの異なる面でさまざまな偏心軌道を描くものもあるかもしれない。惑星群とアステロイド帯は同じ軌道面をもつので、惑星群の軌道面と交差しているだろう。このことは太陽系のあらゆる惑星の安全を絶えずおびやかすことになる。

もし人類の記憶にとどまるような惑星間戦争が起こつていたらとすれば、その出来事の伝説や記録が地球上に存在するかもしれない。イマヌエル・ペリコフスキーは太古の大破局の証拠を求めて、歴史的文献、民間伝承、考古学上の発見物、聖書類、多くの文化を伝えた文献などを研究した。この徹底的な調査から彼は約三千五百年前と二千六百年前で大変動が発生したと結論した。その結果は一九五〇年に出版された「衝突する世界」に述べられている。

伝説が語る天体異変

ペリコフスキーは三十五世紀昔に金星があやうく地球と衝突しそうになったことがありと推測した。それは慧星のように見え、広い地球を深く水没させるほどの高潮をひき起こしたという。その尾は地球がその中を通過したときに破壊的な影響を与えた。

この金星との遭遇のあいだ、太陽は数日間静止し、地球も回転を止めたと言説や口碑で述べている。この期間の終わりに地球は逆方向に再度回転を始めたが、これに先立って太陽は西から昇り、東に沈んだという。

また前七〇〇年頃に火星が地球と衝突しそうになって大規模な打撃を与えたとペリコフスキーは主張している。火星は金星にも接近して、このために両方が現在の軌道に乗るようになったという。

ペリコフスキーの問題のある考え方は科学界全体の怒りを買い、こつびどく嘲笑された。しかし後の宇宙開発による諸発見で、彼の行った声明のなかには確証される傾向になったものもある。「ペリコフスキーは再考する」と題する書物にはもつと詳細にこのことが述べてある。

月のない時代があったか？

またペリコフスキーは古代の記述から、月は短期間地球の衛星であったという証拠をあげている。読者は「ペリコフスキーは再考する」の中に出てくる「月を伴わない地球」と題する彼の記述を読むとよい。その中で彼は、アリストテレス、デモクリトス、アナクサゴラス、アポロニオス・ロディオス、プルートーク（以上は古代ギリシアの哲学者、詩人、伝記作家）、アッシリア人、インド人などの言葉や聖書すらも参考にし、地球に月がなかった時代のことを引用している。これは大昔のことだが、まだ人類の記憶に残っているという。

したがって月はモールデックの破壊後に地球を回る軌道に現れたらしいことはあり得ると思われる。たぶんそれはモールデックの大破壊以前にモールデックの月だったのかもしれない。そうだとすればそれもひどく爆撃されたことだろう。

月の広範囲なクレーター群のなかには、惑星との衝突による破片の結果生じたものがあるかもしれないが、海の中に意味深長なクレーターがないことや、他の証拠などからみて、兵器による爆撃説を示唆している。

知的に操作されたプロジェクト？

モールデックが破壊されてから金星は慧星のように見える巨大なチリ雲を捕らえたかもしれない。しかし火星が突然その軌道を変えて、地球と金星の軌道と交差する新しい軌道に移り、しかもこれを全くの自然の原因であるかのように見せかけている理由を説明するのはむづかしい。ペリコフスキーが発見した大変動に関するもう一つの有力な解釈は、モールデック破片の地球にたいする接近である。これが火星や金星と見誤られたのかもしれないという。

もしも月が最近になって地球を回る軌道に入ったとし、ペリコフスキーが言うように地球、火星、金星の軌道の変化が実際に起こったとすれば、その動きはほとんど知的に操作される必要があったということになる。

月は多くの奇妙な軌道特性を示しており、偶然でもって簡単に説明できないものがある。それは太陽と同じ直径があるかのごとくに見えるような正確な距離で地球を回っている。これは本来信じられないことだが、もつと驚くべきことは、我々には月の反対側はけっして見えないという点である。これは月が二十八日こ

とに地球を回る軌道回っているからである。もしこの二つの期間が同じでなかったら、月の反対側は数世紀にわたる観測で定期的に見えるようになるだろう。月の現在の軌道による星位から一つの重要な利点が起こってくる。もし月が定期的にその両半球を地球に向けるように自転したならば、地球の引力は月の表面の水に破壊的な潮力を生ぜしめるだろう。こうした軌道特性は、地球を回る月の軌道は地球の月面に対する潮力を最少限にするように知的に考えられたプロジェクトであったかもしれないのだ。

大昔の文明は引力をコントロールしていたか？

もしモールデックが戦争で破壊されたとすれば洗練された武器やすごいパワーが利用されたのだろう。したがって引力のコントロールは関係文明によってマスターされていたにちがいない。以上言及したような惑星の信じがたいほどの移動離れを達成するために、大浮揚力を持つビームまたは引力を誘起するビームを持たない。また地球の自転を逆にするために同じ宇宙船が用いられた可能性もある。

二万七千年前の大変動で死んだマンモス

ペリコフスキーの書物に述べられている軌道の変化は、地球の地質や気候に突然の激烈な変化を与えたかもしれない。こうした突然の変化に対する強力を証拠

は、「隆起する地球」と題するペリコフスキーの後の著書に述べられている。たとえば、かつて熱帯であった地域が現在は凍った不毛地帯になっているという徴候がある。

冷凍マンモスの口と胃の中に熱帯植物が入っているのが発見されたことがあるし、一九七七年には生まれ六ヶ月になる、体が毛で覆われた赤ん坊の冷凍マンモスがシベリアで発見された。

ロチェスター大学の科学者団がこの動物のカーボン年代測定をするために特殊な技術を用いたところ、約二万七千年間埋まっていたことが判明したのである。

この年代は第8章で述べたように、太陽の爆発が三万年弱の昔に発生して十秒ないし百秒間続き、そのために月面を焼いたという天文学者トーマス・ゴールドの示唆に驚くほど近い。このすべてはモールデックの破壊によって直接または間接にひき起こされたのかもしれない。

多種類の大変動

多種多様の大変動が長年月のあいだに発生したとも考えられる。三千五百年昔と二千六百年昔というペリコフスキーの年代はあまりに短すぎて、モールデックの破壊または地球を回る月の軌道設定の説明はむづかしくなると思われる。

しかし、かりに惑星の工学技術が不可欠の基礎として応用されるとすれば、たぶん金星、火星、地球などはペリコフスキーがほのめかしているように接近した時期に動かされて、大変動が発生した

のかもしれない。あるいはモールデックの大きな破片または隕石の接近が大変動の原因なのかもしれない。

大変動が二万七千年昔に起こって、そのために一九七七年に発見された体毛を持つマンモスが死んだというのは可能性はある。その変動以前にシベリアの気候は熱帯であったのだろう。これと似たような変動が三千五百年前と二千六百年前に発生したかもしれない。しかし体毛を持つマンモスは、それ以前の大変動のためにペリコフスキーの年代までにはすでに絶滅していたのかもしれない。

スター・ウォーズは歴史的 事実に近い？

映画「スター・ウォーズ」はモールデックの物語を基本にしているかのような感がある。その筋はルシファーを含む天空の戦争に関する聖書中の物語に似ているようにも思われる。面白いことにその映画で粒子ビームまたはレーザー兵器が惑星を破壊するために用いられているのだ。読者は米ソが現在粒子ビームやレーザー兵器を開発していることに気づいているだろうし、そうでないかもしれない。考えられるのは、「スター・ウォーズ」は映画の観客が想像する以上に歴史的事実に近いかもしれないという点である。モールデック物語は確実な根拠をもって構成されなかったけれども、月を含むこの恐るべき戦争は実際に起こったかもしれないと強く提唱するに足る証拠は存在するのである。

第13章

引力、サークル円板、浮揚ビーム

引力に関して考えられる性質やUFOが推進に應用する方式などをこの章で論じることにしよう。ある反重力装置が一九四九年に発明されたかもしれない。それによって人間を月に着陸させようとしてNASAや軍部が應用する可能性のあった事実も述べることにしよう。

引力の性質に関して多くの発見があったけれども、オーソドックスな科学界によって無視され押さえられてきた。これらの発見のうち少数の要約のみをあげることにする。

一九五〇年代に引力の放射線説が出されたが、これは引力に関して観察された種々の事実の多くに適合するように思われた。しかしそれは新しいデータが利用できるものになるにつれて修正を必要とするかもしれない。この説はあとで部分的に述べることにしよう。

第8章で説明したように、ニュートンの万有引力の基本的欠点は、引力というものとはどんな厚い物質でも貫通する無限の能力を持っているという仮定にあると思われる。引力は光のもつ特性の多くを示しているが、これは引力効果が電磁スペクトル内で高度な貫通放射線によって生じると思われるからである。そしてこの放射線は限られた距離で物質を貫通し、それから完全に消滅するのである。

キャベンディッシュ実験の誤り

二個の個体の金属球間の吸引力を測定するために、一七九八年にヘンリー・キャベンディッシュによって研究室内で実験が行われた。この実験は地球の質量を出すために当時用いられたニュートンの引力方程式における引力定数を決定したのである。だが引力放射線の限定された貫通力のために、惑星サイズの天体にこの定数を應用する際に大きなエラーが生じたのである。

小物体の場合には惑星内で発生する引力条件に似た状態が起こり得ないという理由で、引力放射線の減少が小物体にあつては惑星に匹敵する範囲に起こらない点にあるのだ。別な理由としては、より高度な周波数から引力放射線帯の中に拡散することによって生じる増大効果にある。

惑星の地表からある距離下にある内部の物質は、その質量に比例した表面引力を生じるのに役立つていないことが考えられる。なぜなら物質によって生じる引力放射線は、地表に達する前に部分的に拡散するか減少すると思われるからだ。当然の結果として、惑星の質量は地殻の厚さ、存在する空洞の割合、地殻物質の平均密度などの知識なくして、容易に決定はできないのである。

月は強い表面引力のために万有引力の法則に従うことのできない質量を必要とするだろう。地球と月は中空の構造であるという証拠はすでに出されてきた。したがって月の地殻の質量は、キャベンディッシュの実験によって予告されたよりもそれ以上の引力放射線の原因となっているのだ。

引力定数は小さすぎる

太陽はかなり広域のスペクトルで放射線を出しており、そのなかには惑星内にかなりの距離まで貫通しているのがあるにちがいない。微弱な割合の太陽の放射線が引力を起こす周波数帯の中にあると思われる。

引力放射線帯はたぶん赤外線帯下の電磁スペクトルの中にあるのだろう。惑星または月のような大きな天体を貫通するときに、赤外線帯と引力帯のあいだの、太陽から来たかなりの量の貫通力のある放射線が、天体内の何マイルもある地殻を通過したあとで変形されるか低下して、より低い周波数の引力放射線になるのかもしれない。

変形または増大効果が起こるだろうが、これは原子分子の拡散効果のためであり、これが次第に放射線に作用し合つて、その平均周波数を低下せしめ、やがて低下して引力帯になるのである。このことはある微小なサイズの物体は、かなりの量の放射線といえども引力放射線に変形させることはできない理由を説明している。ただそこには変形を生じさせるほどの物質が物体の中になだけのことである。これが意味するところは、キャベンディッシュの実験で用いられた球体は、惑星の場合よりもその質量に比例した小さな力で互いに引つ張り合ったということ

にある。したがってその実験から決定された引力定数はあまりに小さすぎるので、これではニュートンの万有引力の法則を用いて月の強い表面引力を出すことはできないのだ。

以前にも述べたように、振子のおもりはニュートン引力で要求されるほどには山から引つ張られない。これは山というものはその中で発生するかなりの量の強い放射線を引力放射線に変えるほどに大きくないからである。そして山の内部で生じる直接の引力放射線は、その上に横たわっている質量によって部分的に拡散するのかもしれない。したがって山から来る引力放射線の量は、ニュートンの万有引力の法則から考えられる量よりも少ないだろう。

UFOには強い引力場が必要

引力は小物体のあらゆる分子をほとんど等しく同時に引く。したがって自由に落下する物体は基本的には圧力を体験しない。もし激しい引力場がUFOの推進に用いられたとすれば、すごい高速で急激な直角のターンをする能力について容易に説明できるだろう。この場合特別な推進方法を用いない限り、普通の生命体は耐えられないはずである。

このような離れ業をやりとげるには、乗員を含む機体の質量をほとんどゼロに減少させる必要がある。つまり乗員と船体のあらゆる分子に同時に同じ加速をつけてやらねばならないのだ。

UFOのなかには推進用として引力を

引き起こす放射線発生機を用いているのがあるかもしれない。そうだとすればUFOコンタクティイたち(接触した人々)が船体の中へ持ち上げられた理由が説明できるだろう。しかしすぐれた推進方式ならば船体と乗員の慣性特性をほとんどゼロに減少させるだろう。もしこれが可能ならばだ。

慣性とは速度または動きの変化に抵抗する能力と定義されている。たとえば、大きな質量の物体はより大きな慣性を持ち、小さな物体よりも動かすことがむづかしい。したがってほとんどゼロの慣性をもつ船体は、非常に小さな力でもつてすさまじい加速をつけることができるし、乗員は圧迫があつたとしてもほとんど感じないだろう。このことが可能かもしれないことを示す数種類の発見がなされてきた。

浮揚の原因

ヴィルヘルム・ライヒとカール・フォン・ライヒェンバッツハ男爵を含む多くの個人研究者が、あるタイプの負の荷電粒子は引力場によって反発されるといふ事実を実験によって示した。

一八〇〇年代の後半に科学者のウィリアム・クルックス卿は、自分の体や他の物体を浮揚させることのできた男、ダニエル・ホームズをきびしくテストした。そしてクルックスは「クォーターリー・ジャーナル・オブ・サイエンス」誌に掲載された記事の中でその実験について述べている。彼の著書「心霊現象研究」には

この記事が覚え書きや専門家の書簡などとともに収録してある。

浮揚現象で行われた最近の実験を扱ったマイケル・H・ブラウンの著書は「PK・サイコキネシス、すなわち物質を動かす精神エネルギーに関する報告」と題されている。

これらの研究者によつてもたらされた実験の結果から引き出される結論は、引力放射線は負電荷の粒子から成っているか、またはその粒子を伴っているという点である。そうすると引力放射線とこれに関連する負の荷電粒子が固体の物質を引き寄せることになる。なぜなら原子や分子は全体的にわずかに正電荷をもつと考えられるからである。当然のことながらこうした負の荷電粒子を多量に含む物体は浮揚するだろう。

ビーフェルド・ブラウン効果

右の浮揚現象は見たところ高空の隕石塵によつて示されている。臨界サイズの微粒子は真空中で落下しないように見えるが、このことは地表八キロの上空に浮かぶ隕石塵によつて部分的に確証されている。この粉塵は空気の密度が海拔の約十万分の一であつても静止している。この場合、粉塵は浮揚するため負の荷電粒子を充分に集めているのだ。負の荷電粒子が放つてしまうと粉塵は落下するだろう。

驚くべきビーフェルド・ブラウン効果は、デニス大学のトーマス・タウンゼント・ブラウンとパウル・ビーフェルド

教授によつて一九二三年に発見された。

この実験者たちは、高電圧をかけた平行プレートコンデンサーは、真空中でも、負のプレートから正のプレートの方向へ動く傾向があることを発見した。言い換えれば、このタイプのコンデンサーに電圧をかけると、アンバランスな、または合成的な力がそれに作用するのである。ブラウンのこの効果に基づいた電動装置に各種の特許が与えられた。

彼は感動的な推進能力をもつ多くの実験モデルを開発した。もし宇宙船の慣性特性をほとんどゼロにまで減じ得るならば、ビーフェルド・ブラウン効果は船体にすさまじい加速をつけるにちがいない。一物体の慣性は、当を得たエネルギーを充満させてやると大きく交換させることが可能であることは証換が示している。

アカデミックな科学はただ一種の電子しか認めていないが、うんと弱いフィールドでかこまれた電子(複数)が存在することを示す莫大な証換がある。これらの電子は従来のポルト・アンペア・メーターでは容易に検出も測定もできない。この電子類はたぶんコンタクティに関する章(第11章。本誌83号に掲載)で述べたUFO宇宙船の推進システムに関連のあるのと同じ粒子なのだろう。

それらは光を伴うようであり、その構成粒子は光の光子なのかもしれない。この強度の低いフィールドをもつ電子は太陽から放射される光子を伴っており、あらゆる種類の雑多な現象の原因であることも証換が示している。

太陽は異なる周波数の異なる光子を派

山放出しているもので、強度の低いフィールドをもつ電子スペクトルは等しく広域になるはずである。こうした電子の高度な集中をもつ物体は浮揚する傾向があり、引力場からは反発されるのである。

ライヒエンバッハの「オド」

弱いフィールドをもつ「微妙な」電子はこれまで全然理解されなかつたけれども、その影響は認められ、クングリニ、プラナ、マナ、生命力などと数千年間呼ばれてきた。この微妙な電子の性質にたいして一八〇〇年代なかばに初めて本當の科学的調査をやつたのは、カール・フオン・ライヒエンバッハ男爵で、所はオーストリア、ウィーン付近の彼の居城である。

彼は数十年にわたつて数千回の実験を重ねたあげく、一八五〇年に「磁氣、電氣、熱、光、結晶、及びこれらの生命力との関連における化学的引力に関する研究」と題する論文を発表した。

ライヒエンバッハはこの微妙な電子を「オド」と名付けた。これはノルウェーの神オディンからとつたもので、自然界の万物に遍満する力を意味している。徹底かつ的確な研究のおかげで彼はオドの電氣的性質を発見し、これが光と密接な関係のあることをつきとめた。加うるに彼は、オドなるものは基本的にあらゆる生ける有機体と、それに化学反応、磁石、電氣、結晶、水などの無生物の物理現象と関連があることを確定した。そして物質の伝導性に関していろいろな法則

をもつ通常の電氣よりもオドは違う具合に作用することを発見したのである。

種々の先駆者の発見

一九〇八年にはウォルター・キルナーがみずから「人体放射線」と名付けたものの性質を研究したが、これにはオーラを見えるようにするための特殊なフィルタースクリーンを用いた。彼の発見は、人体から発する微妙な電子すなわちエネルギーフィールドに関連のあるライヒエンバッハの研究を確証している。キルナーの著書「人体放射線」は一九一一年に出版され、「人間のオーラ」と題する改訂版が一九六五年に刊行されている。

一九二五年にはロシアの細胞学者、アレクサンダー・グルウィッチが、細胞から放射される同じ電子を発見し、これをミトジェネティック線と呼んだ。彼はこの放射線が反射されたり吸収されたりすることや、これでもってイースト細胞の増殖を伸ばし得ることを発見した。

一九三六年にコーネル大学の細胞学教授、オットー・ラングが、著書「有機体の不可視の放射線」を出した。彼の発見事はライヒエンバッハ、キルナー、グルウィッチなどと同じ微妙な電子に関連がある。

一九三九年にはH・S・パーとF・S・ノースロップが、有機体から放射される電氣力学的なフィールドに関する研究成果を発表したが、この発見事は「生きた有機体における電氣力学的フィールドの存在にたいする証拠」と題する論文

中の、「米科学アカデミーの活動記録」に出ている。

ウィルヘルム・ライヒ博士は一九三〇年代、四〇年代、五〇年代の微妙な電子の性質を研究した多彩な研究者である。彼はこの電子が生きた有機体と密接な関係があることから、この微妙な電子を「オルゴン」と名付けた。そして病氣治療の目的で用いた特殊設計のオルゴン集積器の中にオルゴンを集中させることができた。この応用のために彼は医学博士であつたにもかかわらず医療体制と大きなトラブルを起こしてしまつた。

しかし彼の徹底的な研究は、生ける有機体、治療エネルギー、病氣、大氣と氣候現象、日光、放射性物質、電氣と伝導性、可視色効果、熱、その他多くの物とオルゴンすなわち微妙な電子との関係を確立したのである。

サークル効果

以上の簡単な解説は、宇宙旅行に用いられるかもしれないサークル効果をよく理解するための土台としていくらかをあげたのである。サークル効果は一九四九年にジョン・サールという名のイギリス人電子工学技術者によつて発見されたと思われている。

彼は回転する金属の物体にわずかな電圧が誘起されることに気づいた。周囲の線には負、中心部には正の電荷を帯びるのだ。これは遠心力によつて中心から外側へ自由電子が投げ出されるのだと推論した。当然、この原理をもとにしてジェ

ネレーターが作れるかもしれない。

サールの最初のジェネレーターは、分割された回転板と、外側に投げ出される電子を集めるために使う静止した電極から成つていた。アーマチュアは径九センチあり、小型エンジンで回転した。その結果は全く予想外のものであつた。アーマチュアのスピードを低くすると、円板はそばの物体に強力な静電効果を生じて、パチパチという音とオゾン、ニオイを放したのである。回転が臨界スピードを超えてもアーマチュアはエンジンの助けをかりずに加速を続けた。

ジェネレーターはついに地面から浮き上がったが、なおも加速を続けて、ジェネレーターとエンジンの連結を切つても約十五メートルまで上昇した。

回転速度が増大し続けるにつれてジェネレーターは一瞬この高さの空間に停止したが、その間、ピンクの光輪がその周囲に現れた。この光輪は周囲の大氣のイオン化を示すものと思われる。別な効果としては、周囲のエネルギー・フィールドの影響から、土地のラジオ受信機がひとりでに鳴り出した。

ついに、ジェネレーターは別な臨界回転速度に達して、急速に上昇し、視界から消えたといわれている。

慣性を失う物体

一九五二年以来、サールと他の人々は径九十センチから九メートルに及ぶさまざまな大きさのジェネレーターを建造したと思われている。彼の驚くべき発見は、

UFOのなかにはこれと同じように作動するのがあることを示唆しているかもしれない。多くのUFOに回転する分割面が付属しているのが目撃されているからだ。

この発明の最も重要な点の一つは、極端に高いポテンシャルになると、コンポジットパーツがかなりの慣性を失うことである。サール円板に関するこの情報の真実性は確証できないが、それを真実だと仮定すると、サール円板が作動する方法の論理的な説明はできるだろう。

サール円板のアーマチュアが回転したとき、普通の電子（標準的な装置で測定できるもの）はおそらく縁の方へ投げ出されて、わずかな電圧を生じたのだろう。しかしそれだけではあとの現象の説明ができない。円板の物質に過剰している微妙な電子も、回転によって外側へ投げ出されたのだろう。微妙な電子はきわめて不安定と思われるので、ちよつとした刺激で崩壊し、その途中で光と熱を出すのだろう。回転するアーマチュアがこの微妙な電子の多くを崩壊させるのかもしれない。かわつてこのことは莫大な量の普通の電子を放出させ、これにかわつて静電効果がアーマチュアの周囲に生じたのかもかもしれない。

微妙な電子が縁の方へ投げ出されるにつれて、円板の中心部に一時的な空間ができるのだろう。すると周囲から別な微妙な電子が飛び込んで来て空間を埋めるのだろう。このことは渦動運動を起し、それが円板の回転速度を増大させたのかもしれない。

かわつてスピン速度が増すにつれて、莫大な数の粒子や空間も巻き込まれるようになるだろう。ついに円板はすこく強力な負の電荷を帯びるので、地球の引力がそれに反発して浮揚させるのだろう。

微妙な電子の最高度の集中のときは、たぶん地球の表面に密接しているだろう。ゆえに円板がこの集中状態を超えるならば、その電荷を一時的に失うかもしれない。それで空中に停止するのである。

ついにそれは再び同じプロセスによって大きな負の電荷を帯びるようになり、減少した慣性のためにすさまじい割合で上昇したのであろう。もし宇宙船の慣性がサール効果によってゼロにされるならば、そのときはビーフェルド・ブラウン効果を用いて、すさまじい加速と速度をつけてやればよい。

サール円板とある種のUFOは共通した多くの特徴をもっていると思われる。両方ともそのまわりに光輪またはイオン化現象が見られたとか、地面に接近して停止したときに植物を焼くのが見られたとか言われてきた。また電子的な干渉やノイズ効果も生じたという。

サール効果によって生じたUFOの周囲の微妙な電子の超高度な集中状態のときに、人間がそれに接近しすぎるとケガをするかもしれない。ジョージ・アダムスキーのようなUFOコンタクティーは船体に触れるなど注意された。これはおそらくUFOの周囲の微妙な電子が常に崩壊の過程にあるからだろう。高度な集中状態は物体内に入って崩壊し、大量の通常の電気を放出するので、それが内部

と外部の損傷をひき起こすのだろう。このことはUFOと接触するかまたは大接近した植物に起こるかもしれない。

不思議なミサイルの重量の減少

引力の性質について糸口を与えるもので、宇宙開発上秘密にされている別な発見事は、宇宙空間におけるミサイル重量の消失と呼ばれている。広範な種類の微妙な電子の集中状態が宇宙空間に存在しているかもしれない。これはちょうどバンアレン帯のようなもので、このために人工衛星の重量と慣性がなくなったのである。このような人工衛星の用語がフランク・エドワーズの著書「奇妙な世界」に出ている。

エドワーズの主張によると、この現象は一九六〇年十一月に出された空軍の説明によって公式に確証されたという。損傷を受けない人工衛星デイスカパーは極軌道に乗る前は百三十五キログラムの重量があったのに、打ち上げて数日後に回収したら五十六キログラムに減っていた。

エドワーズの別な記事ではソ連のスパーク・エドワーズの破片のことを述べている。これは逆噴射ロケットが故障して軌道上で爆発したのだが、その金属破片は極端に軽いことがわかった。その後も全く別な破片が発見されたが、調べてみると通常の重量の半分よりも重量を失っていることが判明した。かけらの一つを水差しに入れてみたところ、その水差しまで重量を失い始めたのである。このことは衛星の破片によって捕らえられた微妙

な電子の多くが脱出し、かわつてコンテナに捕らえられ、そのために重量が減ったことを示唆している。この発見は本章で述べた引力放射線説とそれに関連した微妙な電子の説を更に裏付けるものである。

本章で述べた多くの驚くべき発見は、月に人間を着陸させるのに応用されたかもしれない。結局、これらの発見は二十年以上も古いのだ。軍部は常にこの種の新発見のトップをいつているので、一九六九年以前には長く反重力装置の実験をやつてはいなかったのだと考えるのは素朴である。この証拠は次章で出すことにしよう。(第13章完。以下次号)

高松事件余話

伊藤道夫

高松市の円盤墜下事件(本誌第8号参照)のテレビ放送取材のため、日本テレビレクチャーの矢追純一氏は一月十二日、カメラマンたちとともに西本さんを訪れた。そのとき次のような不思議な出来事が発生した。

まず、取材開始後五分経過した時点で、テレビカメラのバッテリーがあがってしまった。取材前には十分点検をして異常のないことを確かめていただけに、カメラマンも「不思議だなあ」としきりに首をかしげていた。

さらに、矢追氏と森生ちゃん(マンションの広徳の田園見える金網のところ)が話合っていた時、すぐそばで田んぼを見ていた森の佳世ちゃん(目の前一メートル半のところに、上から白いボン玉を二つつつたような小さな物体がスワックと降下して来たのを目撃した。その物体は、刈り取られた田んぼに落ちる直前にパッと消えてしまった。矢追氏と森生ちゃんはすぐそばに立っていたが、お互いの金髪に気を取られていて、この物体には気づかなかった。

なお、この番組は日本テレビ「イレブNPM」で放送される予定であるが、放送日は未定である。

投稿欄 ユーコン広場

驚異的な高松円盤事件

北海道 坂野英津子

新春早々の88号の内容はどれも皆素晴らしい記事ですが、伊藤さんの取材報告による「驚異の高松市円盤降下事件」は圧巻です。こんな小さな少女の上に大事件が発生したとは驚きですが、奈生ちゃん自身が既にこのような特別な能力を持っていたからこそコンタクトに選ばれたのでしょうか。会話を訊みますと、奈生ちゃんは小学一年生にしては非常に観察が鋭く、その記憶力の確かさには驚いてしまいました。普通の六歳の子どもとは思えません。こうしたカールミックなものと、伊藤さんが独力で松山の地においてUFO写真展を行ったその業績を、プラザーズの方々が祝福されて出現されたのでしょうか。伊藤さんのスペースプログラムへの真剣さは松山支部報を讀むたびに感じます。GAP内のこうした優れた方々の実践は私たちが勇気づけてくれます。

先生がお書きになられているように昭和六十年は飛躍向上の年になりそうですね。函館には畑野さんと私の二人しかおりませんが二人で協力して委託販売を始めました。またお送り頂いた「UFOコンタクト」も病院を中心に献本に歩いております。今までは一人だったのですが、今は畑野さんがいますので心強いです。とにかく地道にコツコツとやっ

て行きましようとお互いに励まし合っているところで。今年の海外研修旅行はエジプト・エルサレムになったようですが、何と素晴らしい行き先でしょう。今年行ける方が羨ましい限りです。この二国の組み合わせなら希望者も多いことと思います。又今秋のGAP総会は創立二十五周年にあたり、気分一新して会場を銀座ガスホールにする由、静岡支部ではありませんが本当に「久保田先生四分の一世紀の活躍」の総会となりますね。今年はずり出席致します。

東京月例会もテレビ購座が始まり、テレビ開発に向けて改めて真剣に取り組まれるそうで、そうした熱意の一端が書景グラデで、UFO写真展開催なのでしよう。GAPの機関誌は創刊号より88号までそろえてありますが、これは大切な宝物です。今年もよろしくお願ひ申し上げます。

来るべきときが来た

広島市 佐々木明子・智子

厳しい寒さが続く毎日ですがあと数日です。立春。フキのとうもろ顔をぞかせ殖寒に春が近づいて来るのを感じ今日この頃です。

本日は素晴らしい写真をお送りいただき誠にありがとうございます。お忙しい中わざわざ送ってくださった先生のご厚意に感謝の気持ちでいっぱいです。本日に素晴らしい写真ばかりで感激していますが中でも鶴

鳴教会横の石段の写真は、見ていると吸い込まれて、自分が実際にそこに居るような気持ちになってしまいました。大切に飾らせていただきます。また同封していただいた「UFOコンタクト」は、ちょうど友人に渡したいと思っていた矢先で、そのタイミングの良さに二人で顔を見合わせてビックリしました。

今回の「UFOコンタクト」88号の高松円盤事件は、驚きと同時に「来るべき時が来た」という感じが強くしました。この事件には計り知れない深い意味があるような気がします。とにかく私たち一人ひとりがスペースプログラムの一環としてGAP活動に真剣に取り組まなければならぬと改めて感じております。先生が松山支部報に書いていらしたように、先生の振られる旗にどこまでもついて行くつもりです。どうぞこれからもお身体に気をつけてご活躍ください。

ドギモを抜く高松の出来事

兵庫県 平塚和義

先日は大変お忙しい中を私たちのためにテープを送って頂きありがとうございます。これで支部の皆さんも大いに勇気づけられ新しい年として大いに希望と信念が持てることでしょう。

豊岡の移動月例会は約十三名が参加されます。これらの人は皆大変熱心な人ばかりなので、すばらしい月例会になると今から楽しみにしております。今年の大阪支部としましては先生のテープ中のお話の中にもありましたように個人の宇宙的な向上に努力する一方でスペースプログラ

ムに最大の協力を進めていく方針でありますので、昨年に引き続き、より一層のご指導をお願い致します。大阪の月例会では最近新しく三名が入会されました。この人たちは皆大変良いカルマを持った人で、真にア氏哲学を学ぼうとする人たちです。入会の動機は友人に「Uコン」を見せられたと言っていました。「Uコン」の効果もぼつぼつ出はじめて来たようです。「Uコン」88号は初めて広告が出されており大変良いアイデアだと思えます。このため一般の雑誌のような感じになり抵抗感なく、ごく自然に普通の人が読める感じになったことには大いにPRしやすくなったと思えます。また内容は高松円盤事件のドギモを抜くような記事があり、大いに一般にPRしたいと思えます。また88号では神戸港に出たUFOの写真も載せて頂き、本人たちは大いに喜んでおりました。これからこういうことがありましたらまず先生にご報告致します。

宇宙的な子供達と共に

新潟県 岩嶋節子

久保田先生、お元気ですか？ 私は普段、上越市に住んでいます。私は去年の4月に新採用で妙高南小学校に参りました。以来、子供達(五年生)と毎日楽しく過ごしています。

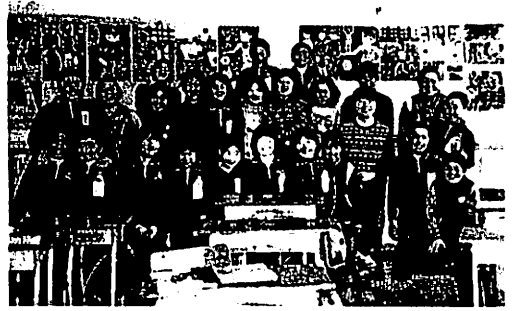
このころ、というより、うちのクラスの子供達とも宇宙について関心が高く、毎日星を見ている子供達が多いのです。日頃アダムスキー氏の本に書いてあったことを、わかりやすい言葉で話してあげるのですが、その時はみんな目をキラキラ輝かせて聞いてくれます。この太陽系には

十二個の惑星があることを彼らは信じています。石の心、花の心を聞いてあげられる優しい心の持ち主ばかりです。

子供達は時には仲間はずれにしたリケンカすることもありますが、そういう時はときに私は「一体感」という言葉を思い出して次のように言います。「あなたも、この間、原子について勉強したね。人間は、いや人間だけじゃない、すべてのものは原子というものが集まってできていて、最後にはまた原子に戻る、ということば、あなたがたの体をつくっている原子は、たまたまAさんの体に使われたのであって、この次は他のものに使われるかもしれない。だから他人なんてないんだよ。みんな自分の体の一部だと思ってごらん。自分で自分の体をいじめる子なんていないでしょう？」

すると子供達は「ヘエーッ」というような顔を、「そうか、みんなつながっているんだな」とつぶやいた子もいましたし、何だか照れくさそうな顔をしている子もいました。

また彼らはスペーススピールの存在を信じています(私が彼らと出会う前から)。「先生、宇宙入っていると思うけどさ、どうして地球に来るの？」「それはね、地球を救うために来て下さっているのですよ」「みんなが一年生から順に六年生まで進級するのと同じように、この太陽系の惑星の間でも宇宙の勉強があるの。だからみんなは今地球という一年生の段階の惑星で学習しているけど、頑張って、心を正しく持って学習すれば次の惑星に行けるんだよ」



▲岩嶋節子先生と山の子供たち

子供達は各自悩みごとなどを空を見上げてスペーススィープルに聞いて頂いているようです。そうそう、去年の秋ごろ授業中「あ、光った」と子供達が叫びました。「あ、また」。一回目は黄色、二回目は紫色で、しかも六角形だったそうです。それから大騒ぎになりましたが、きつとプラザーズが子供達を祝福激励して下さったのだと思います。子供達と共にこれからも万物との一体化のフィードバックを高めていきたいと思えます。

私自身は去年の6月ごろから空中のキラキラ光るツブや、モヤモヤが見えるようになりました。また、たまにですが光体を見ます(時には夢の中でアダムスキー型円型)。人間は思った通りのものになる、と、日頃子供達に言っていますが、私も思えば小さいころからそれを実践していました。受験の時は「受かりま

すように」ではなく、もう「〇〇高校一年岩嶋節子」と書いて、受かった気になるのです。すると不思議に受かるのです。想念の持ち方、これが大切ですね。本当にそう思います。最後に久保田先生から是非ひと言、子ども達にメッセージをお願いします。きつと喜ぶと思います。それではお体に気をつけてがんばって下さい。私達もがんばります!! さようなら。

魂をふるわせる「生命の科学」

北海道 山崎泰照

毎日ご多忙の事と存じます。長い年月にわたるご活動と不屈の信念に深い感謝と敬意の念がわきおこってきます。遅れましたがアダムスキー全集完結、誠におめでとうございます。そしてほんとうにどうも有り難うございました。ニュースレターに掲載された長い論文や講演録を加えた全集を長い間夢見ていたのですが、それを實現して頂き、何とも言葉はありません。また、久保田先生ご自身の長い長い年月の困難に満ちたアダムスキー活動の結晶として、カルマの焦点として明確な形で現されたような、その事に象徴されているかのような感じもします。

この頃は「生命の科学」に非常に強くひかれるようになりました。同時に、今のうちに「生命の科学」に徹底的に打ち込んで、そこからできる限り吸収し、生きていく上での確固たる土台を築き上げなさい」とか「生命の科学」を吸収するにあたって最も重要な事は、(自らの意識を用いて)原因まで見るように(知覚)すること(我を振り返って、裡に

学び、裡にきくこと)であり、この姿勢を少しづつでも確立させようとしなす限り「生命の科学」も単なる形骸化した知識で終わってしまう。とか、「生命の科学」を用いて、内なる宇宙的な人間が育つのを助けなさい」という印象が時々起こってきます。また「生命の科学」を読むと、今まで気にとめる事なかつた所が気になったり、新たに発見したような感じの起こる事がよくあります。

時には「生命の科学」という木立ちの(言葉による表現)という向こう側にあるもの輪郭が何となくわかるような感じがし、その比類のない素晴らしいと驚いてしまったこともありました。アダムスキーを通してもたらされた最大の贈り物は「生命の科学」と「想念観察」です。

話ばかりですが、十五、十六歳の頃よく、肉体を保つ事を学びなさい」という印象がありました。言い換えれば、常に若いまの肉体を保ちなさい。活動的な生活を送れる肉体を保つよう心がけなさい」というような感じですが、この頃再びその印象が強く起こる時があります。心身共に若く強く純粋に保つための習慣を再確立させようと思っており、肉を保つことを通して表現する以上、肉もそれなりに扱ふべきでしょう。また肉体の機能と構成に関して、それなりの知識も必要になってくるでしょう、宇宙的な見方での。それから以前は一時いくらあかつた、懺悔能力も再び取りもどし、発達させなければならぬと感じております。また肉体人間として何度も厳しい

訓練といえる事に出会い、自分の弱さに出合ったり、誤つた習慣的想念に出会ったりしました。それらを通して人類に個別に仕えているというキリスト意識、あるいは宇宙の意識が自分にとつてほんの少しづつ現実味を帯びてきたように感じる時がありました。そしてそのような時は宇宙普遍の一大人格、宇宙の意識の象徴に対して感謝と敬慕の念がわき起こり、それが自分ばかりではなく自分の周りも自然すべてを暖かく抱擁しているような、力強く生き生きと輝いているような感じが起こりました。ある時は動揺しそうになったのですが、そんな事で動揺するんじゃない、あなた一人じゃない、私も一緒にいるんだよ」という印象とパワーを感じました。案外これはプラザーズからのだったかも知れませんが、いろいろ体験していくうちに、

自分も積極的に自分なりに人々や社会に対して何かをし始めなければならぬ時が近づいてきたのかと、少しづつでもカルマの成就に向けて、あるいはカルマ(今生も含めて)の負債を返すように、より力を入れなければならぬ、とかの考えが浮かんでくるようになりました。また日々ささいな思いや、行い、言葉の重み(影響)を強く感じるようになり、想念観察がどうしても、どのような形でも、もっとも日常生活で生かされなければならぬと感じ、すぐその姿勢をとってしまいます。村人関係では思いやりを、理解をこめて、更に心が静まった時には、かすかではあります。華仕するという事について学びはじめなさい、もっと深くもつとよく理解し、少しづつ

つ身につけるように」という印象が心の底に依然としてあるように感じます。否、少しづつですが、はつきりと力強く浮かび上がって来ようとしているかのようです。ところでこの数カ月前からは、以前は一時とらわれがちだった想念に全くとらわれなくなり、自分でも驚いています。また昨年から強くひかれ、気になっていた言葉である「私は異星人から何を学んだか」の、自分の想念とそれが大分他人に及ぼす影響を理解する事に大きな関心をもち始める必要がある。そして自分の心をこの想念の出所と、自分がその想念のとりこになる理山の方へ向けるのである。実際、人間は自分の想念の主人公にならねばならないのに、いったいどれだけの人がそうなっているだろうか」というのが何となくわかり始めてきました。

素晴らしい東京月例会

山梨県 田中法代

初めてお便りいたします。私は昨年十一月にGAP入会したばかりの会員です。先日初めて十一月の東京本部月例会に出席させていただきました事が出来ました。月例会は想像していた通りで、すばらしいフィードバックと他の会員の熱心に学ぶ姿に圧倒されました。私がGAPに入会するきっかけとなった「Uコン」の出合いは、山梨に住んでいる私ですが、偶然、東京の町田市にある書店に入り、「Uコン」を見つけた。当時山梨には「Uコン」は置かれていませんでした。今思えば不思議です。また今年の十月三十日の朝六時三十分頃、白根山の稜線でものごすこく

明るく輝く光を発見しました。双眼鏡でみましたら四角い窓のようなものが四、五個横に並んでいるのが見えました。私はこれは巨大な母船ではないかと思いました。そんな事があつたので前から行きたいと思つていた月例会に思いきつて県内のGAP会員である清水様と連れて行つてもらいました。これからはアダムスキー哲学を学び少しでも実践できたらと思つております。今後ともよろしくお願ひ致します。

家族全員がGAP会員

千葉市 中里信彦

長い間御無沙汰していますがお元気でしょうか。私は職場が変わつてから二年になろうとしています。昨年の四月にある事故にあつて、それが宇宙の意識に促されては絶対駄目なんだと強烈に心に刻みつけられる結果となりました。GAPの会員になつてからもかなり遠回りをしながら前進して来たように思いますが、今頃になつてようやく意識による生活の重要さが分かつて来ました。結局の所これしかないのだという事が最近になつてやっとのみこめたという状態です。以前にも想念観察を二年間位やつたり、透視やテレパシーの練習をして、かなり色々な事が分かつたつもりでしたが、今考えると本当の理解という点には到つていなかったように思えます。

最近私の妹と母がGAPの会員になりました。これは私にとつてとても嬉しいことです。さらに妻と二人で、少しずつですが勉強会をやるようになりました。まだ「宇宙からの訪問者」のはんの初めの部分です

が……。結婚した時から二人で勉強できたらどんなに良いことかと思ひ続けて来たことですから、多少なりとも実現出来て本当に喜んでいます。これもまた友人と久保田先生のおかげです。そのうちに家族で月例会に出席出来るかも知れません。これからも私達の事をよろしくお願ひします。私にはまだまだ理解出来ない事や悩みが沢山ありますが、幸い遠藤さんが同じ千葉市内の比較的近くに居て、今度相談に乗つてくれるそうです。また先生に会えるのを楽しみにしています。

アダムスキー哲学は現代の哲学をはるかに超えている

神奈川県 松原真弓

前年は87号に小生の小説(二十一世紀の地球)を載せていただき感謝しております。それぞれの切れ目に気のきいたタイトルをつけていただき、あれで何かピリッとした記事が事らしくなつたように感じました。さすがに長年編集をされてきた事と感心いたしました。

先日は郷里の鳥取市に帰りました。その時、姉やいとこにGAPの会員にならないかとすすめておきました。将来、鳥取にも支部が出来たらよいと思ひます。

本年は地球の現代哲学と宇宙哲学の比較論をすすめて書いてみようと思つております。アダムスキーの哲学は地球の現代哲学をはるかに超えています。哲学の進む方向を明らかに示していると考えます。この事実一つをとつてみてもアダムスキーの体験が事実であることは明白であり、非常に価値あるもので、我々が

学ぶべきことを多大に含んでいると考ええます。今年もよろしくお願ひします。

(その一)

移動月例会は素晴らしい

兵庫県 仲間秀樹

毎日寒い日が続いていますが、お元気で活躍のことが拝察いたします。今日は過日の移動月例会のお礼と報告をしたくペンを取りました。参加者は十二名で西は広島、東は福井からの参加者があり、十三日午後一時より四時三十分まで開催され、先生のメッセージテープをお聞きした後、テレパシー練習、今年の抱負など一人一人発表され、非常にすばらしい月例会でした。またこの月例会は前日の土曜日から泊まつておられた方がほとんどでしたので、いづれなく家族的で、終始なごやかな楽しい二日間でした。

今回頂きましたメッセージで、GAP活動への協力・推進プラス宇宙的能力の向上を図るということが大きな柱であつたようでしたが、このことは参加なさつたほとんどの方が真剣に受け止めて、そのようにやつて行こうという意見でした。その感想文を二・三行という少ない文章ですが、全員の方々のものを次母の支部報に掲載予定です。また、二月の支部月例会まで(一月十四日・二月十五日まで、土・日を除いた毎日夜十時〜十時五分)の間テレパシー受信の練習を行うことを決め、二月の月例会までは私が送信することになりました。この結果はまた二月の月例会で集計する予定です、まずは試行というところです。

月例会当日は午後から猛吹雪となり、夕方には三十七センチ以上の積雪となりましたが、すべてスケージュール通り進み、都市部に住んでいらっしゃるほとんどの会員の方はその美しさにとても感動されました。ということで、無事移動月例会も終了しました。今回は先生に来て頂けなくて残念でしたが、テープでメッセージを伺うことが出来て幸いです。今後とも大阪支部をご指導下さるようお願い申し上げますとともに、知らせる運動を進展させるためにできる限りの協力をいたしますのでよろしくお願ひ致します。

(その二) 下口沼には同調しない!

今日、伊藤さんから松山支部報が届き、先生の「地球の「世間」と大宇宙」という記事を読ませていただきました。そしてとても勇気づけられました。そんなことかと思ひますと、高松の円盤降下事件ですが、あのことは多分報前・後を通じて近年にない大事件で、これがテレビで放映されることなどから見ても今やアダムスキー問題や宇宙空間のことについての真実が広まる先がけになると見えています。本当に胸がワクワクします。先生はあの事件を発表なさつてGAPを去つた人があると書いていらつしやいました。本当ですか? 全く思ひもよらないことですか? 何が信じられないのでしょうか?

ところで先生の記事の「世間を知るとどこか」があります。私は以前宇宙的な見地から「地球の下口沼の様なものと同調はしない」という信念

がありました。ところがその後「その信念のウラには知つておかなければならないものがあるのでは」という恐いもの見たさの心理も働き、昨年一年間は地球の実態について観察してみようと、少し周囲の人との交流を通じてその人たちの考えを理解しようとしてみました。

そうして実態を知る前と知つた現在とを比較してみますと、やはり最初に持つた信念が正しい、すなわち同調していてもだめだという結論に達しました。このことは今年の一月六日にとても強い印象となつて内部からわき起こりました。ですから周囲の人の中には地球独特のフィリ

ンゴで自分のカに同じ込もつてしまつていて人が多いのですが、そのような人の喜怒哀楽に同調していても決して本当に求めている幸福を私は感じないのです。むしろ夕方仕事から帰つて西の空に輝く金星や月をながめて思ひをさせている時の方が、分裂しているこの世界にいても何かみんなが一つで大きな家の中にある様なフィリソングが起こりとても楽しくなります。こんな時には先生が松山支部報に書いておられた言葉をお借りするなら「自分自身の純粋さと高貴さの欠如に涙を流す人こそ、真に人間の本質を知る人です」というように感じるがあります。

また私の知り合いがあることでトラブルを起こしたときに「何でお互いに理解しないのか。地球人はこれほどまでに、宇宙の子として生きている」ということを知らないのか。無知と不信の中で生きていることすら知つてはいないのだからか」と思つた時には本当に涙があふれてき

ました。しかしこれは単なる私の感傷ではありません。これからもそうだと思います。むしろ今はこういう意味では本当の喜びや楽しさを宇宙の中から学び得つつあるのだと感じています。

今年になってから先生は東京月例会でテレパシーの開発を中心に遠藤さんの協力などで実施されているそうです。一月分のテープを小島さんから頂いた時に一月例会に遠藤さんが作成されたテキストが同封してあり「支部の皆さんのために使って下さい」とのメッセージを下さいました。そのおかげで今後大いに役立つものと思っています。

このテレパシーについて先生は以前から「トラバシ」というのは他人のマインドを見抜けないため、そのために不信や誤解が生じるのだ」ということをおっしゃっていました。まさにそのとおりです。よく「話さなければお互いのことが解らない」と言いますがそれはある程度あります。例えば名前とか住所とか……しかしその人の本心まで分かるでしょうか？ 話し合う上であまりにもことばにとらわれて、つまり耳・マインドにとらわれて分らなくなってしまう心の中に二重性を作ってしまったのではないのでしょうか。その人の本当の人格や才能を知るにはテレパシクな感知力がたよりになると思います。(中略)

スペース・プログラムの協力は並たいたいでいいのではないかも知れませんが、少なくとも今までの悔いがないようにやってくれたということから、今後の展望に大いに期待している次第です。これからもよろしくお

願ひいたします。

スペース・プログラマーに会った?

横浜派 浜瀧彌子

高松事件にショックを受けて以来GAPのことを一日も忘れられなくなり。一月十六日のことですが、私にとつての大事件が起きました。スペース・プログラマーらしき人に接したのです。その時はあまり信じられなかったのですが、日がたつにつれて残念なことをしてしまつたと感じるので。気付いてすぐに神奈川支部へ報告しましたが久保田先生にも報告した方がよいと思いました。その人は外人で一六五センチ程の身長、柔らかな黒髪で三十歳前後に思えました。私のメートル程前を歩いているうしろ姿に気付いて割と軽い気持ちで「スペース・プログラマーですか?」と聞いてみたのです。テレパシーです。するとすぐにその人は立ちどまつて振り向き私をじつと見たのです。今思うと、この時に気付いていれば話しかけることができたろうなあという感じがしますが、あまり急だつたのであわててしまい、恥ずかしさもありません。信じたいことでもあり、私は逃げる様な態度をとつてしまいました。するとその人は向こうへ行つてしまつたので「でもどうして振り向いたんだらう」と思いつつ「もしプログラマーなら戻つて来て下さい」と見失つた方を見ながらテレパシーを送つたのです。何とその人はずつと向こうの方で足を止めてUターンして来たのです。それなのに私はまだ信じられませんでした。プログラマーに会えるなんて本当は無理だろうなあと思つていた部分が

多かつたからだと思ひます。そしてあわててしまひ私の方にまつて歩いて来る彼と目をあわせることができませんでした。「まさか」という気持ちでいっぱいでしたし「話しかけられたらどうしよう」という気持ちもありました。ポーツとしている私の横を通り過ぎてその外人は去つて行きました。

あとで気付いたのはその日は月例会テープを初めて申し込んだ日でGAPにも送金した日だつたのです。そのあとで聞いた一月の月例会のテープの中に「プログラマーとコンタクトするにはテレパシー能力が無いといけない」という話があり純感な自分が情けなく思ひました。今思うとテレパシー受信能力は信じ難い程優れている方だつたと思ひます。とても嬉しいことでも残念なことなのですが、スペース・ビープルは本当に普通の人として生活しているのです。実感として分かつたことはとてもショックでもありません。

不思議な出来事

東京 大山ひろみ

長い間ごぶさたして御りました。恥ずかしながら私GAPへは三度目くらいの復帰です。総会の日私のパソコンインストラクターの初日、夕食会にしか出られませんでした。あの時から「生命の科学」(古い本)と「宇宙からの訪問者」を読み続けています。特にこの二週間は不思議なことが(GAPではあたりまえ

のことなのでしようが)二、三ありました。実は今日(十一月十九日)の午後、会社(派遣業務なので現在は京橋)の女の子とちよつと仕事の手を休めて雑談をしていましたところ、突然その子が「大山さん、UFO見たことある?」と聞くのです。正直なところ私はちよつとめんくらつてしまいました。過去にさんざん頭がおかし(今もおかしいのですが)と言われた経験がありますので、相手がそういう話題を持ち出すまでは黙っているのがほとんどです。しかし毎日毎日思ひを寄せている「アダムスキー問題」のことが彼女に伝わつたのでしよう。(私は毎日昼休みになると、ひとり喫茶店に行き「宇宙からの訪問者」を読んでいます)それに今日は三十二年前の十一月二十日のことを覚えていたのです。

彼女は先日UFOを見たそうです。家の近く(春日部)で、夜、オレンジとも赤ともいえるとてもきれいなUFOだつたと話してくれました。UFOは絶対存在すると信じているので、なぜUFOは現れるのか、それに對して私達はどうかしてはな

らないのか、などの疑問を彼女に投げかけました。そして本を貸してあげようかと言うと「それがUFOに関する本であることを知ると」とても喜んでいました。帰りぎわに、今からブックセンターに行くことを告げました。すると「UFOの本を買いに行くの?」と聞くので、雑誌がどのくらい売れているか見に行くのだと言いました。「何の雑誌?」と首うでUFOの雑誌だと答えると目をまんまるくして「どうしてそれを早く買つてくれなかつたの?」でも私はどうして大山さんにUFOの話なんかしたんだらう」と、たいへん不思議がついていました。私にはそれがとても愉快でした。

話が長くなってしまいました。私も献本活動をさせてはいただきたいと思ひます。お手数ではございますが、何冊でもけっこうですので、お送り願えたら幸いです。切手か余りましければ、使つていただきたく思ひます。新しい本の「宇宙からの訪問者」を読んでみると涙があふれてきます。先生、ほんとうにありがとうございます。お体に気をつけて下さい。

だれにもわかる
生命の科学
1982年版

第1部 (第1~3課)	売り切れ
第2部 (第4~6課)	500円
第3部 (第7~9課)	500円
第4部 (第10~12課)	会長特別寄稿文 500円

〈B6版 活字タイプオフセット印刷〉
送料 1冊 170円 2~3冊 200円 4冊 250円

発行者・申し先/安藤澄雄
〒274 千葉県船橋市松が丘 5-3-15
ルミハウス A-2
振替/東京 2-156115



大盛況!

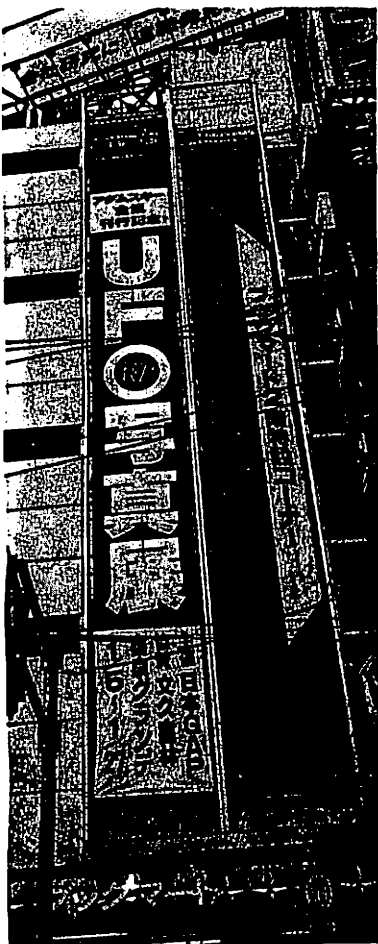
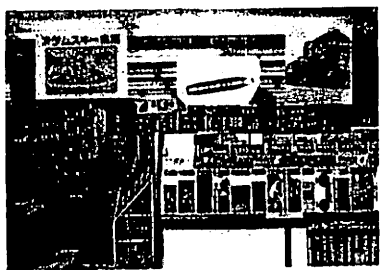
東京UFO写真展

去る一月五日より二十七日まで東京神田の大書店、書泉グラндеで、日本GAP主催・文久書林協賛のUFO写真展が開催され、大盛況裏に幕をとじた。出品点数は五十数点、アダムスキー撮影の円盤・母船の名高い写真類を主体に、国内

外の素晴らしいUFO写真を加えて、一階から五階までの階段脇の壁や踊り場に所狭しとはかり整然と展示された珍しい写真に多数の来客が注目していた。また付近の支店ブックマートの外壁には、縦十三、五メートルの巨大な垂れ幕も掲げ

られ、通行人の目を引いた。東京では画期的な催しだけに他の出版社からも照会があった。総合的には多大の成果があったと確信する。今後とも機会あれば第二回目を開催したい

●なお日本GAP静岡支部も来たる八月一日より七日までの一週間、静岡駅の駅ビル内「パルシェ」五階ギャラリーでUFO写真展を開催する予定で準備中。多数の観覧者を期待している。期間中は毎日午前十時より午後五時半まで開場。



第6回 松山支部大会

●三月二十四日(日)

●松山市民会館

●出席者 五十五名

第6回松山支部大会は松山市民会館に久保田先生とかつてない多数の会員をお迎えして盛況裏に開催されました。

佐々木智子さんの司会で始まった大会は、冒頭高松事件の目撃者・西本奈生ちゃんの母親である西本有水子さんの講演が行われました。西本さんはその中で四官のコントロールの大切なことや高松事件の意義などについて明快な口調で話されましたが、会場では娘さんの奈生ちゃんもお母さんのお話にしばし聞き入っていました。

続いて久保田先生が「GAP活動とアダムスキー哲学」と題してご講演になり多大の感銘をお与え下さいました。先生はその中で①高松事件は何十年に一回あるかないかの大変な事件であり、究極的には日本GAPの活動を激励するために発生したものであること、②今後GAP内部でこれ以上の事件が発生する可能性があること、そうした事態に対処するために自己訓練を行って万物との一体感、宇宙の意識との一体感を深める必要性があること、③GAPの究極の目標はGAP活動を世界の平和運動の中心にすることであり、それは明治維新を成し遂げ、日本を開国に導いた先駆者達の活動に似ていることなどについて語られました。

大会終了後はホテルの日本間で夕食会を開いて会員相互の交流の輪を広げることができました。支部大会の夕食会では初めて日本間を使用したのですが、出席した皆様からは「とても雰囲気がい」との好評をいただいて喜んでおります。翌日は二十二名で久方高原方面へのドライブを行い、自然界の春の息吹きを味わっていただきました。

お世話になった久保田先生とご出席の皆様には心からのお礼を申し上げます。また大会の準備と運営面でご協力いただいた支部の皆様と他の惑星の兄弟の方々に感謝の想いをお送り致します。

(伊藤達夫)



〈予告〉60年度地方支部大会—その2—

	第7回 静岡支部大会	第1回 茨城支部大会	第5回 新潟支部大会	第5回 旭川・札幌合同支部大会
日時	4月28日(日)(2日連休の初日) 午後1:00—5:00	5月5日(日)(2日連休の初日) 午後1:00—5:00	5月26日(日) 午後2:00—5:00	6月23日(日) 午後1:00—5:30
会場と交通	「ホテル サンライズフジ」3F ホール。☎(0545)64—2355 静岡県富士市本町1—1、国鉄 富士駅前。 東京方面からは新幹線こだま号 にて三島駅下車、下り東海道本 線に乗り換えて富士駅へ。東京 より所要時間約1時間半。大阪 方面からは新幹線こだま号にて 静岡駅で下車、上り東海道本線 に乗り換えて富士駅へ。静岡駅 より所要時間30分。	「サンレイク土浦」2F会議室。 ☎(0298)22—2001 常盤線土浦駅東口下車。 徒歩15分(タクシーなら東口か ら基本料金内約¥500)。 東京方面からは上野駅より常盤 線に乗り、土浦駅まで各停で所 要時間約1時間、急行なら55分。	「新潟厚生年金会館」4F バラの間 新潟市南万代町1番8号 ☎(0252)43—3551 新潟駅より徒歩5分。 (東映ホテルのとなり。チョコ レート色の建物) 3月14日の新幹線上野駅開業に ともない、上野→新潟間を2時 間で結ぶ直通列車が開通してい	「旭川ターミナルホテル」6F ☎(0166)24—0111 旭川市宮下通り7丁目(旭川駅 直結)
会費	¥2000(希望者のみ全員記念写 真代¥800を別納。グランドキ ャビネ料・送料共)	左に同じ	左に同じ	左に同じ
プログラム	司会 高梨和明 1:00 支部代表挨拶 野口敏治 1:10 講演「宇宙哲学の学び方」 日本GAP会長 久保田 八郎先生 2:15 休憩、記念撮影 2:35 全員自己紹介、質疑応答 5:00 閉会	1:20 支部代表挨拶 清水勝一 1:30 講演「アダムスキー問題 と世界の未来」日本GAP 会長 久保田八郎先生 2:45 休憩、記念撮影 3:15 全員自己紹介、質疑応答 5:00 閉会	司会 足立亘宏 2:00 支部代表挨拶 星 富治夫 2:10 講演「UFO問題と人間の 生き方」日本GAP 会長 久保田八郎先生 3:10 記念撮影・休憩 3:30 自己紹介・質疑応答 5:00 閉会	司会 山内裕理子 支部代表挨拶 阿部 勉・高野省志 1:15 会員講演(題・講演者は 未定) 1:45 講演「UFO問題と宇宙 哲学実践法」日本GAP 会長 久保田八郎先生 3:00 休憩・記念撮影 3:30 全員自己紹介・質疑応答 5:30 閉会
夕食会	大会終了後6:00から8:00ま で大会会場と同じホテルで希望 者による夕食会を開催。今回は 「久保田先生4分の1世紀の活 躍」と題して、本邦初公開の先 生の若かりし頃の貴重な写真、 その他珍しい写真類をスライド で公開します。ご期待下さい。 会費 ¥5000	大会終了後6:00から8:00ま で大会会場と同じ保養所内で希 望者による夕食会を開催。 会費 ¥5000 (保養所といっても6階建の 堂々たるホテル)	大会終了後5:30より同会館1 Fのレストランにて希望者によ る夕食会を開催。(料理はめいめ いで好みのものを注文)	大会終了後6:00から8:00ま で。同じホテルの別室。 会費 ¥4500
宿泊	「ホテル サンライズフジ」を お世話します。 1泊 お1人様 ¥5000(シン グル・ツイン) (大会会場と同じホテル)	「サンレイク土浦」をお世話し ます。霞ヶ浦を一望、筑波山も 絶景。 1泊 ¥3740(税込) (大会会場と同じ保養所)	「新潟厚生年金会館」をお世話 します。 シングル ¥5000(税込) ツイン ¥7900(税込) (大会会場と同じ会館)	「旭川ターミナルホテル」をお 世話します。 シングル1泊 ¥5000(税込) ツイン ¥9600(税込) (大会会場と同じホテル)
申込	夕食会、宿舍、観光の申込はハ ガキで4月26日までに下記へお 申込下さい。 〒422 静岡市西島304—9 野口敏治 ☎(0542)86—7729	夕食会、宿舍、科学万博見学の 申込はハガキで4月30日までに 下記へお申込下さい。 〒312 茨城県勝田市津田片岡 1946—2 清水勝一 ☎(0292)73—1903	夕食会、宿舍、観光の申込はハ ガキで5月10日までに下記へお 申込下さい。 〒946 新潟県北魚沼郡湯之谷村 井口新田572番地 星 富治夫 ☎(02579)2—5562	夕食会、宿舍、観光の申込はハガ キで6月17日までに下記へお 申込下さい。 〒078—17 北海道川上郡上川町 本町 阿部 勉 ☎(01658)2—1585
観光	大会翌日は希望者で富士山周辺 の雄大な素晴らしい景色を見な がらバスで周遊します。ホテル 出発10:00→田貫湖・朝霧高原 で昼食。3:00に新幹線三島駅 着。	大会翌日は日本が世界に誇る筑 波科学万博を見学します。当日 は振替休日のため団体割引がき かないので、入場券はなるべく 当日会場入口で買えば¥2700。	大会当日(26日)の午前中、自 然科学館を案内します。ここは 未来都市のフィーリングに満ち た知識の殿堂です。 60センチ反射望遠鏡、レーザー 実験、映画「パワーズ・オブ テン」、自由行動。館内レストラ ンにて昼食などを予定していま す。 9:30厚生年金会館を出発。 費用¥750(昼食代別)	大会翌日は十勝岳連峰、模範牧 場を見学。費用¥1000
備考	5月の月例会は大会のため中止	5月の月例会は大会のため中止。 質疑応答の質問はなるべく紙片 に記して当日受付に提出して下 さい。	質疑応答に先だって質問事項を 記入する紙片をお渡ししますの で、記入の上受付にお返しくだ さい。5月の月例会は平常ど おり19日に行います。	6月は月例会中止。

※以上の他に60年度は9月22日に東京総会、10月6日に大阪支部大会、10月20日に山形・仙台合同支部大会、11月3日に群馬支部大会、11月23日に名古屋支部大会を開催の予定です。詳細は次号以下掲載。

エジプト・エルサレム宇宙考古学の旅

■日本GAPは国際的視野を開くために毎年海外研修旅行を実施して多大の成果をあげてまいりましたが、昭和60年度は87号に予告した「イギリス・フランス宇宙考古学の旅」を事情により変更して、標題のとおり、エジプトとイスラエル訪問を行うことにしました。

■ご承知のとおりエジプトは5000年昔からの雄大な巨石文化の跡をとどめており、謎に満ちた遺跡の国で、アトランティス大陸文化の名残りと思われるギザの3大ピラミッドをはじめ、驚異的な石造文明の建築物の充満した大地です。またイスラエルは2000年前に地上最高の栄光と悲運に生きた金星人イエスの土地であり、特にエルサレムにはその最期を物語る遺跡がていねいに保存されています。日本GAP会員が一生に一度は見るべき地上最大最高の遺跡として、この2カ国にまきるものはありません。万障お繰り合わせの上、多数ご参加下さい。大体のコースは次のとおりです。

■8月10日(土)午後成田空港を出発して一路エジプトのカイロに向かい、11日午前カイロ着、専用バスにてまずエルサレムに向かい、夕方同市着、ホテルへ。12日は終日エルサレム市に滞在、バスにてオリブ山、エレオナ教会、昇天教会、ゲッセマネ庭園、イスラエル博物館その他を見学。13日にベツレヘム、ビアドロローサ、聖墳墓教会、鶏鳴教会、シオン山の2階座敷、歎きの壁、旧城壁内、岩のドームその他を見学。14日はバスで南下し、クムラン洞窟、マツァダの遺跡、死海での海水浴、1万年前の最古の都市跡エリコを見学後ティベリアへ行き同市に宿泊。15日はガリラヤ地方を周遊し、山上の垂訓教会、ナザレの町、聖告知教会、ガリラヤ湖上遊覧、ヤッフォの町などを見てテルアビブに宿泊。16日午前テルアビブを飛行機で出発、カイロ着後ただちにギザの3大ピラミッドとスフィンクスを時間をたっぷりかけて見学、サッカラの階段状ピラミッドその他をまわり、同夜カイロ泊。17日カイロ発、飛行機でアブシンベルへ行き、アブシンベル大神殿と小神殿を見学後空路アスワンへ。アスワンハイダムや古代の石切り場などを見学してアスワン泊。翌18日アスワンより飛行機でルクソールへ飛び、メムノンの巨像、ハトシェプスト女王葬祭殿、王家の谷(ツタンカーメン、セティ1世の古墳等)を周遊、壮大なカルナック神殿、ルクソール神殿等を視察後寝台列車でカイロまで車中泊。19日、カイロ市内と世界屈指のエジプト考古学博物館その他を見学。20日午前カイロ発、空路帰国の途につき、21日午後成田着。

■以上を要約しますと、最初にイスラエルのイエスや旧約関係の遺跡を視察後、次にエジプトへ入り、巨石文化遺跡を見学という順序になります。両国とも過去に数度日本GAPの海外研修旅行で訪問した実績がありますが、今回はエジプトの未見学地アブシンベルとアスワンが加えられているのが特長で、エジプトの寝台列車で北上するのも楽しい旅となります。

■両国を数度訪問した経験のあるベテラン添乗員の田中正(ワールドセブントラベル社幹部・日本GAP東京本部役員)と、海外団体旅行引率の経験豊富な日本GAP会長・久保田八郎によるGAP独特の家族的雰囲気にも満たした素晴らしい旅を満喫して下さい。現地では優秀な日本人ガイドが案内します。(GAP会員でない方も参加できます)

● 期間 昭和60年8月10～21日(12日間)

● 費用 ￥498,000 (60年度は航空運賃・ホテル代等で若干の変動があるかもしれません。24回払いローン利用可能。詳細は案内書をご参照下さい)

● 案内書 下記へハガキでお申し込み下さい。

ワールドセブントラベル株式会社 田中正(宛)

〒150 東京都渋谷区東3-24-9、サンイーストビル2F ☎(03) 499-2461 / 夜間と休業日は(0462) 63-0615

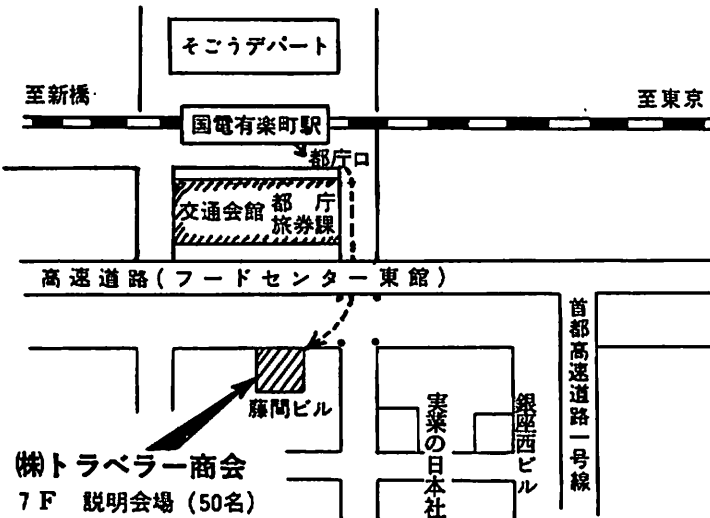


説明会案内

「エジプト・エルサレム宇宙考古学の旅」の第1回旅行説明会を下記の要領で開催します。参加申込者はもちろん、考慮中の方も一応ご出席下さい。

とき 5月12日(日)午後13:00～17:00
 ところ トラベラー商会7F説明会場
 東京都中央区銀座2丁目2番19号
 藤間(とうま)ビル7F
 ☎(03) 563-5461～2 会費無料

国電有楽町駅下車、銀座側出口より、交通会館を前にして、左側面の道路をまっすぐ行き、フードセンターを通り抜けた外堀通りの向かい側。徒歩2分。入口のエレベーターで7階へ。



ジョージ・アダムスキー全集

B6判・本文上質紙・厚手表紙箱入豪華本

久保田八郎訳 全7巻
徹底的全面改訳決定版

偉大な進化を遂げた宇宙の人類と通信したアダムスキーの驚くべき体験と、究極の宇宙的思想を伝えたこの全集は、人類に宇宙的覚醒と眞の生き方を示す最高の指針。UFOと宇宙哲学の研究者必携の名書です。

1. 宇宙からの訪問者

338頁 ¥2500

2. UFO問題の真相

262頁 ¥2500

3. UFOとアダムスキー

350頁 ¥2500

4. 宇宙哲学

148頁 ¥1300

5. テレパシー開発法

190頁 ¥1800

6. 生命の科学

205頁 ¥1800

7. アダムスキー論説集

370頁 ¥2500

ジョージ・アダムスキーのあまりにも有名な体験記。1952年11月20日に米カリフォルニア州の砂漠で金星人と会見した体験「空飛ぶ円盤は着陸した」を本書の第1部とし、円盤や母船に乗り、多数の異星人と会見した実録を第2部とした驚異的な書物。本全集の中心をなす最重要なもの。

第1巻の補遺的なUFOと異星人問題の真相を詳述。特に円盤の推進理論や、 UFOとの関係を述べた箇所は重要である。第2部はアダムスキーの世界講演旅行記。各国のGAPグループの活動と反応や、サイレンス・グループの卑劣な妨害が克明に描写されている。

アダムスキーが実際に体験した母船による宇宙旅行を詳細に述べた「金星旅行記」と「土星旅行記」から成る本書第1部「死と空間を超えて」が旺巻。またアダムスキーが存命中に日本GAP会長・久保田八郎に送り続けたぼう大な情報と書簡類を収録して第2部とした。

人間のセンス・マインド（肉体の心）と宇宙の意識との一体化を中心思想として、人間を進化させる方法を明快に理論整然と説く。この哲学は、人間の意識と物質との関係の解明と応用とをめざす21世紀の科学の最先端をゆくもので、アダムスキーの哲学関係三著作の中心となるもの。

人間に内在する宇宙的な能力のうち、テレパシー能力の開発法を説明したもの。特に目・耳・鼻・口の4官をコントロールして、内部の意識から来るテレパシクな印象を受取る方法を詳しく解説し、他人と無言の会話をを行う技術を述べた、類書の全く存在しないガイドブック。

アダムスキーが他界する数年前に出したScience of Lifeと題する12分冊の講座を和訳して一冊にまとめたもの。アダムスキーの宇宙的哲学の総まとめ的な一大金字塔で、眞実のテレパシーと心靈的な靈界通信の相違を明確にし、心靈現象への接近を警告する画期的な書。

日本GAP機関誌に掲載されたのみで、単行本化されていなかったアダムスキーの論説や講演録等を網羅編さんしたもの。特に死去する直前の最後の講演が旺巻。第2部にはアダムスキー研究者として名高い久保田八郎が数度渡米してアダムスキーの高弟たちとインタビューした記事を収録。アダムスキーの偉大な面が描写されている。

※送料は各巻¥250。但し発行所宛直接注文の場合に限り、下記のように定価・送料をサービス。

☆1冊注文＝送料は出版社負担。書籍代のみご送金下さい。

☆第1巻より第3巻まで一括注文＝特別セット価格 ¥7000(送料共)

☆第4巻より第7巻まで一括注文＝特別セット価格 ¥6500(送料共)

☆第1巻より第7巻まで一括注文＝全巻セット価格 ¥13000(送料共)

郵便振替または現金書留で
ご注文下さい。

文久書林 〒162 東京都新宿区榎町33 Tel. 03(267)6920 振替 東京4-2521

新刊〈ポケット・ム〉シリーズ 絶賛発売中

●久保田八郎著 / 学研発行

ルールドの奇跡



■1858年2月、フランス南部の寒村ルールドで発生した世にも不思議な事件は、奇跡的な難病治療の続発とともに世界的に有名になり、苦難の生涯を終えた聖女ベルナデットは全世界カトリック信者の崇敬的になる。現地取材とぼう大な資料によるベルナデット伝記の決定版。

アトランティス大陸の謎

■古代ギリシアの偉大な哲人プラトンが書き残した太西洋に沈んだ大陸の謎を追って世界のミステリー探究者が活躍した跡を詳細に調査し、著者独自の推理を加えて、ここに意外な結果が浮上。面白いこと無類のノンフィクション・ミステリー最高の書。これまた莫大な資料を駆使してアトランティスをあらゆる面から浮彫りにした。

各新書判 定価 480円 / 送料250円

全国の書店で発売中。品切れの際は書店に注文するかまたは下記へ直接ご送金下さい（切手代用可）。

〒145 東京都大田区上池台4-40-5 学研販売部

***** 日本GAP全国月例研究会案内 *****

支部名	日 時	会 場	会 費	携 行 品 ・ 行 事
東京本部	毎月第2土曜日 午後2:00→6:30	上野公園内「東京文化会館」4階会議室。 ☎03-828-2111。国電「上野駅」の「公園口」下車。改札口の真向かいスク。 連絡先＝日本GAP ☎03-651-0958	¥ 500	2:00→3:00 00会員による体験講演。 3:00→4:30 久保田会長の「テレバシー開発法」 構成と近況報告。テレバシー練習、休憩。 4:30→6:00 自己紹介、意見発表、質疑応答。
大阪支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	大阪府吹田市出町4丁目「吹田市民会館」☎(388) 7351。 国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。連絡先＝平塚和親 ☎06-436-3478	¥ 200	テキストとして「テレバシー開発法」(文久書林刊)を持参。東京例会における久保田会長の講演テープを公開。テレバシー練習・研究会。
新潟支部	毎月第3日曜日 午後1:30→4:00	長岡駅前「パークホテル」2F、ローズルーム ☎(0258) 36-2331 連絡先＝星富治夫 ☎02579-2-5562 足立直宏 ☎0252-62-0968	¥ 200	テキストとして「テレバシー開発法」持参。東京本部例会における久保田会長の構成録音テープを公開。テレバシー練習、研究会。
福岡支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00 ※4月より代表交替。	福岡市天神町5丁目1-23「福岡市民会館」3F 国際会議棟 連絡先＝喜多正直 ☎092-863-5438	¥ 300	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。久保田会長の東京例会における構成録音テープ公開。研究会と研究発表。テレバシー練習。
名古屋支部	毎月第2日曜日 午後1:00→4:30 ※6、7月のみ時間と場所変更。 6月＝午後1:00→4:30 7月＝午前9:00→12:00 会場＝第2会議室。	名古屋市中区吉沢町7-1「名古屋市民会館」特別会議室。☎(052) 331-2141 国鉄、名鉄、地下鉄「金山駅」下車。徒歩5分。 連絡先＝林 國直 ☎0566-45-6468	¥ 300	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。久保田会長の講演録音テープ公開。研究発表・テレバシー練習、研究会。
仙台支部	毎月第4日曜日 午後1:10→4:20	仙台市「市民会館」会議室(西公園内) 連絡先＝立原弘可 ☎0222-95-0725	¥ 300	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。久保田会長の構成録音テープ公開。テレバシー練習研究会。
山形支部	毎月第1日曜日 午後1:00→5:00	山形市小白川町「社会福祉センター」 山形駅よりバスで野島局前下車。徒歩3分。 ☎0236-42-5181 連絡先＝清水 正 ☎0238-37-5635	¥ 200	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開、テレバシー練習、研究発表、研究会。
札幌支部	毎月第1日曜日 午後1:00→4:30 4月より「札幌市教育文化会館」に変更。☎011-271-5821 札幌市中央区北1条西13丁目 4月7日(日) 9:00→12:00 5月19日(日) 9:00→12:00 6月は支部大会のため中止。 7月7日(日) 9:00→12:00 8月4日(日) 13:00→16:00	中央区北一条西13丁目「札幌市教育文化会館」会議室 ☎011-271-5821 連絡先＝高野省志 ☎011-822-8260	¥ 500	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。久保田会長の講演録音テープを公開、テレバシー練習、研究会。
静岡支部	毎月第1日曜日 午後1:00→5:00 ※4月より支部大会のため月例会は中止。	静岡市駿河区「静岡福祉会館」会議室 ☎0542-54-5221 連絡先＝野口敏治 ☎0542-86-7729	¥ 200	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。東京本部例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレバシー練習、研究発表。
旭川支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00 ※6月は支部大会のため月例会は中止。	旭川市6条通4丁目「勤労者福祉会館」 2F小会議室 ☎0166-26-1304 連絡先＝阿部 亮 ☎01658-2-1585	¥ 500	東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。研究発表、アダムスキー著「テレバシー開発法」「生命の科学」を持参。質疑応答、テレバシー練習、研究発表。
松山支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00 ※奇数月は広島市広島駅ビル内「ステーションホテル」3F会議室。 ※偶数月は松山市民会館会議室。	松山市民会館会議室 連絡先＝伊藤達夫 ☎0898-22-3060	¥ 200	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の構成録音テープ公開。質疑応答、研究会。
群馬支部	毎月第2日曜日 午後1:00→5:00	群馬県太田市「社会教育総合センター」 3F 連絡先＝久保寺信一 店 ☎0276-25-5958 自宅 ☎0276-45-3544	¥ 200	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。東京本部月例会における久保田会長の構成録音テープ公開、研究会。
青森支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00 ※4月より支部代表は鈴木武男氏に交替。	青森市堤町1丁目4-1「青森市文化会館」会議室 ☎0177-73-7300 連絡先＝山村嘉彦 ☎0177-38-0416	¥ 300	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。テレバシー練習、研究発表、研究会。
沖縄支部	毎月第3日曜日 午後1:00→6:00	〒901-22 宜野湾市野嵩1547 マキシア パート 新里方 連絡先＝新里義雄 ☎09889-3-3695	¥ 500	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。久保田先生による講演録音解説テープ公開。質疑応答。記念観察とテレバシーの研究報告。自己紹介研究会等。
秋田支部	毎月第2日曜日 午後1:00→5:00	秋田市八幡運動公園1-2「中央公民館」 趣味の間。☎0188-24-5377 連絡先＝伊藤正治 ☎0188-62-2831	¥ 200	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。東京本部月例会における久保田会長の構成録音テープ公開。テレバシー練習、研究会。
神奈川支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	神奈川県川崎市川崎区高辻2-5-2 「川崎市立労働会館」第1研究室 修 ☎044-222-4416。国鉄京浜線「川崎駅」下車。市バス、本旗線、労働会館前。 連絡先＝大崎孝典 ☎0492-65-0369	¥ 500	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テキストとして「
茨城支部	毎月第3日曜日 午後2:00→5:00 ※5月は支部大会のため月例会は中止。	水戸市梅香1-2「水戸市中央公民館」 4F小会議室 ☎0292-24-6600 水戸駅北口より徒歩10分。 連絡先＝清水勝一 ☎0292-73-1903	¥ 300	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレバシー練習、研究会、研究発表等。
長野支部	毎月第4日曜日 午後1:30→5:00 ※時間と電話変更	塩尻市大門7番町「塩尻市総合文化センター」第1会議室。☎0263-54-1253 塩尻駅下車。徒歩10分。 連絡先＝大野 仁 ☎0265-72-4217	¥ 300	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。東京本部月例会における久保田先生の講演録音テープ公開。テレバシー練習、研究会、研究発表等。
紀南会	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00 ※4月は第3日曜日	和歌山県新宮市新宮6882-1「新宮市福祉センター」1F相談室。☎0735-21-2760 国鉄新宮駅下車。徒歩5分。連絡先＝松口幸之助 ☎0735-22-3641 夜 ☎0735-34-0605 (時、田中)	¥ 300	テキストとして「宇宙からの訪問者」「テレバシー開発法」を持参。東京本部月例会における久保田先生の講演録音テープ公開。テレバシー練習、質疑応答、研究会。

わが国でアダムスキー問題を正しく伝える唯一の文献である本誌は後世に残る貴重な資料となるものです。ぜひおそろえ下さい。下記以外の旧号も残っています。お問合せ下さい。

No.86 主要記事「月には濃密な大気と強い引力がある」ウィリアム・ブライアン/「超低空で接近したアダムスキー型円盤！」遠藤昭則/「山腹に着陸した巨大な円盤!？」清水南/「アダムスキー型円盤、超低空で出現！」清水正/「テレバシーと透視

No.87 主要記事「月と地球は空洞のコアをもつ天体か」ウィリアム・ブライアン/「宇宙から来る訪問者たちは地球人を指導しようとする」ジェニー・アベ/「絶対に真実であったアダムスキーの体験」遠藤昭則/「丸窓の並んだ母船が出現！」後藤澄子/「二十一世紀の地球」松原真弓/「異星人イエスの足跡を訪ねて」久保田八郎

No.88 主要記事「驚異の高松市円盤降下事件」伊藤達夫/「人工衛星による写真と地球上の異様な発見物」ウィリアム・ブライアン/「米政府はUFO問題の真相を公開せよ」ダニエル・ロス/「太田市上空に頻出するUFO」久保守信/「不思議な予知夢の実現」内藤重雄/「テレバシー開発基礎トレーニング」久保田八郎

各 ¥ 700。★バックナンバーに限り送料は不要

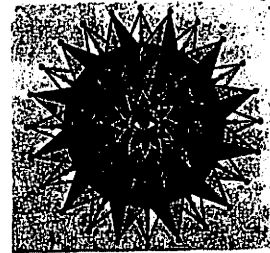
「テレバシー開発法」解説講義録音テープ

昭和60年1月より1年間にわたって東京月例研究会で毎月1~2集ずつ日本GAP会長・久保田八郎先生が解説される録音テープです。アダムスキーの宇宙的哲学の中心をなすテレバシー開発は、宇宙的人間になるための重要な条件。平易な解説と深遠な内容をぜひお聴き下さい。各支部月例会用の必須のテープ

テープ1本(90分) ¥1000 千200

※このテープは日本GAPでは取扱いませんので、××月分と記して必ず下記へご注文下さい(第1点より在庫)。

〒430 静岡県浜松市寺島町221、小島園弘
TEL. 0534-32-8502 / 振替名古屋7-51065



①オーソン肖像写真 ②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第二部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウェルズのスケッチにもとづいて女流画家ガイ・ベッツが描いた名画の写真。(キャビネ判・カラー写真)

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は「すべてを見透す眼」で、宇宙の意識をあらゆる、肉體の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらゆるしている。(サービ判・カラー)

上記2点共、重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

① ¥ 600 千120 ② ¥ 300 千60—括注文の場合千120

③ゼナーカード

アメリカで開発されて世界的に広まったテレバシー練習用カード。5種1組のカードを1箱に5組、計25枚

収録。
英語箱入り。
¥ 600 千120

UFO contactee

B5版 10頁。上質紙使用。¥300
送料 ¥120振替でGAP宛ご注文下さい。(切手代用は不可。現金書留もご連絡下さい)

日本GAP

会員募集

●前号の「驚異の高松市円盤降下事件」に続いて今度は「八ヶ岳に出現した円盤」事件が登場しました。テレバシーと呼ばれた女生徒たちはまだ健在なようですが、詳細が公表されたのはこれが最初です。執筆者はGAP会員ではありませんが、アダムスキー問題に精通した人です。熟練含味の程を。
●富士山麓にUFO頻出」と「車山高原で円盤を撮影」も静岡支部の熱意ある人たちがよるテレバシー送信観測の貴重な体験記です。本号はテレバシーによる呼びかけのUFO観測記事の特集としました。読者も試みて下さい。ただし猟奇趣味的な興味本位ではうまくゆかないでしょう。その点富士山麓に……」がよい参考になります。
●正巻は遠藤昭則氏の「金星文字解読研究」です。電気工学を専攻し、しかも超能力者として活躍している同氏の鋭敏な感知力によって驚異的な成果があることを期待します。
●「アダムスキー(脚座)で活躍するゲニエル・ロス氏は、日本GAPの有力な海外同志として浮上してきた人です。今年はUFOの着書を出す予定だそうです。そのときは本誌で紹介しましょう。
●編者の拙稿「ノアの箱舟とアブラハム」も面白いこと他の記事にひけをとらないと自負します。伊藤氏による松山事件の詳細な報告をご期待下さい。
●「ムーンゲート」は次第に大詰に近づき、次号で完結します。今回も著者独自の推理により夏のアバタの原因が展開しています。
●今夏八月に実施予定の「エジプト・エルサレム宇宙考古学の旅」は好評で、三月末現在で参加申込者は八名に達しています。この調

編集後記

子ならば二十名を超えると思われまますので、旅行は実現するでしょう。希望者は早目にお申込下さい。万一キャンセルしても申込金は返却されますから心配無用です。
●三月二十四日は松山支部大会が開催されて盛況でした。四月二十八日は静岡支部大会、五月五日は茨城支部大会、六月二十三日は旭川・札幌合同支部大会と活発に催しが続きます。多数ご参加下さい。宇宙のフイーリングの高揚と友情の確立に絶好の機会です。
●地方支部代表の交歓。青森支部は中根豊氏から鈴木武男氏に。札幌支部は伊藤重信氏から高野省志氏にかわりました。また和歌山県原支部として紀南会が誕生。ご支援の程を。
●四月より英文版Uコン(不定期刊)の発行にふみきります。本誌ほどの厚みはありませんが、高松事件を筆頭に有益な記事が掲載されています。海外の諸団体に配布して日本GAPの活動状況や日本におけるUFO目撃事件を紹介し、国際的な活動展開の媒体とします。英語学習にも好適ですから上記の広告を参照の上ご注文下さい。
●本誌は約百名のボランティアの方々により都内と全国主要都市の書店に直接届けられています。宇宙のカルマをもつ人の発端とスペース・プログラムに協力の意味で書店即しの意志ある方は一報下さい。説明書を送ります。

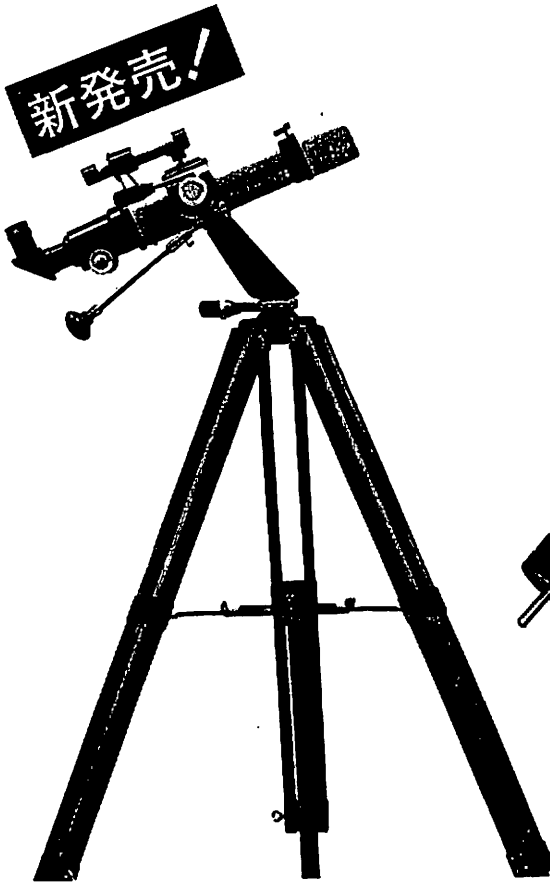
●日本GAP本部の住所表記は三月十五日より一部分が変更されています。
旧「東京都江戸川区本一色町第1-111
新「東京都江戸川区本一色町第5-111
●読者の原稿を募集します。どしどしお寄せ下さい。次号は七月二十日発行です。(K)

日本GAP機関誌、季刊 夏季号
UFO contactee 89号
編集発行人 久保田八郎
発行所 日本GAP
〒133 東京都江戸川区本一色町第5-111
TEL (03) 6511-0958
振替東京 4-355912
一九八五年四月二十日発行
定価七〇〇円・送料二〇〇円

光学性能に優れた サテライト天体望遠鏡。

R-6 定価 ¥320,000

D=152mm・F=2800mm

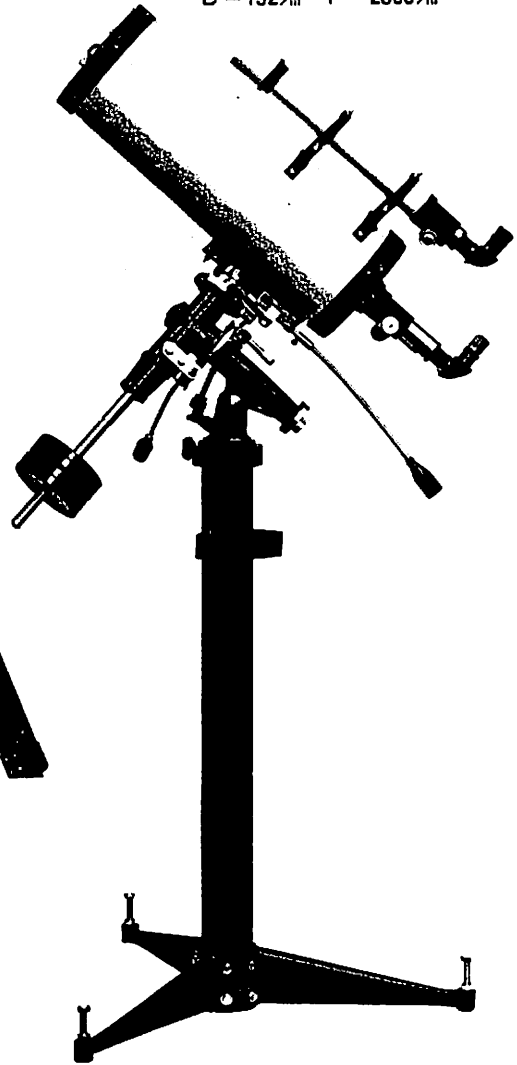


短焦点屈折経緯台

A-63 F 定価 ¥38,500
送料 ¥1,500
D=60mm F=400mm

〈付属品〉

SR-5mm・HM-12.5mm
ダイヤゴナル、ムーングラス
5倍17mmファインダー
木製三脚付



■特約店 群馬：前橋至誠堂
TEL. (0272)65-2718
東京：アトム
TEL. (03) 866-5255



株式会社 山本製作所

〒174 東京都板橋区大原町5-3
TEL. 03 (966) 2408

UFO contactee 89号 昭和60年4月20日発行 発行所 日本GAP 〒133東京都江戸川区本一色町35-511 定価七〇〇円・送料二〇〇円